

解題

詩格刊誤

二卷

日尾

約著

日尾約、字は省三、省齋と號す、江戸の人、荆山の養子となり、荆山の女直子を妻とせしが蚤く歿せり。

此書は、専ら韻法及び聲律を論ず、韻法に於いては武元登登庵の古詩韻範の謬誤を擧げ、例を引いて之を辨ず、其餘、古詩の平仄、近體の拗句を論ずるに、一、唐詩を引いて之を證せり、皆鑿鑿として、察に中らざるはなし、(嘉永三年三都書肆刊)

1
詩格刊誤序

騷人韻士之遊名山勝地者，危蜂峻崖能躋，其巔幽澗深潭能窺，其底茂林之蓊鬱，虛洞之閎大，能探其佳境，詭石之硜礧，磈礧怪木之輪困偃蹇，珍禽奇獸之翱翔翻翮，駉駉獾獠能翫其殊狀異態，自以爲得矣，然而不按之地圖，不質之土人，則或涉其地而不詳其境，或記其形而不知其名，惛罔慌忽，見而夢之，其自以爲得矣者，果是耶？雖然，地圖所載，土人所傳，如潘吾之迹，華山之博，不能覈其虛實，甘受其欺，則啞語聾聞，亦焉足論。名山勝地之真趣哉！學詩者亦然。古奧則取之，二雅婉曲則取之，國風楚辭醇朴雄渾則取之，漢魏彬彬蔚綺靡則取之，晉宋清潤瀏亮則取之，初唐悲壯飄逸，咀晤恢偉則取之，李杜韓諸子旁及於宋元明清，披其叢拔其萃，可謂得矣，然而不

能求之格律音韻之間，則不得知古人之所以大過於人也。雖然，徒執近人憶度無稽之說，因循詭隨，自以爲得矣。猶如遊名山勝地，而信潘吾之迹，華山之博也，亦焉足論詩賦之真趣哉。今也德澤溢四海，文運隆興，騷人韻士，崛起東西者，曰唐曰宋曰元明清，各其所欲鬪奇爭巧，非不美也。而至辨格律音韻，寂無聞焉。或僅有之，亦所謂潘吾之迹，華山之博耳。我師友省齋日尾先生，幼奉其家學，以究經義爲務。旁嗜詩賦，觸事遇景，諷詠自娛。歲未三十，已泝於李杜韓諸子，高跨於宋元明清之上。而其自視，缺然不敢求聞達，余甚惜之。懲憑鐫其集，先生曰：否，覆醬之具，何足以罪梨棗哉。雖然，負人之情實，以自退，其頑可惡也。無已，則有一焉。余嘗所稿詩格刊誤二冊，復是雖咕嗶餘唾，子辱一閱，幸有可取者，則鐫之，亦不妨矣。余欣然而喜，受而讀之，則先生遍遊詩中之名山勝地，按之，地圖質之，土人潘吾。

一
 之迹、華山之博、一一辯斥之、歸至當而止、其功偉矣、蓋我邦振古言
 詩者、不乏其人、而論格律音韻、特縱其美、未有如此書、詳且盡也、余
 唯恐公行之不速、乃謀同志、以促上梓、先生縱令不求聞達、名必由
 此而聞、聲必由此而達、豈不悅乎、豈不樂乎、是爲序。

嘉永三年庚戌正月

三州 宇都野季武撰

詩格刊誤目錄

卷 上

古詩韻法.....一

古 韻.....三三

古詩平仄.....五〇

卷 下

五言律拗句.....一

七言律拗句.....八

絕句拗體.....二〇

諸拗句.....三三

律 韻.....二八

兩 音.....四二

對 偶.....五〇

詩格刊誤目錄

日本詩話叢書

二

用重疊字……………五八

詩語錯綜……………六〇

詩格刊誤上卷

江戸 省齋 日尾約省三 著

古詩韻法

輓近世之論古詩者、專以韻法爲主、刻舟膠柱、轉轉爲說以迷人、何過甚也、蓋有詩斯有韻、有韻斯有法、所謂法也者、非刻舟膠柱之謂也、曲節斡旋不得、然而然之謂也、故可以古詩論韻法、而不可以韻法論古詩也、雖然古人既已有法、今人不得、果不由其轍、由其轍有道、能有詩有韻有法、泝李杜二公之上而求之、則資之左右以逢其原、縱橫無礙、莫不如意、而後古詩可得而言也已、近會

古詩韻法

輓近世の古詩を論する者、専ら韻法を以て主と爲し、刻舟膠柱、轉轉説を爲し、以て人を迷はす、何ぞ過てるの甚しきや、蓋し詩有りて斯に韻有り、韻有りて斯に法有り、謂はゆる法とは、刻舟膠柱の謂に非ざるなり、曲節斡旋、然らざるを得ずして而して然るの謂ひなり、故に古詩を以て韻法を論すべく、而して韻法を以て古詩を論すべからざるなり、然りと雖へども、古人既已に法あれば、今人果して其の轍に由らざるを得ず、其の轍に由るに道有り、能く詩有り、韻有り、法有ることを知りて、李杜二公の上に泝りて而して之れを求めば、則ち之れを左右に資りて以て其の原に逢ふ、縱橫無礙、意の如くならざるは莫し、而して後に古詩得て而して言ふべきのみ、近會備前の武元質、古詩韻範を著す、後進を誘くの意頗る勉めた

備前武元質著古詩韻範、誘後進之意雖頗勉乎、其爲說所謂刻舟膠柱固陋者居多、今舉其謬誤之尤者、匡之、併論韻法以授子弟焉。

韻範引朱綠池曰、古詩韻法與賦同、賦逐段換韻、換韻處卽段落、段落必轉意、是其定法、我中華則人人習之、雖兒輩知之、日本則不然、雖名家多失也、余考之古人詩、或有不與其說合者、後得浦起龍讀杜心解讀之、其凡例云、如轉韻古風、自宜依韻分截、又暮秋枉裴道州手札詩註云、憶子四句別爲一段、韻脚仍前、意思領下、他日四句、又別爲一段、韻亦仍前、意亦轉遞、言別爲一段、法賞換韻、而仍前者非常法也、又讀王堯衢古唐詩合解

りと雖へども、其の説たる謂ゆる刻舟膠柱固陋なる者居多、今其の謬誤の尤なる者を擧げて之れを匡し、併せて韻法を論し以て子弟に授く。

二

韻範に、朱綠池を引きて曰く、古詩の韻法は賦と同じ、賦は段を逐ひて韻を換ふ、韻を換ふる處は卽ち段落なり、段落は必ず意を轉ず、是れ其の定法なり、我が中華にては則ち人人之れに習ひ、兒輩と雖へども之れを知る、日本にては則ち然らず、名家と雖へども、多く失するなり、余之れを古人の詩に考ふるに、或は其の説と合はざる者あり、後に浦起龍の讀杜心解を得て之れを讀むに、其の凡例に云ふ、韻を轉ずる古風の如きは、自ら宜しく韻に依りて分截すべし、又、暮秋、裴道州の手札を枉げらるゝ詩の注に云ふ、憶子の四句は別に一段と爲す、韻脚前に仍り、意思、下を領す、他日の四句、又別に一段と爲す、韻亦前に仍り、意亦轉遞す、別に一段と爲せば、法當に韻を換ふべし、而して前に仍る者は常法に非ざることを言ふなり、又、王堯衢の古唐詩合解を讀むに云ふ、古風中、凡そ

云、古風中、凡轉韻處、意思必有轉換、得此等說、信綠池之不妄、雖然其說纒舉一隅耳、豈可能盡韻法之變化哉云云、韻總原用國音今譯漢語以從簡便約案、班孟堅曰賦者古詩之流也、以是觀之、古詩與賦、韻法之同固勿論也、所謂換韻必轉意、是不必然、古詩有換韻而不轉意者、有轉意而不換韻者、於是乎說者有常法變化之目、而未知其所以有變化之故也、約請管論之、蓋古詩韻法無所甚拘、一段之意雖未盡韻中無可使用字、則換韻、意雖已盡、有可使用字、則不換韻、不換韻、則雖轉意、節簇不變、換韻、則雖不轉意、節簇變焉、故古詩以必換韻處、爲一篇之大段落矣、凡換韻、可以節簇辨之、而不可以轉意求之、嗚呼甚哉綠池

を轉ずる處は、意思必ず轉換あり、此等の說を得て、綠池の妄ならざるを信ず、然りと雖へども、其の説纒に一隅を舉ぐるのみ、豈に能く韻法の變化を盡すべけんや云々（韻總原と國音を用ふ、今漢譯に譯す、以て簡便に從ふ）約案するに、班孟堅曰く、賦は古詩の流なりと、是れを以て之れを觀れば、古詩と賦と、韻法の同じきこと、固より論するなし、謂はゆる韻を換ふれば、必ず意を轉ず、是れ必ずしも然らず、古詩は、韻を換へて而して意を轉ぜざる者あり、意を轉じて而して韻を換へざる者あり、是に於てか、說者に常法變化の目あり、而して未だ其の變化ある所以の故を知らざるなり、約請ふ書みに之れを論ぜむ、蓋し古詩の韻法甚だ拘る所無し、一段の意未だ盡きずと雖へども、韻中に使用すべき字無きときは、則ち韻を換ふ、意已に盡くと雖へども、使用すべき字有るときは、則ち韻を換はず、韻を換へざるときは、則ち意を轉ずと雖へども、節簇變ぜず、韻を換ふるときは、則ち意を轉ぜずと雖へども、節簇變ず、故に古詩は、必ず韻を換ふる處を以て、一篇の大段落と爲す、凡そ韻を換ふことは、節簇を以て之れを辨すべくして、而して意を轉ずるを以て之れを求むべからず、嗚呼甚しいかな綠池の人を認ふるや、若し中華にて

之誣人也。若中華則人人習之、雖兒輩知之、
 乎、浦起龍、王堯衢等、無著書以論古詩韻法、
 之理矣、矛盾之說、使人噴飯、或曰、今人據何
 得、知音韻節、而詳之、不如從換韻、必轉意
 說之、簡且易也、曰、非也、夫人有志、而後有詩、
 有詩、而後有音韻、有音韻、而後有節、而志
 與、詩古今一也、故多讀古人詩、潛心翫之、則
 神之與、詩、玄同融會、音韻節、洋洋乎盈耳
 矣、是蓋可與識者語、而不可與不識者言也、
 學者不能曉此旨、徒局促於韻法、而作古詩、
 則措辭失宜、左顧右躡、不免不病而呻、不歎
 而笑、何遑言其志哉、如斯則古詩、恐將墜地
 矣、且子知夫作草書者乎、能得法者、運筆縱
 橫、其體不必肖古人、而其神飛動、巧作湧雲

は則ち人人之れを習ひ、兒輩と雖へども、之れを知らば、
 浦起龍、王堯衢等、書を著して以て古詩の韻法を論ずる
 の理無し、矛盾の説人をして噴飯せしむ、或人曰く、今人
 何に據りて、音韻節、を知りて而して之れを詳にするこ
 とを得む、韻を換ふれば必ず意を轉ずるの説の簡にして
 且つ易なるに従ふに如かざるなりと、曰く、非なり、夫れ
 人、志ありて而して後に詩あり、詩有りて而して後に音
 韻あり、音韻ありて而して後に節、あり、而して志と詩
 と古今一なり、故に多く古人の詩を讀み、心を潜めて之
 れを翫ぶときは、則ち神と詩と、玄同融會、音韻節、洋洋
 乎として耳に盈つ、是れ蓋し識者と語るべく、而して不
 識者と言ふべからざるなり、學者此の旨を曉る能はず
 して、徒に韻法に局促して、而して古詩を作るときは、則
 ち措辭宜しきを失ひ、左顧右躡、病ますして、而して呻し、
 歎せずして、而して笑ふを免れず、何ぞ其の志を言ふに
 遑あらむや、斯くの如くなるときは、則ち古詩恐らくは
 將に地に墜ちむとす、且つ子、夫の草書を作る者を知る
 か、能く法を得る者は、運筆縱橫、其の體、必ず古人に肖さ
 るも、而かも其の神飛動し、巧に湧雲躍龍の勢を作し、能
 く人をして、驚嘆稱美して、而して已まざらしむ、法を得

躍龍之勢能使入驚嘆稱美而不可得、不能得、法者徒摸其形、而其精委、非死蛇、則蚯蚓、爲醜態以取入笑耳、古詩韻法亦然、能學之者、雖信手押韻、格自正法、自具矣、不能學之者、雖尅意用韻、要之瞽趨冥蹈、終歸於無法矣、

又云、王堯衢古唐詩合解、舉崔顥代閨人答輕薄少年詩云、此篇五韻四轉、古詩常調也、是四句一轉、而五解五韻也、又舉人日寄杜二拾遺詩云、此篇三解三韻、是古風正調、與江上吟同、舉江上吟云、此篇三解不轉韻、據此說、四句一解之爲常法、可知矣、約案、古樂府、王僧虔云、古曰章、今曰解、明郎瑛七修類

葉二十四辨證類

云、古之樂府詩章、皆被之於樂、今

詩格刊誤卷上

る能はざる者は、徒に其の形を摸して、而して其の精委、不^テ死蛇に非されば、則ち蚯蚓、醜態を爲して、以て人の笑ひを取るのみ、古詩の韻法も亦然り、能く之れを學ぶ者は、手に信せて韻を押すと雖へども、格自ら正しく、法自ら具す、能く之れを學ばざる者は、尅意して韻を用ふと雖へども、之れを要するに瞽趨冥蹈、終に無法に歸せむ。

又云、王堯衢の古唐詩合解に、崔顥の閨人に代りて輕薄少年に答ふる詩を擧げて云く、此の篇、五韻四轉、古詩の常調なりと、是れ四句一轉して、而して五解五韻なり、又、人日杜二拾遺に寄する詩を擧げて云く、此の篇、三解三韻、是れ古風の正調、江上吟と同じ、江上吟を擧げて云く、此の篇、三解三韻を轉せずと、此の説に據るに、四句一解の常法たること知るべしと、約案するに、古樂府に、王僧虔云く、古に章と曰ひ、今に解と曰ふ、明の郎瑛の七修類葉に(二十四辨證類)云く、古の樂府の詩章は皆之れを樂に被らしむ、今樂府數句の後に、則ち一解と曰ふ、又數句を二解と曰ふ、此くの如く言ふは蓋し即ち古人は、一段

樂府數句後、則曰「一解」、又數句曰「二解」、如此言者、蓋卽古人之一段義終、則於「瑟」上解「一柱馬」也、又一段、則又解「一柱馬耳」、詩之曰「一章幾章者」、蓋說文音十成章、十者數之終、詩畢亦樂之一終也、故曰「一章、由是觀之、解卽章也、夫詩體裁雖各異、莫不出於三百篇、余未曾聞三百篇有四句一章之常法也、不知何物狡兒、吐此杜撰妄說、左之以陷人於大澤也、可疾哉、劉勰文心雕龍云、賈誼枚乘、四韻輒易、劉歆桓譚、百韻不遷、亦各從其志也、徐子能而庵詩話云、作古詩、以解數爲主、然須變換、不然以四句板板排下去、有何生趣、設使堯衢聞此等說、則應膽落舌蹙、以羞死矣、凡作古詩、句無多寡之定、韻無長短之限、

義終れば、則ち瑟上に於て「一柱馬」を解くなり、又一段なるときは、則ち又「一柱馬」を解くのみ詩の「一章幾章」と曰ふは、蓋し説文に、音十を章と成す、十は數の終りなり、詩の畢りは亦樂の「一終」なり、故に「一章」と曰ふ、是れに由りて之れを觀れば、解は卽ち章なり、夫れ詩は體裁各異なりと雖ども、三百篇より出でざるは莫し、余未だ會て三百篇に四句一章の常法あることを聞かざるなり、知らず何物の狡兒か、此の杜撰の妄説を吐きて之れを左し、以て人を大澤に陥れしむるや、疾むべきかな、劉勰の文心雕龍に云ふ、賈誼枚乘は、四韻にて輒ち易へ、劉歆桓譚は、百韻遷らず、亦各其の志に従ふなり、徐子能の而庵詩話に云ふ、古詩を作るに、解數を以て主と爲す、然れども須らく變換すべし、然らずして、四句を以て板板排下し去らば、何の生趣かあらむ、設使堯衢にして、此等の説を聞かば、則ち應に膽落ち舌蹙りて、以て羞死すべし、凡そ古詩を作る、句に多寡の定め無く、韻に長短の限無し、解と段との如きは篇成りて而して自ら分る、豈に預め之れを定めて以て篇を成す者あらむや、胡應麟の詩數に

(内篇卷三) 云ふ、凡そ詩は、諸體皆編鑿あり、惟だ歌行は、離騷樂府より出づ、故に極めて散漫縱橫、初學當に手を下

如解與段篇成而自分豈有預定之以成篇者哉胡應麟詩數卷內三云凡詩諸體皆有繩墨惟歌行出自離騷樂府故極散漫縱橫初學當擇易下手者若夫四句一解者胡氏所謂易下手者乎或曰如子之說古詩恐至於亂雜無章曰否詩亦藝苑之一難事也吾儕不才每上吟榻意沮手縮雖欲亂雜無章不可得也如子所虞則是盲而不避險擊而不懼雷者耳固不足辨也又案天漢浮槎散人秋坪新語卷七云金聖歎所著解唐詩五七言律無論義理必割然中分上四句爲前解下四句爲後解穿鑿乖謬當時人戲稱爲腰斬唐詩云云後坐誹謗腰斬於市咸以爲中分唐詩蓋其識云此雖非所關係古詩以四句

し易き者を選ふべし夫の四句一解の者の若き胡氏の謂ゆる手を下し易き者か或人曰く子の説の如くなれば古詩恐らくは亂雜無章無きに至らむ曰く否詩も亦藝苑の一難事なり吾が儕不才吟榻に上る毎に意沮し手縮む亂雜無章からむと欲すと雖ども得べからざるなり子が虞る所の如きは則ち是れ盲にして而して險を避けず擊にして而して雷を懼れざる者のみ固より辨するに足らざるなり又案するに天漢の浮槎散人の秋坪新語(卷七)に云ふ金聖歎の著す所の解唐詩に五七言律は義理を論ずること無く必ず割然中分し上の四句を前解と爲し下の四句を後解と爲すと穿鑿乖謬當時の人戲れに稱して唐詩を腰斬すと爲す云々後に誹謗に坐し市に腰斬せらる咸以爲へらく唐詩を中分せしは蓋し其の識と云ふ此れ古詩に關係する所に非ずと雖ども四句を以て一解と爲すこと堯衢以前に既に其の説あり聊か此に付して以て聞を廣ふす。

爲一解、堯衢以前既有其說、聊付於此、以廣聞。

又云、換韻以平仄次用爲常法、蓋韻換則音節變焉、故平仄次用、則音節抑揚得其宜焉、古人詩中、同聲相轉者甚少、試檢杜全集、古詩百四十一首、換韻處通計百九十七、而平轉平者二十、仄轉仄者二十九、東坡全集、古詩三百首、平轉平者七、仄轉仄者九、此二大家多變化之作、而其例十無一二、其常與變、於是乎可知也、吾邦諸名家古詩、多用平韻、蓋不用意於韻法也、通首轉用平韻、漢詩頗多、唐以下甚少、音韻非吾邦之所能詳也、宜守平仄次用之常法、約案詩自然之人韻、豈容此齷齪之軌法哉、詩藪內編卷三云、蕭子顯、王

又云、韻を換ふる、平仄次用するを以て常法と爲す、蓋し韻換れば則ち音節變ず、故に平仄次用すれば、則ち音節抑揚其の宜しきを得るならむ、古人詩中、同聲相轉する者甚だ少し、試に杜が全集を検するに、古詩百四十一首、韻を換ふる處、通計百九十七、而して平より平に轉する者二十、仄より仄に轉する者二十九、東坡全集、古詩三百首、平より平に轉する者七、仄より仄に轉する者九、此の二大家、變化の作多し、而るに其の例十に一二無し、其の常と變と、是に於てか知るべきなり、吾が邦の諸名家の古詩、多く平韻を用ふ、蓋し意を韻法に用ひざるなり、通首、平韻を轉用すること、漢詩には頗る多し、唐以下には甚だ少し、音韻は、吾が邦の能く詳にする所に非ざるなり、宜しく平仄次用の常法を守るべし、約案するに、詩は自然の人類、豈に此の齷齪の軌法を容れむや、詩藪(内編卷三)に云ふ、蕭子顯、王子淵、制作浸繁なり、但だ通章尙平韻を用ひて轉じ、七字句を成す、故に之れを讀むに、猶未だ大に暢びず、王楊諸子の歌行に至りて、同は則ち

子淵制作浸繁、但通章尙用平韻轉、七字成句、故讀之猶未大暢、至王楊諸子歌行、韻則平仄互換、句則三五錯綜、而又加以開合、傳以神情、宏以風藻、七言之體、至是大備、要惟長篇鉅什、叙述爲宜、用之短歌、紆緩寡態、於是高岑王李出、而格又一變矣、然則平仄互換、自是一體、非盡然也、且少陵集、平仄不用者、都四十九、又檢青蓮集、古詩一百六十二首、換韻處通計三百六十九、雖仄轉仄者少、平轉平者七十一、未可謂十無一二、唯東坡集特少、是有故而然、今詳言之、宋洪邁容齋續筆三云、唐以賦取士、而韻數多寡、平側次叙、元無定格、故有三韻者、花萼樓賦、以題爲韻、是也、有四韻者、黃荑賦、以呈瑞聖朝舞

平仄互に換へ、句は則ち三五錯綜す、而して又加ふるに開合を知てし、傳くるに神情を以てし、宏むるに風藻を以てす、七言の體、量に至りて大に備る、要するに、惟だ長篇鉅什のみ叙述宜しと爲す、之れを短歌に用ふれば、紆緩態寡し、是に於て、高岑王李出で、而して格又一變せり、然らば則ち平仄互に換ふるは、自ら是れ一體、盡く然るに非ざるなり、且つ少陵集に平仄次用せざる者、都て四十九、又、青蓮集を檢するに、古詩一百六十二首、韻を換ふる處、通計三百六十九、仄より仄に轉する者、少しと雖ども、平より平に轉する者、七十一、未だ十に一二無しと謂ふべからず、唯だ東坡集特に少し、是れ故有りて、而して然り、今詳に之れを言はむ、宋の洪邁の容齋續筆に十三云ふ、唐は賦を以て士を取る、而して韻數の多寡、平側の次叙、元と定格無し、故に三韻の者あり、花萼樓の賦に題を以て韻と爲す、是れなり、四韻の者あり、黃荑の賦に、題を聖朝に呈するを以てし、舞馬の賦に、之れを天延に奏するを以てし、丹甌の賦に、國豐年有るを以てし、秦階六符の賦に、元亨利正を以て韻と爲す、是れなり、五韻の者あり、金莖の賦に、日華川上に動くを以て韻と爲す、是れなり、六韻の者あり、止水翹翹人鏡、三統指歸、信豚魚に及

馬賦以奏之天廷、丹雘賦以國有豐年、泰階六符賦以元亨利正爲韻、是也、有五韻者、金莖賦以日華川上動爲韻、是也、有六韻者、止水翹翹人鏡、三統指歸、信及豚魚、洪鐘待撞、君子聽音、東郊朝日、蟠日祈天、宗樂德訓、賈子諸篇是也、有七韻者、日再中射己之鵠、觀紫極舞、五聲聽政諸篇是也、八韻有二平六側者、六瑞賦以儉故能廣被褐懷玉、日五色賦以日麗九華、聖符土化、徑寸珠賦以澤浸四荒、非寶、遠物爲韻、是也、有三平五側者、宣耀門觀試舉人以君聖臣肅謹擇多士、懸法象魏以正月之吉、懸法象魏、玄酒以薦、天明德有古遺味、五色土以王子畢封、依以建社、通天臺以洪臺獨出、浮景在下、幽蘭以遠芳

ぶ、洪鐘撞くを待つ、君子言を聴く、東郊に日に朝す、蟠日に天に祈る、宗樂德賈子を訓ふる、諸篇、是れなり、七韻の者あり、日再び中す己の鵠を射る、紫極の舞を觀る、五聲政を聽く、諸篇、是れなり、八韻に、二平六側の者あり、六瑞の賦に、儉故に能く廣く、褐を被玉を懷くを以てし、日五色の賦に、日九華に麗しく、聖土德に符すを以てし、徑寸の珠の賦に、澤四荒を浸す、遠物を寶とするに非ざるを、以てす、是れなり、三平五側の者あり、宣耀門に舉人を試むを觀るに、君聖臣肅謹みて多士を擇ぶを以てし、法を象魏に懸くるに、正月之吉、法を象魏に懸くるを以てし、玄酒に、天に明德を薦む、古の遺味有るを以てし、五色の土に、王子畢く封ぜられ依りて以て社を建つを以てし、通天臺に、洪臺獨出、浮景下に在りを以てし、幽蘭に、遠芳人を表ひて、悠々絶え不るを以てし、日月合璧に、兩曜相合し、之れを候するに差は不るを以てし、金柅に、直に而して能く一、斯れ動を制す可きを以て韻と爲す、是れなり、五平三側の者あり、金礦を用ふるに、商の高宗、傳說の官を命ずるを以て韻と爲す、是れなり、六平二側の者あり、旗の賦に、風日雲舒び、軍容清肅を以て韻と爲す、是れなり、大和(約曰く、唐の文宗の年號)より以後始めて八韻を以

襲人悠久不絕、日月合璧、以兩曜相合候之不、遺金梃、以直而能一斯可制、動爲韻、是也、有、五平三側者、金用、禩、以商高宗命、傅、說之、官爲韻、是也、有、六平二側者、旌賦、以風、日、雲、舒、軍、容、清、肅、爲、韻、是也、自、大、和、約曰唐文、宗年號、以、後、始、以、八、韻、爲、常、唐、莊、宗、時、嘗、覆、試、進、士、翰、林、學、士、承、旨、盧、質、以、后、從、諫、則、聖、爲、賦、題、以、堯舜禹湯傾心求過爲韻、舊例、賦韻四平四側、質所出韻、乃五平三側、大爲識者所誦、豈非是時既有定格乎、國朝太平興國約曰宋、大、宗年號、三年九月、始詔、自今、廣文館、及諸州府、禮部、試進士、律賦、竝以平側、次用韻、其後又有不、依、次、者、至、今、循、之、從、是、觀、之、自、中、唐、至、北、宋、天子有詔、律賦、押韻、平仄、次用之、格、定、矣、當

て常と爲す、唐の莊宗の時、嘗て進士を覆試す、翰林學士承旨盧質、后、諫に從へば、則聖を以て賦の題と爲し、堯舜禹湯心を傾けて過を求むを以て韻と爲す、舊例に、賦の韻は四平四側なり、質の出だす所の韻は、乃ち五平三側、大に識者に誦らる、豈に是の時、既に定格有るに非ずや、國朝太平興國約曰、宋の、大、宗の年號、三年九月、始めて詔すらく、今より廣文館、及び諸州府の禮部進士を試むるに、律賦竝に平側を以て韻を次用せよと、其の後、又次に依らざる者あり、今に至るまで之れに循ふと、是れによりて之れを觀れば、中唐より北宋に至るまで、天子詔ありて、律賦の押韻平仄次用の格定る、當時の古詩固より之れに從はざるを得ず、東坡集に、同聲相轉する者特に少き所以は、此れが爲めの故なり、此等の卑格假令ひ今日に存するも、我敢て從はず、況むや洪邁以來、既に此の格に由らざるをや、元質固く此の説を執る、而して韻範の卷末に載する所の綠池の宮城野の秋、壽衛山の松二、鐘の賦、其の韻、平仄次用せず、何ぞ其の説の自ら相抵牾するや、或人曰く、此の賦は、則ち其の題を以て韻と爲す、故に押韻東に始めて質に終る、固より怪むに足らざるなり、曰く否、文苑英華に載する所の律賦、多く成語を以て韻

時古詩固不得、不從之、東坡集、同聲相轉者、所以特少者、爲此之故也、此等卑格、假令存於今日、我不敢從矣、況洪邁以來、既不由此格者乎、元質固執此說、而韻範卷末所載、綠池宮城野萩、壽衛山松二筆賦、其韻平仄不次用、何其說之自相牴牾也、或曰、此賦、則以其題爲韻、故押韻始、東終質、固不足、惟也、曰否、文苑英華所載律賦、多以成語爲韻、而成語而不拘平仄、或先後而次用平仄、次用平仄者、大抵係中唐以下之作、皇甫湜唐文宗時人展薄冰賦、以戒慎之心、如履冰上、爲韻云、冰之積也不厚、人之履也難任、此馬投足、可爲寒心、彼墊溺之攸慮、在恐懼而誠深、慎同、數馬之人、然非萬石誠若、倚衡之子、不以千金、

と爲す、而して或は成語のまゝにして而して平仄に拘らず、或は先後して而して平仄を次用す、平仄を次用する者は、大抵中唐以下の作に係る、皇甫湜唐の文宗の時の人、薄冰を履むの賦に、戒慎の心、冰上を履むが如きを以て韻と爲して云く、冰の積むや厚からざれば、人の履むや任じ難し、此篇に足を投ず、寒心を爲す可し、彼の墊溺の慮る攸、恐懼して誠に深きに在り、慎みて馬を數ふるの人に同うして、然かも萬石に非ず、誠め衡に倚るの子の若くにして千金を以てせず、水始めて凝り、冰未だ壯ならず、六尺の厚と爲るに乏しく、七月の尙ふ所に非ず、蠡斯の股にして猶且つ同じからず、齊人の執にして會て以て況ふる無し、鞠躬して涉らむと欲すと雖ども、何ぞ跬歩だも能く抗せむ、累卵の危きに居るに同じきこと有り、積薪の上に座するに殊なること無し、股慄して茲に在り、魂之く所に驚く、怵惕して前むことを求むる、豈に人心の測り難きのみならむ、趙起して長るゝこと有り、狐性の疑多きに類す、毎に縮々として墜ちむとするが若く、常に兢兢として自持す、暮に巢くふと鷄に比す、淵に臨む將是れ擬す、丈夫は處らず、斯れ其の身を没せむことを畏る、夫子の結るゝ所、惟だ耻を減るに於けるのみな

水始凝、冰未壯、乏六尺之爲、厚非七月之所。尙鑫斯之服、兮猶且不同、齊人之執、兮曾無以況。雖鞠躬而欲涉、何跬步之能抗、有同居累卵之危、無殊坐積薪之上、股慄兮在茲、魂驚於所之、怵惕求前、豈人心之難測、趙起有畏、類狐性之多疑、每縮縮而若墜、常兢兢而自持、與巢幕兮焉比、將臨淵兮是擬、丈夫不處、斯畏其沒身、夫子所懲、不惟於滅趾、徐子忘其故步、尙書越其素履、行自失於佻佻、罵無施於凡几、視之豈無履而若虛、非北陸積堅之始、是東風解凍之餘、水蟲隔而織鱗、必露秋蟬比而輕翼、不如當履道未成、其難汜濟、縱善行無迹、不可躊躇、兢兢圖其不敗、震攝謂其將壞、步搖搖爾式彰、君子之行、身飄

らず、徐子其の故歩を忘れ、尙書其の素履を越ゆ、行ひ自づから佻佻に失し、罵几几に施すこと無し、之れを視るに豈に無からむや履みて而して虚しきが若し、北陸堅を積むの始めに非ず、是れ東風凍を解くの餘なり、水蟲隔りて而して織鱗も必ず露れ、秋蟬比して而して輕翼も如かず、道を履みて未だ成らざるに當りて、其れ汜ひと濟り難し、縱ひ善行迹無きも、躊躇すべからず、兢兢して其の敗れざるを圖り、震解して其れ將に壞むと謂ふ、步搖搖爾として式つて君子の行を彰し、身飄飄然として誰か謂ふ、吾人戒めずと、如何ぞ己に克つこと此に冰を履むが若し、習坎と相類し、玉を執りて而して懲ろ可きに符す、故に是を龜みて是れ虞し、身を側て、以て進む言に足履の適を忘れて、自ら廉隅に近づく、庶くは心腑の中に藏して、悔吝を貽すこと無けむ、慎に過ぎ、寔き易きの吉を得、首を濡し容を失ふの警、靡し之れを行ふこと三思に止り、戒め實に六慎に先づ果して元質の説の如くむば、則ち綠池菴に此等の賦に效はさるむや、吾が邦正享中、諸家の賦する所の古詩韻法、議すべき者ありと雖ども、然れども、未だ其の多く平韻を用ふるの故を以て之れを病ましむべからざるなり、韻範の凡

飄然誰謂邑人不戒、如何克己若此履冰、與習坎而相類、符執玉而可懲、故疊足是虞、側身以進、言忘足履之適、自近廉隅、庶藏心腑之中、無貽悔吝、得遇慎易、毫之吉、靡潘首失、容之贗行之止、於三思、戒實先於六慎、果如元質說、則綠池豈不効此等賦哉、吾邦正享中、諸家所賦古詩韻法、雖有可議者、然未可以其多用平韻之故病之也、韻範凡例云、此編專輯唐詩、以李杜爲主、而於李詩似未始讀之者、今特舉之以示焉、其飛龍引、前有楡酒行、第二篇陽春歌、鳴雁行、玉壺吟、元丹邱歌、東山吟、寄遠、第十一篇此八首、二韻皆平、上留田行、日出入行、襄陽歌、携妓登梁王樓霞山、此四首、三韻皆平、公無渡河云、黃河西來決崑

例に云ふ、此の編専ら唐詩を輯む、李杜を以て主と爲すと、而して李詩に於ては、未だ始めより之れを讀まざる者に似たり、今特に之れを舉げて以て示す、其の飛龍引、前有楡酒行、(第二篇)陽春の歌、鳴雁行、玉壺の吟、元丹邱の歌、東山の吟、遠に寄す、(第十一篇)此の八首は、二韻皆平、上留田行、日出入行、襄陽の歌、妓を携へて梁王の樓山に登る、此の四首は、三韻皆平、公無渡河に云ふ、黃河西より來つて崑崙を決す、咆哮萬里龍門に觸る、波天を滔して堯咨嗟す、大禹百川を理し、兒啼けども家を親はず、湍を殺きて、江水を還む、九州始めて蠶麻す、其の害乃ち去つて、茫然たる風沙、髮を被むるの叟狂にして、而して凝なり、清晨流に臨むで、奚を爲さむと欲す、旁人惜まらず、妻之れを止む、公河を渡ること無れといふに、苦に之れを渡る、虎は搏つ可きも、河は濤し難し、公果して溺死して、海涓に流る、長鯨の白齒、雪山の如くなる有り、公乎公平其の間に、挂育す、盤餐悲む所、竟に還らず、と、代りて情を寄するに云ふ、君來らず、徒に怨を蓄へ、思を積むで、而して孤吟す、雲陽一たび去つて、已に遠し、巫山綠水の沈沈たるを隔つ、餘香を留めて、繡被を染む、夜瘦むと欲して、人心を愁へしむ、朝に余が馬を青樓に馳す、悦として空

崑咆哮萬里觸龍門、波滔天堯咨嗟、大禹理
 百川、兒啼不窺家、漉湮江水、九州始蠶麻、
 其害乃去、茫然風沙、被髮之叟狂而癡、清晨
 臨流欲奚爲、旁人不惜妻止之、公無渡河苦
 渡之、虎可搏河難馮、公果溺死流海澗、有長
 鯨白齒如雪山、公乎公乎挂罾其間、筌篥所
 悲竟不還、代寄情云、君不來兮徒蓄怨、積思
 而孤吟、雲陽一去已遠、隔巫山綠水之沈沈、
 留餘香、兮染繡被、夜欲寢兮愁人心、朝馳余
 馬於青樓、恍若空而夷猶、浮雲深兮不得語、
 卻惆悵而懷憂、使青鳥兮銜書、恨獨宿兮傷
 離居、何無情而兩絕、夢雖往而交疎、橫流涕
 而長嗟、折芳洲之瑤華、送飛鳥以極目、怨夕
 陽之西斜、願爲連根同死之秋草、不作飛空

の若くにして而して夷猶す、浮雲深うして語ることを得
 ず、卻つて惆悵して而して憂を懐く、青鳥をして書を銜
 ましめ、獨宿を恨み離居を傷む、何ぞ無情にして而して
 兩絶す夢往くと雖ども而かも交り疎なり、横に涕を流
 して而して長嗟す、芳洲の瑤華を折り、飛鳥を送つて以
 て目を極む、夕陽の西に斜なるを怨む、願くは連根同死
 の死草と爲らむ空に飛ぶの落花と作らずと、此の二首
 は、四韻皆平、夜坐の吟に云ふ、冬夜冬寒うして夜の長き
 を覺ゆ、沈吟久坐して北堂に坐す、冰は井泉に合し月は
 関に入る、金缸青凝つて悲啼を照す、金缸滅して啼くと
 轉た多し、妾が涙を掩ひ君が歌を聴く、歌に憂有り妾に
 情有り、情聲合して兩ながら違ふこと無し、一語入れず
 意君に従ふ、萬曲梁塵飛ぶと、此の一首は、五韻皆平、通章
 平韻を轉用する、奚ぞ翹だ漢詩隨る多きのみならむ、蓋
 し古詩は之れを平仄次用する者其の勞自ら多しと謂ふ
 は則ち可なり、之れを平仄次用するは常法なりと謂ふは
 則ち不可なり。

之落花、此二首四韻皆平、夜坐吟云、冬夜夜
寒覺、夜長、沈吟久坐坐、北堂、冰合、井泉、月入、
聞、金缸青凝照、悲啼、金缸滅、啼轉多、掩、妾淚、
聽君歌、歌有聲、妾有情、情聲合、兩無違、一語
不入意、從君、萬曲梁塵飛、此一首五韻皆平、
通章轉用平韻、奚翅漢詩頗多、蓋古詩謂之
平仄次用者、其勢自多、則可謂之平仄次用
者、常法則不可。

又云、朱綠池曰、凡古詩接法、須、蛛絲、蛛絲者、
連絡不斷之謂也、案、古詩接法、大抵有三、其
一、疊上語起下句、長安古意、以比目鴛鴦真
可羨、接得成、比目何辭死、願作鴛鴦不羨仙、
以雙燕雙飛繞、畫梁、接、好取開簾帖、雙燕、又
岑參詩、彎彎月出挂城頭、城頭月出照梁州、

又云、朱綠池曰、凡古詩の接法、蛛絲を須ふ、蛛絲と
は、連絡斷えざるの謂ひなり、案するに、古詩の接法、大抵
三あり、其の一は、上語を疊みて下句を起す、長安古意に
「比目鴛鴦真に羨む可し」を以て、比目と成るを得ば何そ
死を辭せむ、鴛鴦と作るを願うて仙を羨まずに接し、雙
燕雙飛畫梁を繞るを以て、好取す簾を開いて雙燕を帖
すに接す、又岑參の詩に「彎々月出で、城頭に挂る、城頭
月出で、梁州を照す、梁州七里十萬家、胡人半は解す琵琶

梁州七里十萬家、胡人半解彈琵琶、琵琶一曲腸堪斷、風蕭蕭兮夜漫漫、此類是也、漢蔡邕飲馬長城窟行、青青河邊草、綿綿思遠道、遠道不可思、宿昔夢見之、夢見在我傍、忽覺在他鄉、他鄉各異縣、展轉不可見、云云、此唐詩之所出也、又有隔句疊上語者、洛陽城頭桃李花、飛來飛去落誰家、洛陽女兒惜顏色、行逢落花長嘆息、又青門金鎖平旦開、城頭日出使者回、青門柳枝正堪折、路傍一日幾人別、此類是也、詩云、窈窕淑女、寤寐求之、求之不得、寤寐思服、又云、靜女其嬈、貽我彤管、彤管有煒、說釋女美、項羽垓下歌云、時不利兮、騅不逝、騅不逝兮、可奈何、皆是疊語換韻、以是觀之、其來亦久矣、又有一解中疊語者、

琵琶彈するを、琵琶一曲腸斷するに堪へたり、風蕭々として夜漫々たり、此の類是れなり、漢の蔡邕の飲馬長城窟行に、青々たり河邊の草綿々として遠道を思ふ、遠道思ふ可からず、宿昔夢に之れを見る、夢に見れば我が旁に在り、忽ち覺むれば他郷に在り、他郷各縣を異にす、展轉見る可からず、云々、此れ唐詩の出づる所なり、又句を隔て、上語を疊む者あり、洛陽城頭桃李の花飛び來り、飛び去つて誰が家に落つ、洛陽の女兒顏色を惜む、行落花に逢うて長嘆息す、又、青門の金鎖平旦に開く、城頭日出で、使者回る、青門の柳枝正に折るに堪へたり、路旁一日幾人か別ると、此の類是れなり、詩に云ふ窈窕たる淑女は、寤寐に之れを求む、之れを求めて得ざれば、寤寐に思服す、又云ふ、靜女其れ嬈たり、我れに彤管を貽る、彤管煒たること有り、女の美を說釋す、項羽の垓下の歌に云ふ、時利あらず、騅逝かず、騅の逝かざる奈何すべき、皆是れ語を疊み韻を換ふ是れを以て之れを觀れば、其の來ると亦久し、又、一解中に語を疊む者あり、芙蓉帳暖にして春宵を度る、春宵苦甚だ短くして日高うして起く、の類是れなり、而して此の例多からず、語を疊み韻を換ふを此れを常法と爲す、其の二、上句を承けて下句を起す

芙蓉帳暖度春宵、春宵苦短日高起之類、是也、而此例不多、疊語換韻、此爲常法、其二承上句起下句、以古來容光人所羨、況復今日遙相見、接爲雲爲雨、楚襄王、以以茲感歎辭、舊遊更於時事無所求、接黃金用盡還疎索、此類是也、其三別起一段、以換韻、長安古意、御史府中烏夜啼、及漢代金吾千騎來、春江花月夜、白雲一片去悠悠、及昨夜間潭夢落花、此類是也、此三法中、以蛛絲連絡法爲最要、而非盡然也、或連或斷、章法脈絡須得宜也、沈德潛論岑參與獨孤漸道別詩曰、此詩硬轉突接、不須蛛絲馬跡、古詩中別是一格、案此詩每四句換韻、九解九韻、而無一疊上語者、無一承上句者、故曰別是一格乎、所謂

「古來容光人の羨む所況むや復今日遙に相見るをや、以て、雲と爲り雨と爲る楚の襄王に接し、茲に以て感嘆して舊遊を辭せむ、更に時事に於て求むる所無きを以て、黃金用ひ盡せば還つて疎索に接す、此の類是れなり、其の三、別に一段を起して以て韻を換ふ、長安古意の、御史の府中烏夜啼、及び漢代の金吾千騎來、春江花月の夜、白雲一片去つて悠悠、及び昨夜間潭落花を夢む、此の類是れなり、此の三法中、蛛絲連絡の法を以て最要と爲す、而れども、盡く然かるに非ざるなり、或は連り或は斷え、章法脈絡須らく宜しきを得べきなり、沈德潛が、岑參の獨孤漸道に別る、詩を論じて曰く、此の詩、硬轉突接、蛛絲馬跡を須ひず、古詩中別に是れ一格と、案するに、此の詩は、四句毎に韻を換へ、九解九韻、而して一の上語を疊む者無し、一の上句を承くる者無し、故に別に是れ一格と曰ふか、謂はゆる蛛絲馬跡とは、蓋し古詩の接法にして、綠池の説と同じと、約案するに、古詩の接法、或は乍ち合ひ乍ち離る、或は忽ち來り忽ち去り、或は前解の足らざる所を補ひ、或は後段の言はむと欲する所を發し、或は遙に前を照し、或は遠く後に應ず、皆是れ造語自然、法の以て之れを縛すべき者無し、何ぞ獨り語を疊み

蛛絲馬跡、蓋古詩接法、與綠池說同、約案、古
 詩接法、或乍合乍離、或忽來忽去、或補前解
 之所不足、或發後段之所欲言、或遙照前、或
 遠應後、皆是遺語自然無法之可以縛之者、
 何獨以疊語換韻爲最要哉、且疊語而不換
 韻者亦不少矣、青蓮龍池詩、始向蓬萊看舞
 鶴、還過直石聽新鶯、新鶯飛繞上林苑、願入
 簾韶雜鳳笙、鳴臯歌、身披翠雲裘、袖拂紫煙
 去、去時應過嵩少間、相思爲折三花樹、西嶽
 雲臺歌、西嶽崢嶸何壯哉、黃河如絲天際來、
 黃河萬里觸山動、盤渦轂轉秦地雷、少陵沙
 苑行、驢驕一骨獨當御、春秋二時歸、至尊、至
 尊內外馬盈億、伏櫪在垆空大存、東坡襄陽
 樂、使君未來襄陽愁、提戈入市裏氍毹、自從

韻を換ふるを以て最要と爲さむや、且つ語を疊みて而し
 て韻を換へざる者も亦少からず、青蓮の龍池の詩に、始
 めて蓬萊に向つて舞鶴を看、還た直石を過ぎて新鶯を聽
 く、新鶯飛び繞る上林苑、願くは簾韶に入つて鳳笙に雜
 らむ、鳴臯の歌に、身に翠雲裘を披、袖に紫煙を拂うて去
 る、去る時應に嵩少の間を過ぐべし、相思へば爲に折れ
 三花樹、西嶽雲臺の歌に、西嶽崢嶸何ぞ壯なる哉、黃河絲
 の如く天際より來る、黃河萬里山に觸れて動く、盤渦轂
 轉す秦地の雷、少陵の沙苑行に、驢驕一骨獨り御に當る、
 春秋二時至尊に歸す、至尊內外馬億に盈つ、伏櫪垆に在
 りて空しく大に存す、東坡の襄陽樂に、使君未だ來らず
 襄陽愁ふ、戈を提げ市に入る、裏氍毹、氍毹雨沔を渡つて
 より、襄陽無事にして春遊多し、馬子才の邊月亭に、玉
 兎藥を擣いて誰に與へて餐せしむ、且つ豪客に與へて朱
 顏を留めよ、朱顏如し留む可くむば、恩の重きこと邱山
 の如し、寒圃通押、鹿鳴篇に、我に嘉賓有り、瑟を鼓し、笙を
 吹く、笙を吹き、簧を鼓し、管を承けて是れ將ふ、古韻又、我
 に嘉賓有り、瑟を鼓し、琴を鼓す、瑟を鼓し、琴を鼓す、和樂
 して且つ湛しむ、六月の篇に、嚴なる有り、翼なる有り、武
 の服に共す、武の服に共して、以て王國を定む、是れ語を

匪_レ委_レ南_レ渡_レ沔_レ襄陽無事多春遊馬子才邀月
 亭玉兔擣藥與誰餐且與豪客留朱顏朱顏
 如可留恩重如邱山悲調 鹿鳴篇我有嘉賓
 鼓瑟吹笙吹笙鼓簧承筐是將古又我有嘉
 賓鼓瑟鼓琴鼓瑟鼓琴和樂且湛六月篇有
 嚴有翼共武之服共武之服以定王國是疊
 語者不必換韻也又每每疊語者謂之聯錦
 別是一體杜荀鶴有雜體聯錦詩云攜手重
 携手夾江金線柳江上柳能長行人戀尊酒
 尊酒意何深爲郎歌玉簪玉簪聲斷續鈿軸
 鳴雙靛雙靛去何方隔江春樹綠樹綠酒旗
 高淚痕沾綉袍袍縫紫鵝濕重持金錯刀錯
 刀何燦爛使我腸千斷腸斷欲何言簾動眞
 珠繁眞珠綴秋露秋露沾金盤金盤湛瓊液

疊む者必ずしも韻を換へざるなり又毎々語を疊む者
 之れを聯錦と謂ふ別に是れ一體杜荀鶴に雜體聯錦の
 詩ありて云ふ手を携へ重ねて手を携ふ江を夾む金線
 の柳江上柳能く長じ行人尊酒を戀ふ尊酒意何ぞ深き
 郎の爲に玉簪を歌ふ玉簪聲斷續鈿軸雙靛に鳴る雙靛
 何の方にか去る江を隔て春樹緑なり樹緑にして酒
 旗高し淚痕綉袍を沾す袍縫紫鵝濕ふ重ねて金錯刀を
 持す錯刀何ぞ燦爛我が腸をして千斷せしむ腸斷へて
 何を言はむと欲す簾動いて眞珠繁し眞珠秋露を綴る
 秋露金盤を沾す金盤瓊液湛たり仙子歸跡無し跡無く
 又言無し海煙空しく寂寂寂寂たり古城の道馬嘶いて
 岸草芳し岸草長堤に接す長堤人攜を解く攜を解いて
 忽ち已に久し綸遼空しく首を回す首を回せば天河を
 隔つ恨むで唱ふ蓮塘の歌蓮塘何の許にか在る日暮西
 山の雨此の詩も亦語を疊み韻を換ふる處あり否ざる
 處あり詩格は偏を以て之れを論すべからず

仙子無歸跡、無跡又無言、海煙空寂寂、寂寂
 古城道、馬嘶芳岸草、岸草接長堤、長堤人解
 携、解携忽已久、緬邀空回首、回首隔天河、恨
 唱蓮塘歌、蓮塘在何許、日暮西山雨、此詩亦
 有疊語換韻處、有否處、詩格不可以偏論之、
 又云、古詩隔句對必換韻、其以兩事對言也、
 李白長干行、五月南風興、思君下巴陵、八月
 西風起、想君發揚子、又君不見李伯海、英風
 豪氣今何在、君不見裴尙書、土墳三尺蒿棘
 居、杜甫詩、故人昔隱東蒙峯、已佩含景蒼精
 龍、故人今居子午谷、獨竝陰崖白茅屋、又諸
 公袞袞登臺省、廣文先生官獨冷、甲第紛紛
 厭梁肉、廣文先生飯不足、又大兒九齡色清
 徹、秋水爲神玉爲骨、小兒五歲氣食牛、滿堂

又云、古詩は、隔句對は必ず韻を換ふ、其の兩事對し言
 ふを以てなり、李白の長干行に、五月南風興る、思ふ君が
 巴陵を下ることを、八月西風起る、想ふ君が揚子を發せ
 しことを、又、君見ずや李伯海、英風豪氣今にか在る、君
 見ずや裴尙書、土墳三尺蒿棘の居、杜甫の詩に、故人昔隱
 る東蒙峯、已に含景の蒼精龍を佩ぶ、故人今居る子午谷、
 獨竝ぶ陰崖の白茅屋、又、諸公袞々臺省に登る、廣文先生
 官獨冷なり、甲第紛々梁肉に厭く、廣文先生飯足らず、又、
 「大兒は九齡色清徹、秋水を神と爲し玉を骨と爲す、小兒
 は五歲氣牛を食ふ、滿堂の賓客皆頭を回す」張謂の詩に、
 「如今五侯客を待たず、羨む君が五侯の宅に入らざるを、
 如今七貴方に自ら尊くす、羨む君が七貴の門に入らざる
 を、帝京篇に、黃金鎖鑰して紫絲變す、一貴一賤交情見る

賓客皆回頭、張謂詩、如今五侯不待客、羨君不入五侯宅、如今七貴方自尊、羨君不入七貴門、帝京篇、黃金銷鏤素絲變、一貴一賤交情見、紅顏宿昔白頭新、脫粟布衣輕故人、楊萬里詩、我昔見子廬溪南、煙如玉雪照晴嵐、子今訪我南溪北、凜如綠驥成骨格、此類不可枚舉、約案、隔句對不換韻者、比比有之、青蓮、粉圓山水歌、西峯崢嶸噴流泉、橫石蹙水波潺湲、東崖合沓蔽輕霧、深林雜樹空芊綿、周春杜詩、雙聲疊韻譜、卷六以是爲隔句對、又樂天李夫人、君不見穆王三日哭、重璧臺前傷盛姬、又不見太陵一掬淚、馬嵬坡下念楊妃、支微通押井底引銀瓶、井底引銀瓶、細意欲上絲繩絕、石上磨玉簪、玉簪欲成中央折、元稹

紅顏宿昔白頭新なり、脫粟布衣故人を輕んず、楊萬里の詩に「我昔子を見る廬溪の南、煙は玉雪の晴嵐を照すが如し、子今我を訪ふ南溪の北、凜として綠驥の骨格を成すが如し」此の類枚舉すべからず、約案するに、隔句對にして韻を換へざる者、比々之れ有り、青蓮の粉圓山水の歌に「西峯は崢嶸として流泉を噴き、石を横へ水を蹙めて波潺湲、東崖は合沓として輕霧を蔽ひ、深林雜樹空しく芊綿」周春の杜詩雙聲疊韻譜に卷の六是を以て隔句對と爲す、又樂天の李夫人に「君見すや穆王三日哭せる重璧臺前に盛姬を傷めり、又見すや太陵一掬の淚馬嵬坡下に楊妃を念へり」支微通押井底に銀瓶を引くに、井底に銀瓶を引く、銀瓶上らむと欲して絲繩絶ゆ、石上玉簪を磨く、玉簪成らむと欲して中央より折れぬ、元稹の人道短の詩、周公周禮十二卷、能く行ふ者有れば紀綱を知る、傳説の説命三四紙、能く師とする者有れば祖宗と稱せらる、古韻東坡の運判朱朝奉の蜀に入るを送るに「我塵土の中に在れば、白雲我を呼んで歸へず、我江湖の上に乗べば、明月我が衣を濕す」馬子才の長淮の謠に「湘江豈に水無からむや、魚腹に忠魂埋まる、但だ見る愁雲雨を結んで猿聲の哀しむを、湘江豈に水無からむや、曉

人道短詩、周公周禮十二卷、有能行者、知紀綱、傳說說命三四紙、有能師者、稱祖宗、古東坡送、運判朱朝奉入蜀、我在塵土中、白雲呼我歸、我游江湖上、明月濕我衣、馬子才長淮、謠湘江豈無水、魚腹忠魂埋、但見愁雲結、兩猿聲哀、湘江豈無水、鷓夷漂胥骸、但見潮頭怒氣如山來、佳灰通押是也、遙泝於古、以求之、行露篇、誰謂雀無角、何以穿我屋、誰謂女無家、何以速我獄、采薇篇、昔我往矣、楊柳依依、今我來思、雨雪霏霏、陳思王朔風詩、昔我初遷、朱華未希、今我旋止、素雪云飛、隔句對不換韻者、既萌芽於此矣、少陵奉先劉少府新畫山水障歌、大兒聰明到、能添老樹巔崖裡、小兒心孔開、貌得山僧及童子、元質曰、此篇用

夷胥骸を深す、但だ見る潮頭の怒氣山の如く來るを、佳灰通押是れなり、遂に古に泝りて以て之れを求むるに、行露篇に、誰か謂ふ雀角無しと、何を以て我が屋を穿つや、誰か謂ふ女家無しと、何を以て我を獄に速くや、采薇の篇に、昔我往きしに、楊柳依依たり、今我來思れば、雨雪霏々たり、陳思王の朔風の詩に、昔我初めて遷りしとき、朱華未だ希ならずき、今我旋止れば、素雪云に飛ぶと、隔句對にして韻を換へざる者、既に此に萌芽す、少陵の奉先の劉少府が新畫山水障の歌に、大兒は聰明到る、能く老樹を添ふ巔崖の裡、小兒は心孔開く、貌し得たり、山僧と童子と、元質曰く、此の篇段を逐ひて韻を換ふるの格を用ふ、故に隔句對にして韻を換へずと、約案するに、此の詩、韻を換ふること、長短定まらず、隔句對にして必ず韻を換ふるの格有らば、少陵何ぞ之れを遵用せざらむ、元好問の西樵曲に、去年郎と西關に入る、春風浩蕩金鞍に隨ふ、今年西馬妾東に還る、零落せる芙蓉秋水寒し、元質曰く、此の一解、毎句韻を用ふ、蓋し隔句對は韻を換ふるを以て常法と爲す、故に韻を換して以て之れに代ふ、約案するに、毎句韻を用ひ、重複韻を用ふ、或は節簇をして急ならしめ、或は節簇をして轉ぜしむ、隔句對と毫

逐段換韻格、故隔句對不換韻、約案此詩換韻、長短不定、隔句對有必換韻之格、少陵何不遵用之、又元好問西樓曲、去年與郎西入關、春風浩蕩隨金鞍、今年匹馬妾東還、零落芙蓉秋水寒、元質曰、此一解、每句用韻、蓋隔句對以換韻爲常法、故複韻以代之、約案、每句用韻、重複用韻、或使節簇急、或使節簇轉、與隔句對毫無關涉、此皆不知而彊爲之說者耳。

又云、朱綠池曰、古詩前後用同韻者、謂之轆轤韻、意必相照應、余檢古人詩、槩略如此、雖未聞古人有其說、亦定有師傳、又舉琵琶行云、此篇以琵琶爲主、故說琵琶之事、終始用庚韻、叙所以作此篇亦復用之、似有意而然

も關涉無し、此れ皆知らずして而して彊て之れが説を爲す者のみ。

又云、朱綠池の曰く、古詩、前後に同韻を用ふる者、之れを轆轤韻と謂ふ、意必ず相照應すと、余古人の詩を檢するに、槩略此くの如し、未だ古人に其の説有るを聞かずと雖ども、亦定めて師傳あらむ、又琵琶行を擧げて云ふ、此の篇、琵琶を以て主と爲す、故に琵琶の事を説くに、終始庚の韻を用ひ、此の篇を作る所以を叙するに、亦復之れを用ふ、意ありて而して然る者に似たり、約案するに、

者、約案古詩前後用同韻、與用他韻、何異、琵琶行、陌韻、寒韻亦各再用之、元質以爲何如、且夫一篇詩中、彊爲之說、則何處無照應、而平心讀之、自覺非有意而然者、青蓮集中、梁父吟、憶舊遊、皆再用虞韻、鳴皋歌、再用豪韻、江夏行、再用支韻、白毫子詩、猛虎行、觀元丹邱坐巫山屏風、皆再用紙韻、答杜秀才五松見贈、再用寒韻、答王十二寒夜獨酌有懷、再用庚韻、將進酒、司馬將軍歌、西嶽雲臺歌、魯郡堯祠送竇明府薄華還西京、皆再用灰韻、少年行、再用真韻、猛虎行、三用真韻、前後用同韻者如是其多、豈暇一一爲之說哉、又宣州謝朓樓餞別校書叔雲詩、棄我去者昨日之日不可留、亂我心者今日之日多煩憂、長

古詩、前後に同韻を用ふると、他韻を用ふると、何ぞ異ならむ、琵琶行に、陌の韻、寒の韻、亦各再び之れを用ふ、元質以て何如と爲す、且つ夫れ一篇詩中、彊て之れが説を爲さば、則ち何の處にか照應無からむ、而して平心に之れを讀めば、自ら意ありて而して然る者に非ざるを覺ゆ、青蓮集中の梁父の吟舊遊を憶ふ、皆再び虞の韻を用ひ、鳴皋の歌は、再び豪の韻を用ひ、江夏行は、再び支の韻を用ひ、白毫子の詩、猛虎行、元丹邱の坐の巫山屏風を觀る、皆再び紙の韻を用ひ、杜秀才の五松にして贈らるゝに答ふるは、再び寒の韻を用ひ、王十二の寒夜獨酌懷ふ有るに答ふるは、再び庚の韻を用ひ、將進酒、司馬將軍の歌、西嶽雲臺の歌、魯郡の堯祠にて竇明府薄華の西京に還るを送るは、皆再び灰の韻を用ひ、少年行には、再び眞の韻を用ひ、猛虎行には、三たび眞の韻を用ふ、前後に同韻を用ふる者は、くの如く其れ多し、豈に一一之れが説を爲すに暇あらむや、又、宣州の謝朓樓にて、校書叔雲に餞別する詩に、我を棄てて去る者は、昨日の日留む可からず、我が心を亂す者は、今日の日煩憂多し、長風萬里秋雁を吹く、此れに對して以て高樓に酌す可し、蓬萊の文章建安の骨、中間小謝又清發す、俱に逸興を懷いて、壯思飛ぶ、青

風萬里吹秋雁、對此可以酌高樓、蓬萊文章建安骨、中間小謝又清發、俱懷逸興壯思飛、欲上青天覽日月、抽刀斷水水更流、舉杯銷愁愁更愁、人生在世不稱意、明朝散髮弄扁舟、寄遠詩、憶昨東園桃李紅、碧枝與君此時初別離、金瓶落井無消息、令人行歎復坐思、坐思行歎成楚越、春風玉顏畏銷歇、碧牕紛紛下落花、青樓寂寂空明月、兩不見但相思、空留錦字素心素、至今絨愁不忍窺、此二篇儘是三韻而再用同韻、可見古人用韻之自在不拘矣、嗚呼如綠池、總是杜撰無限之妄說、假令彼國家家有師傅、人人口之、猶且不可從矣。

又云有以三字句換韻者、李白襄陽曲前以

天に上つて日月を覽むと欲す、刀を抽いて水を斷てば水更に流れ、杯を舉げて愁を銷せむとすれば愁更に愁ふ、人生世に在りて意に稱はざれば、明朝散髮弄扁舟を弄せむ、遠に寄する詩に、憶昨東園の桃李紅碧の枝、君と此の時初めて別離せしとを、金瓶井に落ちて消息無し、人をして行歎じ復た坐に思はしむ坐に思ひ行歎じ楚越を成す、春風に玉顏の銷歇せむことを畏る、碧牕紛々として落花下る、青樓寂々明月空し、兩なから見ず但だ相思ふ、空しく留む錦字素心の素、今に至りて愁を絨して窺ふに忍びず、此の二篇は、僅に是れ三韻、而して再び同韻を用ふ、古人の韻を用ふることの自在にして拘らざるを見るべし、嗚呼綠池の如きは、總て是れ杜撰無限の妄說なり、假令ひ彼の國家々師傅あり、人々之れを口にすも、猶且つ從ふべからず。

又云ふ、三字句を以て韻を換ふる者あり、李白の襄陽曲

鷓鴣杓、鸚鵡杯、換韻後以并州杓、力士鎗、換
 韻、白居易折臂翁詩、前以痛不眠、終不悔、換
 韻、後以老人言、君聽取、換韻、皆是前後成章
 法、又有疊上句三字、以爲一句、而換韻者、元
 稹冬白紵詩、促節牽繁舞、腰嬾舞、腰嬾王罷
 飲之類、是也、約案、用三字句、其格甚多、有置
 之解頭者、有置之解末者、有挿一韻中者、有
 以三字句四句爲一韻者、有以二句爲一韻
 者、有單用三字句者、今詳示之、青蓮集前有
 樽酒行、啖春風、舞羅衣、君今不歸、將安歸、白
 雲歌、湘水上、女蘿衣、白雲堪、臥君早歸、三句
 一韻也、將進酒、五花馬、千金裘、呼兒將出換
 美酒、與爾同銷萬古愁、前有樽酒行、君起、舞
 日、西夕、當年意氣不肯平、白髮如綠、歎何益、

に前に、鷓鴣の杓、鸚鵡の杯、を以て、韻を換へ、後に、并
 州の杓、力士の鎗、を以て、韻を換ふ、白居易の折臂翁の詩
 に、前に、痛んで眠らざれども、終に悔ひず、を以て、韻を
 換へ、後に、老人の言、君聽取せよ、を以て、韻を換ふ、皆是
 れ前後章法を成す、又、上句の三字を疊み、以て一句と爲
 し、而して韻を換ふる者あり、元稹の冬白紵の詩に、促節
 牽繁舞、腰嬾し、舞腰嬾し、王飲を罷むの類、是れなり、約案
 するに、三字句を用ふる其の格甚だ多し、之れを解頭に
 置く者あり、之れを解末に置く者あり、一韻の中に挿む
 者あり、三字句を以て一と爲す者あり、二句を以て一
 韻と爲す者あり、三字句を單用する者あり、今詳に之れ
 を示す、青蓮集の前有樽酒行に、春風に啖ひ、羅衣舞ふ、君
 今歸らざれば、將た安ぞ歸らむ、白雲の歌に、湘水の上、女
 蘿の衣、白雲臥するに、堪たり、君早く歸れば、三句にして
 一韻なり、將進酒に、五花の馬、千金の裘、兒を呼び、將ち出
 して美酒に換へ、爾と同じく、鎖せむ、萬古の愁、前有樽酒
 行に、君起つて舞へば、日西に夕す、當年の意氣、肯て平な
 らず、白髮絲の如し、歎するも何の益あらむ、は、四句にし
 て一韻なり、白紵の辭に、清歌を擧げ、皓齒を發す、北方の
 佳人、東隣の子、單句、且つ白紵を吟じて、綠水を停め、(複韻)

四句一韻也、白紵辭揚清歌、發皓齒、北方佳人東隣子、單句且吟白紵、停綠水、韻長袖拂面爲君起、元丹邱歌、元丹邱、愛神仙、朝飲潁川之清流、暮還嵩岑之紫煙、三十六峯長周旋、單句襄陽歌、舒州杓、力士鑽、李白與爾同、死生、單句襄王雲雨今安在、江水東流猿夜聲、五句一韻也、而用韻各不同、音調亦自異、鳴雁行、胡雁鳴、辭燕山、昨發委羽朝度關、單句一一銜蘆枝、南飛散落天地間、連行接翼往復還、單句六句一韻也、以上可準知矣、是以三字句置解頭者也、憶舊識、我向淮南攀桂枝、君留洛北愁夢思、不忍別、還相隨、是以三字句置解末者也、扶風豪士歌、扶風豪士天下奇、云云、撫長劍、一揚眉、清水白石何離離、代美人愁

長袖面を拂うて君が爲に起つ、元丹邱の歌に、元丹邱、神仙を愛す、朝に潁川の清流を飲み、暮に嵩岑の紫煙に還る、三十六峰長に周旋す、單句襄陽の歌に、舒州の杓、力士の鎗、李白爾と死生を同うせむ、單句襄陽の雲雨今安に在る、江水東に流れて猿夜聲くは、五句一韻なり、而して韻を用ふること各同じからず、音調も亦自ら異なり、鳴雁行に、胡雁鳴き、燕山を辭す、昨委羽を發し朝に關を度る、單句一一蘆枝を銜んで、南飛散落す天地の間、連行翼を接して往いて復還る、單句は、六句にして一韻なり、以上準知すべし、是れ三字句を以て、解頭に置く者なり、舊遊を懐ふに、我は淮南に向つて桂枝を攀ち、君は洛北に留つて夢思を愁ふ、別るゝに忍びず、還た相隨ふは是れ三字句を以て、解末に置く者なり、扶風豪士の歌に、扶風の豪士は天下の奇なり、云々、長劍を撫し、一に眉を揚ぐ、清水白石何ぞ離々たる、美人の鏡を愁ふるに代るに、漢帖一別箭絃の如し、去るに日有り、來るに年無し、狂風吹卻て妾が心斷ゆ、玉筋竝び墮つ、菱花の前には是れ三字句を以て一韻中に挿む者なり、夷、則格上白鳩拂舞の辭に、鳴鐘を響ち朗鼓を考つ、白鳩を歌ひ、拂舞を引く、夜座の吟に、金缸滅して、啼くこと轉た多し、妾が涙を掩ひ、

鏡、裏粘一別若箭枝、去有日、來無年、狂風吹
 卻妾心斷、玉筋并墮菱花前、是以三字句、押
 一韻中者也、夷則格上白鳩拂舞辭、鏗鳴鐘
 考朗鼓、歌白鳩、引拂舞、夜坐吟、金缸滅、啼轉
 多、掩妾淚、聽君歌、是以三字句四句爲一韻
 者也、夜坐吟、掩妾淚、聽君歌、歌有聲、妾有情、
 聲情合兩無違、一語不入意、從君萬曲梁塵
 飛、扶風豪士歌云、清水白石何離離、脫吾
 帽、向君笑、嘯號通押飲君酒、爲君吟、張良未、遂赤
 松去、橋邊黃石知我心、是以三字句二句爲
 一韻者也、行行且遊獵篇、邊城兒、生年不讀
 一字書、香山集中、此體最多、是單用三字句
 者也。

又云、有隔句韻采薇篇、采薇采薇亦作止、

君が歌を聴くは、是れ三字の句四句を以て一韻と爲す
 者なり、夜坐の吟に妾が涙を掩ひ、君が歌を聴く、歌に聲
 有り、妾に情有り、聲情合して兩ながら違ふこと無し、一
 語入らず意君に従ふ、萬曲梁塵飛ぶ、扶風豪士の歌に云
 々、清水白石何ぞ離々たる、吾が帽を脱し、君に向つて笑
 ふ嘯號通押君に酒を飲まし、君が爲に吟ず、張良未だ赤
 松を逐うて去らず、橋邊の黃石我が心を知るは、是れ三
 字句二句を以て一韻と爲す者なり、行々且遊獵篇に、邊
 城の兒、生年一字の書讀まず香山集中に、此の體最も多
 し、是れ三字句を單用する者なり。

又云、隔句韻あり、采薇の篇に、薇を采り薇を采れば、薇

曰歸曰歸、歲亦莫止、世本古義以爲隔句韻、其餘間有之、詩轍舉李白詩、元丹邱、愛神仙、朝飲潁川之清流、暮還嵩岑之紫煙、三十六峰長周旋、云、是隔句韻也、按此詩未足以爲例、余未曾見後人詩中有隔句韻者也、約案、青蓮此詩、邱字流字、偶然同韻、元質謂未足以爲例、是也、其謂未曾見隔句韻者、陋也、唐韋礪變體詩、東南路盡吳江畔、正是窮愁暮雨天、鷗鷺不嫌斜雪岸、波濤欺得送風船、偶逢島寺停帆看、深羨漁翁下釣眠、今古若論英達算、鷗夷高興固無邊、可見後人有隔句韻也、近體詩雖無用於此、聊以備聞耳、

少陵追酬故高蜀州人日見寄詩、自枉蜀州人日作、不意清詩久零落、今晨散帙眼忽開、

も亦た作止、歸らむと曰ひ歸らむと曰へば、歳も亦た莫止、世本古義に、以て隔句韻と爲す、其餘、間之れ有り、詩轍に、李白の詩の「元丹邱神仙を愛す、朝に潁川の清流を飲み、暮に嵩岑の紫煙に還る、三十六峰長に周旋す」といふを擧げて云ふ、それ隔句韻なりと、按ずるに、此の詩、未だ以て例と爲すに足らず、余未だ曾て後人の詩中に、隔句韻といふ者有るを見ざるなり、約案するに、青蓮の此の詩、邱の字、流の字、偶然同韻、元質未だ以て例と爲すに足らずと謂ふは、是なり、其の未だ曾て隔句韻を見すと謂ふは、陋なり、唐の韋礪の變體の詩に「東南路盡く吳江の畔、正に是れ窮愁暮雨の天、鷗鷺嫌はず雪に斜なるの岸、波濤欺得ず風に送らるゝの船、偶、島寺に逢うて帆を停めて看、深く羨む漁翁の釣を下して眠る、今古若し英達の算を論せば、鷗夷の高興固より無邊と、後人に隔句韻有るを見るべし、近體の詩、此に用無しと雖ども、聊か以て聞に備ふるのみ。

少陵が、故の高蜀州の人日に寄せらるゝに追酬する詩に「蜀州人日の作を枉げられしより、意はざりき清詩久しく零落せむとは、今晨帙を散じて眼忽ち開く、迸涙幽

迷淚幽吟事如昨、嗚呼壯士多慷慨、合沓高
 名動寥廓、歎我悽悽求友篇、感君鬱鬱匡時
 略、錦里春光空爛熳、瑤堦侍臣已冥冥、瀟湘
 水國傍龍鬣、鄂杜秋天失鷗鷺、東西南北更
 誰論、白首扁舟病獨存、遙拱北辰纏寇盜、欲
 傾東海洗乾坤、邊塞西羌最充斥、衣冠南渡
 多崩奔、鼓瑟至今悲帝子、曳裾何處覓王門、
 文章曹植波瀾闊、服食劉安德業尊、長笛隣
 家亂愁思、昭州詞翰與招魂、此篇韻數有定、
 而中間數轉意、換韻之在節、簇固可見矣、放
 翁喜、小兒輩到行在詩、阿岡學書、蚓滿幅、阿
 繪學語、鶯囀木、截竹作馬走不休、小車駕羊
 聲陸續、書窓澆壁誰忍噴、啼呼也復可憐人、
 卻思胡馬飲江水、敢道春風無戰塵、傳聞賊

詩格刊誤卷上

吟事昨の如し、嗚呼壯士慷慨多し、合沓たる高名寥廓を
 勵かす、歎す我悽々友を求むるの篇感ず君が鬱々時を
 匡すの時、錦里の春光空しく爛熳、瑤堦の侍臣已冥冥、瀟
 湘の水國龍鬣に傍ひ、鄂杜の秋天鷗鷺を失す、東西南北
 更に誰か論ぜむ、白首扁舟病獨り存す、遙に拱す北辰寇
 盜を纏ふ、東海を傾けて乾坤を洗はむと欲す、邊塞西羌
 最も充斥、衣冠南渡多くは崩奔、瑟を鼓して今に至るま
 で帝子を悲ふ、裾を曳ひて何の處にか王門を覓めむ、文
 章曹植波瀾闊く、服食劉安德業尊し、長笛隣家愁思を亂
 す、昭州の詞翰與に魂を招く、此の篇韻數定り有りて、而
 して中間數意を轉す、換韻の節簇に止ること固より見る
 べし、放翁の小兒輩が行在に到るを喜ぶ詩に、阿岡は書
 を學むで蚓幅に滿つ、阿繪は語を學むで鶯木に囀す、竹
 を截つて馬と作し走つて休まず、小車羊を駕して聲陸續
 たり、窓に書し壁を澆すも誰か噴るに忍びむ、啼呼する
 も也復た可憐の人、卻つて思ふ胡馬の江水に飲ふこと
 を、敢て道はむや春風に戰塵無しと、傳へ聞く賊兩京を
 棄て、走り、列城争うて朝廷の爲に守ると、今従り父子
 太平を見む、花前に水を飲むとも酒を飲むこと勿れ、此
 れ亦同法、設令し知らざる者、此の詩を作らば卻つて思

寒兩京走列城爭爲朝廷守從今父子見太平
 花前飲水勿飲酒此亦同法設令不知者
 作此詩卻思胡馬從今父子以下必將換韻
 韻法宜從此等詩悟入。

有二句不押韻者青蓮野田黃雀行游莫逐
 炎洲翠樓莫近吳宮燕不押吳宮火起焚巢
 窠炎洲逐翠遺網羅蕭條兩翅蓬蒿下縱有
 應鷗奈若何東坡野鷹來野鷹來萬山下不押
不押荒山無食應苦飢飛來爲爾繫綵絲北原
 有兔老且白年年養子秋食菽我欲擊之不
 可得年深兔老鷹力弱野鷹來城中有臺高
 崔巍臺中公子著皮袖東望萬里心悠哉心
 悠哉鷹何在不押嗟爾公子歸無勞使鷹可
 呼亦凡曹天陰月黑狐夜嘯是也。

ふ胡馬今從り父子以下必ず將に韻を換へむとす韻法
 宜しく此等の詩より悟入すべし。

二句韻を押せざる者あり青蓮の野田黃雀行に遊ぶに
 炎洲の翠を逐ふこと莫れ棲むに吳宮の燕に近づくこと
 莫れ韻を押せず吳宮火起つて巢を焚き炎洲翠を逐
 うて網羅に遭ふ蕭條たる兩翅蓬蒿の下縱ひ應鷗ある
 も若を奈何む東坡の野鷹來に野鷹來る萬山の下韻
 を押せず荒山食無く鷹飢に苦む飛び來らば爾が爲に
 綵絲を繫けむ北原に兔有り老いて且つ白し年子を
 養うて秋菽を食て我之れを撃たむと欲すれども得べか
 らず年深く兔老いて鷹力弱し野鷹來る城中に臺有り
 高うして崔巍臺中の公子皮袖を著く東望萬里心悠な
 る哉心悠なる哉鷹何にか在る韻を押せず嗟爾公子歸
 つて勞すること無れ鷹をして呼ぶ可からしめば亦凡
 曹ならむ天陰り月黒うして狐夜嘯く是れなり。

古韻

今也皇國太平歲久、文運日盛、莫有闕典、但音韻一事、雖碩學鴻儒、槩以爲非吾事、其至愚之甚、則以爲不知漢土音韻、則不能作詩屬文也、苟漢人論音韻者、則一意從之、抑何意也、約請嘗論之、如我皇國中古以來、文學湮晦、古言不明、輒近復古之學、與斯道漸明、雖然是篤學宏才之所任、非人人所得而能也、嗚呼我皇國千載一統、人無古今、而明古言於今日、如此其難、況如彼漢土、晉宋以來、夷華淆雜、涇渭不分、至宋明、則舉國既爲他人之有、音韻焉能不亂哉、以余觀之、南宋以還、斯道不明、至清則殆掃地矣、少陵悲陳陶詩、孟冬十郡良家子、紙血作陳陶澤中水、紙

詩格刊誤卷上

古韻

今や皇國太平歲久しく、文運日に盛に、闕典あること莫し、但だ音韻の一事、碩學鴻儒と雖ども、槩して以て吾が事に非ずと爲す、其の愚の甚しきに至りては、則ち以爲へらく、漢土の音韻を知らざれば、則ち詩を作り文を屬すること能はずと、苟も漢人にして音韻を論ずる者には、則ち一意之れに従ふ、抑も何の意ぞや、約請ふ嘗に之れを論ぜむ、我が皇國の如き、中古以來、文學湮晦、古言明かならず、輒近復古の學興り、斯の道漸く明かなり、然りと雖ども、是れ篤學宏才の任ずる所、人々の得て而して能くする所に非ざるなり、嗚呼我が皇國、千載一統、人に古今無し、而して古言を今日に明にすること、此の如く其れ難し、況むや彼の漢土の如きは、晉宋以來、夷華淆雜、涇渭分れず、宋明に至りては、則ち舉國既に他人の有と爲る、音韻焉ぞ能く亂れざらむや、余を以て之れを觀るに、南宋以還、斯の道明かならず、清に至りては、則ち殆むと地を掃ふ、少陵の悲陳陶の詩に、孟冬十郡良家の子、紙血

野曠天清無戰聲、四萬義軍同日死、紙羣胡
 歸來血洗箭仍唱、胡歌飲都市、紙都人四面
 向北歸、日夜更望官軍至、實唐宋詩醇評云、
 何焯曰、至字一韻獨用、約案古詩上去聲通
 押者、比比有之、今獨據於唐宋證之、少陵石
 壕吏詩、一男附書至、實二男新死、紙存者
 且偷生、死者長已矣、紙范成大浮邱亭詩、西
 崑嶠絕不可至、實東望蓬萊愁弱水、紙誰知
 芳草遍天涯、玉京只在珠簾底、紙齊皆是紙實
 通押、東坡巫山詩、瞿塘迤邐盡、巫峽嶂嶸起、
 紙連峰稍可怪、石色變蒼翠、實天工運神巧、
 漸欲作奇偉、尾塊軋勢方深、結構意未遂、實
 旁觀不暇瞬、步步造幽邃、實蒼崖忽相逼、絕
 壁凜可憐、實仰觀八九頂、俊爽凌顛氣、未見

は陳陶澤中の水と作る(紙野曠く天清うして戰聲無し
 四萬の義軍同日に死す(紙羣胡歸來血もて箭を洗ふ、仍
 りて胡歌を唱へて都市に飲む(紙都人四面北に向つて
 歸る、日夜更に望む官軍の至るを(實)唐宋詩醇の評に云
 ふ、何焯曰く、至の字、一韻獨用と、約案するに、古詩に、上
 去聲通押する者比々之れ有り、今獨り唐宋に據ひて之
 れを證せむ、少陵の石壕吏の詩に、一男書を附して至る
 (實)二男新に戰死すと、紙存する者且つ生を偷む死する
 者長へに已まん(紙)范成大の浮邱亭の詩に、西崑嶠絶至
 る可からず(實)東蓬萊を望み弱水を愁ふ、紙誰か知らむ
 芳草天涯に遍きを、玉京は只だ珠簾の底に在り(齊)紙、是
 れ皆紙實通押、東坡の巫山の詩に、瞿塘迤邐として盡き、
 巫峽嶂嶸として起る(紙)車峰稍や怪む可し、石色變じて
 蒼翠(實)天工神巧を運し、漸く奇偉を作さむと欲す(尾)扶
 軋勢方めて深し、結構意未だ遂げず(實)旁觀瞬するに暇
 あらず、步步幽邃に造る(實)蒼崖忽ち相逼り、絶壁凜とし
 て憐る可し(實)仰いで八九頂を觀れば、俊爽顛氣を凌ぐ

蕩天宇高崩騰江水沸、未孤超兀不讓、直拔
 勇無畏、未攀緣見神宇、慰坐就石位、實巉巖
 隔江波、一一問廟吏、實遙觀神女石、綽約誠
 有以、紙俯首見斜鬢、拖霞弄修帔、實人心隨
 物變、遠覺含深意、實野老笑吾旁、少年嘗屢
 至、實去隨猿猱上、反以繩索試、實石笋倚孤
 峯、突兀殊不類、實世人喜神怪、論說驚幼稚、
 實楚賦亦虛傳、神仙安有是、紙次問掃壇竹、
 云此今尙爾、紙翠葉紛下垂、婆娑綠鳳尾、尾
 風來自偃仰、若爲神物使、實絕頂有三碑、詰
 曲古篆字、實老人那解讀、偶見不能記、實窮
 探到峯背、採斫黃楊子、紙黃楊生石上、堅瘦
 文如綺、紙貪心去不顧、澗谷千尋槌、實山高
 虎狼絕、深入坦無忌、實洪濛草樹密、葱蘢雲

蕩天宇高、崩騰江水沸、(未)孤超兀として讓らず、直
 拔勇にして畏るゝ無し、未攀緣神宇を見る、慰坐石位に
 就く、(實)巉々として江波を隔つ、一一廟吏に問ふ、(實)遙に
 觀る神女石、綽約誠に以へ有り、(紙)首を俯せば斜鬢を見
 る、霞を抱いて修帔を弄す、(實)人心物に隨つて變じ、遠覺
 深意を含む、(實)野老吾が旁に笑ふ、少年嘗て屢至る、(實)去
 つて猿猱の上に隨ひ、反つて繩索を以て試む、(實)石笋孤
 峰に倚り、突兀として殊に類せず、(實)世人神怪を喜み、論
 說幼稚を驚かす、(實)楚賦も亦虚傳、神仙安ぞ是有らむ、(紙)
 次に問ふ掃壇竹、云ふ此れ今尙爾、(紙)翠葉紛として下
 垂し、婆娑たり綠鳳尾、尾風來つて自ら偃仰し、神物に使
 はるゝが若し、(實)絶頂に三碑あり、詰曲たり古篆の字、(實)
 老人那ぞ讀むことを解せむ、偶見て記する能はず、(實)窮
 探峰背に到り、採斫す黃楊子、紙、黃楊石上に生じ、堅瘦文
 綺の如し、(紙)貪心去つて顧みず、澗谷千尋の純、(實)山高
 して虎狼絶え、深く入れども坦として忌むこと無し、(實)
 洪濛として草樹密に葱蘢として雲霞賦なり、(實)石筍洪

霞賦、實石寶有、洪泉、甘滑如、流髓、實紙終朝自
 盥漱、冷冽清、心胃、未洗衣、挂樹梢、磨斧就、石
 鼻、實徘徊雲、日晚、歸意、念、城市、紙不到、今十
 年、衰老筋力憊、實卦當時、伐殘木、芽蘗已、如臂、
 實忽聞、老人說、終日爲歎喟、實神仙固、有之、
 難在、忘勢利、實貧賤、爾何愛、棄去、如脫屣、實紙
 嗟爾若、無還絕糧、應不死、紙此紙尾、實未四
 韻通押、樂天琵琶行、自言本、是京城女、語以
 下、以住、遇部有、實姤、遇數、遇汗、遇故、遇婦、有去、
實爲韻、語、慶、御、遇、四韻通押、東坡和蔡景繁
 海州石室詩、芙蓉仙人、自注石、曼卿也舊遊處、御蒼
 藤翠壁、初無路、遇戲、將、桃核、裹、黃泥、石間、散
 擲、如、風、雨、實坐、令、空、山、作、錦繡、倚、天、照、海、花
 無數、遇花、間、石、室、可、容、車、流、蘇、寶、蓋、窺、靈、宇、

泉有り、甘滑流髓の如し(紙實)終朝自ら盥漱すれば、冷冽
 心胃を清す(未)衣を洗うて樹梢に掛け、斧を磨して石鼻
 に就く(實)徘徊すれば雲日晚れ、歸意城市を念ふ(紙)到ら
 ざること今十年、衰老筋力憊る(卦實)當時伐り殘せし木
 芽蘗已に臂の如し(實)忽老人の説を聞いて、終日爲に歎
 喟す(實)神仙固より之れ有り、難きこと勢利を忘るゝに
 在り(實)貧賤爾何ぞ愛せむ棄て去つて脱屣の如し(紙實)
 嗟爾若し還ること無くんば糧を絶ちて應に死せざるべ
 し(紙)と、此れ紙尾實未の四韻通押す、樂天の琵琶行に
 「自ら言ふ本とは是れ京城の女(語)より以下、住(遇)部(有)應
 姤(遇)數(遇)汗(遇)故(遇)婦(有)應(去)御(去)を以て韻と爲し、語
 慶御遇の四韻通押す、東坡の蔡景繁の海州の石室に和す
 る詩に、芙蓉仙人(自注石曼卿なり)舊遊の處、御蒼藤翠壁
 初め路無し(遇)戯れに桃核を將て黄泥に裹み、石間散擲
 して風雨の如し(慶)坐して空山をして錦繡と作らしむ、
 天に倚り海を照して花無數(遇)花間の石室車を容る可
 し、流蘇寶蓋靈宇を窺ふ(慶)何の年か霹靂神物を起し、玉

魔何年霹靂起神物、玉棺飛出王喬墓、遇當
 時醉臥動千日、至今石縫餘糟醕、語山人一
 去五十年、花老室空誰作主、裏手藝數松今
 偃蓋蒼髯白甲低、瓊戶、魔我來取酒醕、先生
 後車仍載胡琴女、語一聲冰鐵散巖谷、海爲
 瀾翻松爲舞、魔爾來心賞復何人、持節中郎
 醉無伍、魔獨臨斷岸呼出日、紅波碧、語相吞
 吐、魔徑尋我語覓餘聲、拄杖彭鏗叩銅鼓、魔
 長篇小字遠相寄、一唱三歎神悽楚、語江風
 海雨入牙頰、似聽石室胡琴語、語我今老病
 不出門、海山巖洞知何許、語門外桃花自開
 落、牀前酒塵生塵土、魔前年開閣放柳枝、今
 年洗心參佛祖、魔夢中舊事時一笑、坐覺俯
 仰成今古、魔願君不用刻此詩、東海桑田眞

詩格刊誤卷上

椅飛出す王喬の墓(魔)當時醉臥動すれば千日、今に至つ
 て石縫糟醕を餘す(語)山人一去五十年、花老い空空うし
 て誰か主と作る(魔)手づから藝えし數松今偃蓋、蒼髯白
 甲瓊戸に低る(魔)我來つて酒を取つて先生に醕す、後車
 仍載す胡琴の女(語)一聲冰鐵巖谷に散じ、海爲に瀾翻り
 松爲に舞ふ(魔)爾來心賞復何人ぞ、節を持する中郎酔う
 て伍無し(魔)獨斷岸に臨んで日を呼出す、紅波碧、語相吞
 吐す、(魔)徑に我が語を尋ね餘聲を覓め、拄杖彭鏗銅鼓
 を叩く(魔)長篇小字遠く相寄す、一唱三歎神悽楚す(語)江
 風海雨牙頰に入り、石室胡琴の語を聽くに似たり(語)我
 今老病門を出です、海山巖洞知ぬ何れの許ぞ(語)門外の
 桃花自ら開落し、牀前の酒塵塵土を生ず(魔)前年閣を開
 いて柳枝を放ち、今年心を洗うて佛祖に參す(魔)夢中の
 舊事時に一笑す、坐るに覺ゆ俯仰今古を成す(魔)願くは
 君此の詩を刻することを用ひざれ、東海桑田眞に且暮
 (過)と、於瀆女の詩に、青裙綺袂於瀆女(語)兩足霜の如
 く履を穿たず、遇(過)船沙たる髮髮絲杼を穿ち、(語)蓬香障

且暮、酒於潛女詩、青裙縞袂於潛女、語兩足如霜不穿屨、麈尾沙鬢髮絲穿、杼、語蓬杏障前走風雨、麈老滯宮粧傳父祖、麈至今遺民悲故主、麈苦溪楊柳初飛絮、御照溪畫眉渡溪去、御逢郎樵歸相媚嫵、麈不信姬姜有齊魯、麈皆同、王勉夫野客叢書八卷云、前輩謂、深院無人杏花雨之句極佳、當作去聲、此句正祖南唐潘佑之意、佑有詩曰、誰家舊宅春無主、深院簾垂杏花雨、佑兩句意、此作一句、言耳、然佑句作上聲、非去聲也、其下曰、香飛綠瑣人未歸、巢燕承塵燕無語、豈語字亦當作去聲邪、此北宋人且不知上去聲通押、而費無用之辯、如清人何足責之、又青蓮鳴皋歌送岑徵君、若有人兮思鳴皋、阻積雪兮心煩

前風雨に走る(麈)老滯の宮粧父祖より傳へ(麈)今に至るまで遺民故主を悲ふ(麈)著溪の楊柳初て絮を飛ばす(御)溪を照し眉を畫いて溪を渡つて去る(御)郎が樵し歸るに逢うて相媚嫵す(麈)信せず姬姜齊魯有るを(麈)と、皆同じ、王勉夫の野客叢書に(卷の八)云、前輩謂ふ、深院人無く杏花の雨の句、極て佳なり、當に去聲と作すべし、此の句正に南唐の潘佑の意を祖とす、佑、詩ありて曰く、誰が家の舊宅ぞ春主無く、深院簾は垂る杏花の雨、佑の兩句の意、此れは一句と作して言ふのみ、然れども、佑の句は、上聲と作す、去聲に非ざるなり、其の下に曰く、香飛び綠瑣して人未だ歸らず、巢燕承塵燕に語無し、豈んど語の字、亦當に去聲と作すべきか、此れ北宋人すら且上去聲通押する事を知らずして、而して無用の辯を費す、清人の如きは、何ぞ之れを責むるに足らむ、又、青蓮の鳴皋の歌、岑徵君を送るに、若に人有り鳴皋を思ふ、積雪に阻して心煩勞す、洪河凌兢以て徑度す可からず、冰龍鱗の如くにして、初を容れ難し、遂たる仙山の峻極なる天籟の嘈々た

勞、洪河凌競、不可以徑度、冰龍鱗兮難容、舸、
 逸、仙山之峻極兮聞天籟之嘈嘈、霜厓縞皓
 以合沓兮若長風扇、海湧滄溟之波濤、玄猿
 緣巖、聳嵒、危柯、振石、駭膽、慄魄、群呼而
 相號、峯崢嶸以路絕、挂星辰於巖嶽、云云、詩
 醇評云、吳昌祺曰、玄猿緣巖、疊四句、而以五
 句爲一韻、非騷人法、約案、古今會無此句法、
 會無此韻法、此玄猿緣巖、四句一韻、第二句
 以下皆有韻、竹竿篇、洪水在右、泉源在左、巧
 咲之瑩、佩玉之儺、韻法與此同、群呼一句是
 單殺、復用豪韻、此老喜隔一韻用前韻、憶舊
 遊詩、袖長管催欲輕舉、漢中太守醉起舞、手
 持錦袍覆我身、我醉橫眠枕其股、當筵意氣
 凌九霄、星離雨散不終朝、分飛楚關山水遙、

るを聞く、霜厓縞皓として以て合沓し長風海を扇して滄
 溟の波濤を湧かすが若し、玄猿緣巖、聳嵒、危柯に危し
 石を振し、膽を駭し魄を慄す、群呼而て相號ぶ、峰崢嶸と
 して以て路絶え、星辰を巖嶽に挂く云云、詩醇の評に云
 ふ、吳昌祺曰く、玄猿緣巖四句を疊みて、而して五句を以
 て一韻と爲す、騷人の法に非ず、約案するに、古今會て此
 の句法無く、會て此の韻法無し、此れ玄猿緣巖四句一韻
 第二句以下皆韻有り、竹竿の篇に、洪水右に在り、泉源左
 に在り、巧咲之れ瑩たり、佩玉之れ儺たりと、韻法此れと
 同じ群呼の一句は是れ單殺、復た豪韻を用ふ、此の老喜
 みて一韻を隔て、前韻を用ふ、舊遊を憶ふ詩に、袖長く
 管催して輕舉せむと欲す、漢中の太守酔うて起舞す、手
 づから錦袍を持して我が身を覆ふ、我酔うて横眠其の股
 を枕にす、筵に當つて意氣九霄を凌ぐ、星離雨散朝を尋
 へず、分飛楚關山水遙なり、余既に山に還つて故巢を尋
 ぬ、君も亦家に歸つて涸橋を渡る、君が家の蹤、君貌虎よ
 りも勇なり、尹と作つて并州に我虜を遏む、五月相呼ん

余既還山尋故巢君亦歸家渡渭橋君家嚴
 君勇貔虎作尹并州遇戎虜五月相呼度太
 行摧輪不道羊腸苦隔一韻用巽韻觀元丹
 邱坐巫山屏風詩昔遊三峽見巫山見畫巫
 山宛相似疑是天邊十二峯飛入君家綵屏
 裡寒松蕭颯如有聲陽臺微茫如有情錦衾
 瑤席何寂寂楚王神女徒盈盈高咫尺如千
 里翠屏丹崖祭如綺蒼蒼遠樹圍荆門歷歷
 行舟泛巴水隔一韻用紙韻此類甚多又案
 以今韻觀之炭字在緝韻石魄二字在陌韻
 而古韻通押確乎有明據鮑照學劉公幹體
 詩噓噓寒夜露蒼蒼陰山栢栢樹廻村露紫
 山寒野風急緝唐太宗飲馬長城窟行揚塵
 氛霧靜紀功銘在石陌荒裔一戎衣靈臺凱

四〇
 で太行を渡る輪を摧けども羊腸の苦を道はず、一韻
 を隔て、虞の韻を用ふ、元丹邱の坐の巫山屏風を觀る詩
 に「昔し三峽に遊んで巫山を見る畫ける巫山を見るに
 宛も相似たり疑ふらくは是れ天邊の十二峯飛んで君が
 家の綵屏の裡に入るかと、寒松蕭颯として聲有るが如
 し、陽臺微茫として情有るが如し、錦衾瑤席何ぞ寂々、楚
 王神女徒に盈盈、高さ咫尺千里の如し、翠屏丹崖祭とし
 て綺の如し、蒼々たる遠樹荆門を圍み、歴々たる行舟巴
 水に泛ぶ」と、一韻を隔て、紙の韻を用ふ、此の類甚だ多
 し、又案するに、今韻を以て之れを觀れば、炭の字、緝の韻
 に在り、石魄の二字は、陌の韻に在り、而して古韻通押、確
 乎として明據あり、鮑照の劉公幹の體を學ぶ詩に、噓々
 たり寒夜の露、蒼々たり陰の山栢、栢樹廻つて村露紫り、
 山寒うして野風急なり、緝、唐の太宗の飲馬長城窟行に
 「塵を揚げて氛霧靜に、功を記して銘石に在り、陌、荒裔一
 戎衣、靈臺凱歌し入る、緝、焦仲卿の妻に、長嘆す空房の
 中、計を作して乃ち爾く立つ、緝、頭を轉じて戸裡に向ひ、

歌入、緝焦仲卿妻、長歎空房中、作計乃爾立、
 緝轉頭向戶裡、懶見愁煎迫、緝又東坡岐亭
 詩、昨日雲陰重、東風融雪汁、緝遠林草木暗、
 近舍煙火濕、緝下有隱君子、嘯歌方自得、
 知我犯寒來、呼酒意頗急、緝撫掌動鄰里、
 遙村捉鷺鴨、冷房櫛鏘器聲、蔬果照巾罍、錫久
 聞蕪蒿美、初見新芽赤、陌洗盞酌鷺黃、磨刀
 削熊白、陌須臾我徑醉、坐睡落巾幘、陌醒時
 夜向闌、唧唧銅瓶泣、緝黃州豈云遠、但恐朋
 友缺、肩我當安所、主君亦無此客、陌朝來靜
 庵中、惟見峯巒集、緝冷齋夜話云、東坡書楊
 道士息軒曰、無事此靜坐、一日是兩日、貧若
 活七十年、便是百四十、緝黃金不可成、白髮
 日夜出、貧開眼三十秋、速於駒過隙、陌是故

愁の煎迫するを見るに懶し、陌又、東坡の岐亭の詩に、昨
 日雲陰重り、東風雪汁を融く、緝遠林草木暗く、近舍煙火
 濕ふ、緝下に隱君子有り、嘯歌方に自得す、職、我が妻を
 犯し來るを知つて、酒を呼んで意頗る急なり、緝掌を撫
 して隣里を動し、村を遙つて鷺鴨を捉ふ、冷房櫛鏘器聲
 たり、蔬果巾罍を照す、錫久しく聞く蕪蒿の美なるを、初
 めて見る新芽の赤きを、陌盞を洗うて鷺黃を酌み、刀を
 磨して熊白を削る、陌須臾に我徑醉す、坐睡巾幘を落す
 (陌)醒むる時が闌に向とす、唧々として銅瓶泣く、緝黃州
 豈に遠しと云はむや、但だ恐る朋友の缺ぐるを、肩我當
 に主とする所を安すべし、君も亦此の客無らむ、陌朝來
 靜庵の中、惟だ見る峯巒の集るを、緝と、冷齋夜話に云
 ふ、東坡、楊道士の息軒に書して曰く、無事此に靜坐す、一
 日はれ兩日(貧若し七十年を活きば、便ち是れ百四十、緝)
 黃金成る可からず、白髮日夜に出づ、貧眼を開けば三十
 秋、駒の隙を過ぐるよりも速なり、陌是の故に東坡老、汝
 が一念の息むを貴ぶ、職時に來つて此の軒に登る、望見

東坡老貴汝一念息。職時來登此軒。望見過海席。爾家山歸未得題。詩寄屋壁。而昌祺不知之。以狹隘之見妄譏青蓮。其陋可嘆矣。詩醇是康熙御撰。經諸儒之校讐者必矣。而其纒漏如此。其他固可準知矣。吾邦輕佻釣名之徒。詩文纒能成語。輒投之清人。厚加賄賂。乞其品秩。徵其序跋。虛飾以自銜。誣已欺人。一以蔑國禁。一以使彼輕視我。犯此大罪。而甘受盲眇之鑿。恬乎不知恥。澆季之風一至於此。實可以成一浩歎哉。

銘贊及古詩不用古韻。則自乏古色。學者不可不講究也。而其學陵遲。諸家各恣其所言。跋胡蹇尾。茫乎無所歸也。特清儒毛奇齡頗有見於此。著古今通韻。韻學指要諸書。創立

寸海を過ぐる席（爾家山歸ること未だ得ず、詩を題して屋壁に寄す（陌）と、昌祺之れを知らず、狹隘の見を以て、妄に青蓮を譏る、其の陋嘆ふべし、詩醇は是れ康熙の御撰、諸儒の校讐を経ること必せり、而るに其の纒漏此の如し、其の他、固より準知すべし、吾が邦輕佻名を釣るの徒、詩文纒に能く語を成せば、輒ち之れを清人に投じ、厚く賄賂を加へ、其の品秩を乞ひ、其の序跋を徵し、虚飾以て自ら銜ひ、己を誣ひ人を欺く、一は以て國禁を蔑し、一は以て彼をして我を輕視せしむ、此の大罪を犯し、而して甘じて盲眇の鑿を受け、恬乎として恥づることを知らず、澆季の風一に此に至る、實に以て一浩歎を成すべきかな。

銘贊及び古詩は古韻を用ひされば、則ち自ら古色に乏し、學者講究せざるべからざるなり、而して其の學陵遲し、諸家各其の言ふ所を恣にし、胡を跋み尾に蹇（ウツク）き、茫乎として歸する所無し、特に清儒毛奇齡、頗る此に見るありて、古今通韻、韻學指要の諸書を著し、五部三聲二聲兩

五部三聲二聲兩界之目、所謂五部、東冬江陽庚青蒸七韻爲一部、支微齊佳灰魚虞歌麻尤十韻爲一部、魚虞歌麻蕭肴豪尤八韻爲一部、眞文元寒刪先六韻爲一部、侵覃鹽咸四韻爲一部、是也、三聲、平上去三聲相通、是也、二聲、去入二聲相通、是也、兩界、屋沃覺三韻爲東冬江三韻之入、質物月曷黠屑六韻爲眞文元寒刪先六韻之入、藥陌錫三韻爲陽庚青蒸四韻之入、緝合葉洽四韻爲侵覃鹽咸四韻之入、以有入東冬江眞文元寒刪先陽庚青韻侵韻鹽咸十七韻爲一界、以無入支微魚虞齊佳灰蕭肴豪歌麻尤十三韻爲一界、相通、是也、而兩界亦有相通者、自以爲音韻之蘊奧盡於此、焉巨聲大喝、痛駭

界の目を創立す、謂はゆる五部とは、東冬江陽庚青蒸の七韻を一部と爲し、支微齊佳灰魚虞歌麻尤の十韻を一部と爲し、魚虞歌麻蕭肴豪尤の八韻を一部と爲し、眞文元寒刪先の六韻を一部と爲し、侵覃鹽咸の四韻を一部と爲す、是れなり、三聲とは、平上去の三聲相通す、是れなり、二聲とは、去入の二聲相通す、是れなり、兩界とは、屋沃覺の三韻を、東冬江の三韻の入と爲し、質物月曷黠屑の六韻を、眞文元寒刪先の六韻の入と爲し、藥陌錫の三韻を、陽庚青蒸の四韻の入と爲し、緝合葉洽の四韻を、侵覃鹽咸の四韻の入と爲し、入有る東冬江眞文元寒刪先陽庚青蒸侵覃鹽咸の十七韻を以て、一界と爲し、入無き支微魚虞齊佳灰蕭肴豪歌麻尤の十三韻を以て、一界と爲し、相通す、是れなり、而して兩界も亦相通する者あり、自ら以爲へらく、音韻の蘊奧此に盡くと、巨聲大喝、諸家を痛駭す、其の言、誇誕なりと雖ども、之れを、彼の胡を跋み尾に寔ツツき、歸する所無き者に比すれば、即ち香城徑庭、亦以て癡人の夢と警覺するに足る然りと雖ども、其の兩界も亦相通する者有るに至りては、則ち循環無窮、百七韻は一韻と成る、喋々たる辯說、終に無用に歸す、柱を矯めて正に過ぐる者と謂ふべし、通韻論例に云ふ、古韻自ら通轉無

諸家其言雖誇誕乎比之彼跋胡疋尾無所歸者則霄壤徑庭亦足以警覺癡人之夢焉雖然至其兩界亦有相通者則循環無窮百七韻成一韻喋喋辯說終歸於無用可謂矯枉過正者矣通韻論例云古韻自無通轉然古韻既亡則反就律韻中或通或轉以尋古韻雖欲不立通轉之名何可得也所謂因變求正者此也由是觀之毛氏亦出於不得已者乎約案古昔聲韻不一蓋以土地異俗不同也六朝之時精其學者選正從之始作二百六韻於是乎天下之聲韻定于一可謂有功矣雖然一字有數音而入一韻者亦必不尠是以似精而實麤求詳而實略不自知所以與古爲冰炭也以余觀之東冬蕭肴之類

し然れども古韻既に亡ぶれば則ち反つて律韻中に就き或は逆じ反は轉じ以て古韻を尋ぬ通轉の名を立てざらむと欲すと雖ども何ぞ行べけむや謂はゆる變に因りて正を求むる者此れなり是に由りて之れを觀れば毛氏も亦已むを得ざるに出づる者か約案するに古昔聲韻一ならず蓋し土地異に俗同じからざるを以てなり六朝の時其の學に精しき者正を選で之れに従ひ始めて二百六韻を作る是に於てか天下の聲韻一に定まる功有りと言ふべし然りと雖ども一字數音有りて而して一韻に入る者も亦必ず尠からず是を以て精に似て而して實は麤詳を求めて而して實は略自ら古と冰炭たる所以を知らざるなり余を以て之れを觀れば東冬蕭肴之類古は蓋し一韻にして分別すべからず其の他は當に古人に其の例有る者を取りて而して之れを用ふべし譬へば一東の韻中の風の字の如き晨風の篇に林欽と叶ふ宜しく此れに據りて以て侵風に入るべし揚雄の甘泉賦に乘澄兢と叶ふ宜しく此れに據りて以て蒸韻に入るべし楊殿季の漢の輔臣の贊に眞臣人鄭と叶ふ宜しく此れに據りて以て眞韻に入るべし王粲の蔡子篤に贈る詩に軒翻宣歎と叶ふ宜しく此れに據

古蓋一韻不可分別其他當取古人有其例者而用之譬如一東韻中風字晨風篇與林欽叶宜據此以入侵韻楊雄甘泉賦與乘澄兢叶宜據此以入蒸韻楊戲季漢輔臣贊與眞臣人鄴叶宜據此以入眞韻王璨贈蔡子篤詩與軒翻宣歎叶宜據此以入元寒先等韻若從諸家通用之說以一東韻中字盡入眞元寒先蒸侵諸韻則百七韻不成一韻者幾希。

清毛稚黃聲音叢說張潮序云聲音之道隨時代爲變遷者也周秦漢魏有周秦漢魏之音齊梁六朝有齊梁六朝之音唐宋有唐宋之音金元有金元之音近三百年來有三百年來之音用韻者宜何從乎亦惟考其體製

りて以て元寒先等の韻に入るべし若し諸家通用の説に従ひ一東韻中の字を以て盡く眞元寒先蒸侵の諸韻に入るれば則ち百七韻は一韻と成らざる者幾ど希なり。

清の毛稚黃の聲音叢說の張潮の序に云ふ聲音の道は、時代に隨て變遷を爲す者なり、周秦漢魏には、周秦漢魏の音あり、齊梁六朝には、齊梁六朝の音あり、唐宋には、唐宋の音あり、金元には、金元の音あり、近三百年來には、三百年來の音あり、韻を用ふる者宜しく何れに従ふべきか、亦惟た其の體裁を考へて而して可なり、四言の詩の

而可矣。如四言詩、如古樂府、如賦、如銘、如贊、此周秦漢魏之體製也。宜用吳才老之古韻、如五七言近體、五七言排律、七言古風長歌、唐人體製也。則宜用今世所通行之百七韻。若五言古體詩及長短句、則介乎二者之間者也。或古韻或禮部韻、可參合而用之。至于詩餘、則宋人體製矣。宋人之音、自宜用詞韻。北曲填詞、始于金元、則宜用周德清中原韻。南曲明代所尚、此則三百餘年以來之製矣。宜用洪武正韻者也。我輩生于今日、不識古韻爲何物、其讀毛詩離騷、往往齟齬而不相合。蓋以今人之口而讀古人之製、而不知出古人之口、則原無不協也。云云。約案、如其考體製而用韻、可也。如其以七言古風長歌、徑

如き、古樂府の如き、賦の如き、銘の如き、贊の如き、此れ周秦漢魏の體製なり、宜しく吳才老の古韻を用ふべし。五七言近體、五七言排律、七言古韻長歌の如きは、唐人の體製なれば、則ち宜しく今世通行する所の百七韻を用ふべし。五言古體の詩及び長短句の若きは、則ち二者の間に介まる者なり、或は古韻、或は禮部韻、參合して而して之れを用ふべし。詩餘に至りては、則ち宋人の體製なり、宋人の音自ら宜しく詞韻を用ふべし。北曲填詞は、金元に始る、則ち宜しく周德清の中原韻を用ふべし。南曲は、明代の尙ぶ所、此れ則ち三百餘年以來の製なり、宜しく洪武正韻を用ふべき者なり、我が輩今日に生れ、古韻の何物たるを識らず、其の毛詩離騷を讀むに、往々齟齬して而して相合はず、蓋し今人の口を以て而して古人の製を讀みて、而して古人の口に出づれば、則ち原と協はざる無きを知らざるなり云々。約案するに、其の體製を考へて而して韻を用ふる如きは、可なり、其の七言古風長歌を以て、徑に唐人の體製と爲し、而して近體の詩と同じく

爲唐人體製、而欲與近體詩同用百七韻、不可也。余著此編、僅引唐人七言古風、而不用百七韻者甚多、不待更舉其證也。錢大昕十駕齋養新錄十六云、楚詞招魂大招多匹言、去些只助語合兩句讀之、卽成七言。荀子成相、荆軻送別、其七言之始乎。至漢而大風瓠子見于帝製、柏梁聯句一時稱盛、而五言靡聞、其載於班史者、唯邪徑敗良田、童謠出于成帝之世耳。劉彥和謂西京詞人遺翰、莫見五言、所以李陵班婕妤見疑于後代、又謂古詩佳麗或稱枚叔、則彥和亦未敢質言也。鍾嶸詩品云、古詩其體源出于國風、去者日已疎、四十五首疑是建安中陳王所製、文選所錄古詩十九首、未審卽在鍾氏四十五篇之數。

百七韻を用ひむと欲するが如きは、不可なり、余此の編を著す、僅に唐人の七言古風を引く、而して百七韻を用ひざる者甚だ多し、更に其の證を擧ぐることを待たざるなり。錢大昕の十駕齋養新錄十六に云ふ、楚詞の招魂、大招、多く匹言す、些只の助言を去り兩句を合して之れを讀めば、卽ち七言を成す、荀子の成相、荆軻の送別、其れ七言の始めか、漢に至りて而して、大風瓠子は、帝製に見えたり、柏梁の聯句、一時盛なりと稱す、而して五言は、則ゆるること靡し、其の班史に載する者は、唯だ邪徑良田を敗るの童謠、成帝の世に出づるのみ、劉彥和謂ふ、西京詞人の遺翰、五言を見ること莫し、所以に李陵、班婕妤、後代に疑はる、又謂ふ、古詩佳麗、或は枚叔と稱すと、則ち彥和も亦未だ敢て質言せざるなり、鍾嶸の詩品に云ふ、古詩は、其の體源と國風に出づ、去る者は日に已に疎し、の四十五首は、疑ふらくは、是れ建安中陳王の製する所ならむと、文選の錄する所の古詩十九首は、未だ卽ち鍾氏四十五篇の數に在るや否やを審にせず、之れを要するに、此

否、要之、此體之興、必不在景武之世、觀漢書李陵傳、置酒起舞、作歌、初非五言、則知河梁唱和出于後人依託、不待盈觴之語、觸犯漢諱、始決其作僞也、枚叔又在蘇李之前、班史不言、有五言詩、其爲臆說、毋庸置辯矣、虞姬歌、不見于史、漢諒亦出於依託、白頭吟、見沈休文宋書、但云古辭、不言何人作、唯西京雜記、有卓文君作白頭吟、自絕之語、亦不載、其詞、且雜記出、吳均之手、豈足信乎、此說亦不爲無所見、由是觀之、以七言古風、徑爲唐人體製者、其非不辯而著矣、但與銘贊之類、非無別也、宜取古韻之宜於時者、而用之、又案銘贊之類、亦自不一、毛稚黃韻問云、毛子曰、予嘗讀楊慎韻經、而不覺失笑也、客曰、何也、

の體の興ること、必ず景武の世に在らず、漢書の李陵傳を觀るに、置酒し起て舞ひ歌を作ると、初めより五言に非ざれば、則ち知る河梁の唱和は、後人の依託に出づること、盈觴の語、漢の諱を觸犯するを待ちて、始めて其の作の僞なるを決せざるなり、枚叔又蘇李の前に在りて、班史に五言の詩有るを言はず、其の臆説たること、辯を置くことを庸ふるなし、虞姬の歌、史漢に見えず、諒に亦依託に出づ、白頭の吟、沈休文の宋書に見え、但だ古辭なりと云ひて、何人の作なるを言はず、唯だ西京雜記に、卓文君白頭吟を作りて自ら絶つの語あれども、亦其の詞を載せず、且つ雜記は、吳均の手より出づ、豈に信するに足らむやと、此の説、亦所見無しと爲さず、是れに由りて之れを觀れば、七言古風を以て、徑に唐人の體製と爲すは、其の非辨せずして而して著る、但だ銘贊の類と別無きに非ざるなり、宜しく古韻の時に宜しき者を取りて而して之れを用ふべし、又案するに、銘贊の類、亦自ら一ならず、毛稚黃の韻問に云ふ、毛子曰く、予嘗て楊慎の韻

毛子曰楊氏之書其謬甚多請論之曰楊云賦誄箴銘之類須從古韻不知要須辨厥體耳儻作隋唐近調之賦誄而可用詩騷古韻者乎此韻經凡例楊氏開卷之謬一也可以見也

聲音義說云韓愈蝌蚪書記云作爲文詞宜略識字然愈識字頗不深子產不毀鄉校頌以監叶言徐偃王廟碑詞以頌叶耽古音既無此通法考之唐韻益謬愈蓋讀監爲肩讀耽爲丹故也是愈於本朝字尙識之不盡歎吐有乖何論蝌蚪書耶此說陋也養新錄卷四云卻正釋譏云夫人心不同實若其面子雖光麗既美且豔以豔與面見練爲韻又云方今朝士山積髮俊成羣猶鱗介之潛乎巨海

經を讀みて而して覺えず失笑す客曰く何ぞや毛子曰楊氏の書其の謬甚だ多し請ふ之れを論ぜむ曰く楊云ふ賦誄箴銘の類須らく古韻に従ふべしと知らず要するに須らく厥の體を辨ずべきのみ儻し隋唐近調の賦誄を作りて而して詩騷の古韻を用ふべき者あらや此れ韻經の凡例楊氏開卷の謬り一なり以て見るまなり

聲音義說に云ふ韓愈の蝌蚪書記に云ふ文詞を作爲する宜しく略字を識るべし然れども愈字を識ること頗る深からず子產鄉校を毀たざる頌に監を以て言に叶へ徐偃王の廟の碑の詞に頌を以て耽に叶ふ古音既に此の通法無し之れを唐韻に考ふるに益謬る愈蓋し監を讀みて肩と爲し耽を讀みて丹と爲すが故なり是れ愈本朝の字に於て尙之れを識ること盡さず歎吐乖くことあり何ぞ蝌蚪の書を論ぜむやと此の説陋なり養新錄に卷四云ふ卻正釋譏に云ふ夫れ人心の同じからざる實に其の面の若し子光麗既に美にして且つ豔なりと雖ども豔を以て面見練と韻を爲す又云ふ方今朝士山積髮俊成羣猶鱗介の巨海に潛まり毛羽

毛羽之集乎鄧林、以林與羣般爲韻、如此類者、今世必謂之失韻、然古人已有之、古書音與義多相協、釋詁、林君也、是林有君音、論語文質彬彬、字或作份、又云、皇甫謐釋勸論、以音與莘濱秦屯神倫伸爲韻、以心岑與鱗辰塵人臣倫爲韻、以沈衾岑與真臣人鄰貧濱爲韻、約又考之、易其所由來者漸矣、由辨之不早辨也、列其責、厲薰心、此亦同例、其徵赫赫、謂之古音無此通法、可哉、稚黃誇炬火培塿之才、誹泰山北斗之賢、長喙三尺、多見不知其量也。

古詩平仄

袁枚隨園詩話卷四云、近有聲調譜之傳、以爲得自阮亭、作七古者、奉爲祕本、余覽之、不覺

の鄧林に集まるがごとし、林を以て羣般と韻を爲す、此の如きの類は、今世必ず之れを失韻と謂はむ、然れども、古人已に之れ有り、古書音と義と多く相協ふ、釋詁に、林は君なり、是れ林に君の音あるなり、論語に文質彬彬、字或は份に作る、又云ふ、皇甫謐の釋勸論に、音を以て、莘濱秦屯神倫伸と韻を爲し、心岑を以て、鱗辰塵人臣倫と韻を爲す、沈衾岑を以て、真臣人鄰貧濱と韻を爲す、約又之を易に考ふるに、其の由來する所の者漸なり、之れを辨ずること早く辨せざるに由るなり、其の責を列く、厲して心を薰す、此れ亦同例、其の徵赫々、之れを古音に此の通法無しと謂ひて可ならむや、稚黃、炬火培塿の才に誇り、泰山北斗の賢を誹る、長喙三尺、多に其の量を知らざるを見るなり。

古詩平仄

袁枚の隨園詩話卷四に云ふ、近聲調譜の傳あり、以て得たりと爲す、阮亭より七古を作る者、奉じて祕本と爲す、余之れを覽て、覺えず矣、夫れ詩は、天地の元音たり、

失笑、夫詩爲天地元音、有定而無定、到恰好處、自成音節、此中微妙、口不能言、試觀國風雅頌、離騷樂府、各有聲調、無譜可填、杜甫王維七古中、平仄均調、竟有如七律者、韓文公七字皆平、七字皆仄、阮亭不能以四仄三平之例、縛之也、儻必照曲譜排填、則四始六義之風掃地矣、此阮亭之七古、所以如杞國伯姬、不敢那移半步、此說是也、約雖平生不悅袁子才、如其謂到恰好處、自成音節、實是知言、聲調譜、趙飴山所著、又翟徵涇著、聲調譜拾遺、今試舉其說、譜云、平平平仄平平句法、尋常轉韻古詩、不可輕用、約案、小陵詩有客有客字、子美崔塗詩、梨花梅花參差開、此等句、猶有之、古詩至得佳句、焉有所避、且譜

定ありて而して定無し、恰好の處に到りて、自ら音節を成す、此の中微妙、口言ふこと能はず、試に國風、雅頌、離騷、樂府を觀よ、各聲調あり、譜の填すべき無し、杜甫王維の七古中、平仄均調、竟に七律の如き者あり、韓文公、七字皆平、七字皆仄、阮亭四仄三平の例を以て之れを縛すること能はざるなり、儻し必ず曲譜に照して排填せば、則ち四始六義の風地を掃はむ、此れ阮亭の七古、杞國伯姬の如く、敢て那の半歩を移さざる所以なりと、此の說是なり、約、平生袁子才を悦ばずと雖ども、其の恰好の處に到りて、自ら音節を成すと謂ふが如きは、實に是れ知言、聲調譜とは、趙飴山の著す所、又翟徵涇、聲調譜拾遺を著す、今試に其の説を舉げむ、譜に云ふ、平平平仄平平の句法、尋常轉韻の古詩には、輕しく用ふべからずと、約案するに、少陵の詩に、客有り客有り字は、子美崔塗の詩に、梨花梅花參差として、開く、此等の句猶之れ有り、古詩佳句を得るに至りては、焉ぞ避くる所あらむ、且つ譜に謂はゆる句法は、李杜詩中甚だ多し、就きて而して覽るべし、拾遺に云ふ、平韻の古詩は、論する無し、轉韻及び韻を轉ぜざるもの、凡そ仄仄仄平平、及及び仄仄仄平平、平等の句法、皆用ふべからず、杜韓の詩筆力最も横絶す、未

所謂句法、李杜詩中甚多、可就而覽、拾遺云、平韻古詩、無論轉韻及不轉韻、凡仄仄仄平平平、及仄仄平平平平、等句法、皆不可用、杜韓詩、筆力最橫絕、未嘗有此、唐人間、有用之者、要是踰閑之弊、不可不知、約案、少陵觀曹將軍畫馬圖詩、昔日太宗拳毛騮、韓文公送區弘南歸詩、從我荊州來、荆畿又寄盧全詩、去歲生兒名添丁、此句法、豈杜韓未嘗有此哉、其書大抵此類也、固不足辯矣。

詩格刊誤卷上 終

だが嘗て此れ有らず、唐人間之れを用ふる者有り、要するに、是れ閑を踰ゆるの弊、知らざるべからずと、約案するに、少陵の曹將軍の畫馬の圖を觀る詩に、昔日太宗の拳毛騮、韓文公の區弘の南歸を送る詩に、我に荊州に從つて荆畿に來る、又盧全に寄する詩に、去歲兒を生んで添丁と名づく、と、此の句法豈に杜韓未だ嘗て此れあらざらむや、其の書、大抵此の類なり、固より辯するに足らず。

詩格刊誤卷下

江戸 省齋 日尾約省三著

五言律換字句法

初學或以爲漢人生而知平仄殊不然也明陳元輔枕山樓詩話云學詩要先知平仄此二字不辨匪獨聲音不協抑且規式有乖更作之圖以示仄起平起之格平生所用之句格且猶如此故如換字句法鮮能詳之者必矣按五言換字句法有不拘平仄者如少陵望嶽篇是也或以此篇爲古詩非也蓋與七律吳體同吳體詳於下其平仄一定者有三其一句法仄仄仄平仄平平仄平第一字平仄

五言律換字句法

初學或以爲へらく漢人は生れながらにして平仄を知ると殊に然らざるなり明の陳元輔の枕山樓詩話に云ふ詩を學ぶには先づ平仄を知らむことを要す此の二字辨ぜざれば獨り聲音の協はざるのみに匪ず抑も且つ規式乖くことありと更に之れが圖を作りて以て仄起平起の格を示す平生用ふる所の句格且猶此くの如し故に換字句法の如きは能く之れを詳にする者鮮きこと必せり按ずるに五言換字句法は平仄に拘らざる者あり少陵の望嶽篇の如きは是れなり或は此の篇を以て古詩と爲すは非なり蓋し七律吳體と同じ吳體下に詳かなり其の平仄一定する者三あり其の一の句法は仄仄仄平仄平平仄平第一字は平仄兩ながら可なり唐の唐求の鄭處士の隱居に題する詩に信ぜず最も清曠なるを

兩可、唐唐求題鄭處士隱居詩、不信最清曠、
 及來愁已空、數點石泉雨、一溪霜葉風、葉在
 有山處、道成無事中、酌盡一盃酒、老夫顏亦
 紅、通首用此句法、是所稀見、而一聯有之者
 甚多、少陵一徑野花落、孤村春水生、衫袂翠
 微酒、馬銜青草嘶、是也、此類不可勝舉、又有
 乖此格者、同人老去一杯足、誰憐屢舞長、野
 寺江天豁、山扉花竹幽、家遠傳書日、秋來爲
 客情、是也、然此出於不得已、非定格也、吳可
 有藏海詩話云、蘇州常熟縣破頭山有唐常
 建詩刻、乃是一徑遇幽處、蓋唐人作拗句、上
 句既拗、下句亦拗、所以對禪房花木深、遇與
 花皆拗故也、其詩近刻、時人常見之、姚寬西
 溪叢語亦載此事、此詩他書作「一徑通幽處、

來るに及むで愁已に空し、數點石泉の雨、一溪霜葉の風、
 葉は山有る處に在り、道は成る無事の中、酌盡す一盃の
 酒、老夫顏亦紅なり、通首此の句法を用ふ、是れ稀に見る
 所にして、而して一聯之れ有る者甚だ多し、少陵の「一徑
 野花落ち、孤村春水生ず、衫は翠微に裊して潤ひ、馬は青
 草を銜んで嘶く」と、是れなり、此の類、勝て舉ぐべからず
 又、此の格に乖く者あり、同人の「老去つて一杯足る、誰か、
 憐む屢舞うて長きを、野寺江天豁かに、山扉花行幽なり、
 家は遠し書を傳ふる日、秋は來る客と爲るの情」と、是れ
 なり、然れども、此れ已むを得ざるに出づ、定格に非ざる
 なり、吳可有の藏海詩話に云ふ、蘇州常熟縣の破頭山に、
 唐の常建の詩刻あり、乃是れ一徑幽處に遇ふと、蓋し唐
 人拗句を作る、上の句既に拗すれば、下の句も亦拗す、禪
 房花木深しに對する所以なり、遇と花と皆拗するが故
 なり、其の詩近刻、時人常に之れを見る、姚寬の西溪叢語
 にも、亦此の事を載す、此の詩他書に、「一徑幽處に通ず
 るに作る、故に其の誤りを匡す、瀟空律隨(卷十)の王介甫
 の暮春の詩に「悵望す夢中の地、王孫底ぞ歸らざる」と方
 回曰く、夢中の夢は、當に是れ用つて平聲なるべし、左傳
 に、楚の雲夢の地を夢中と曰ふ、夢の字平ならざれば、則

故匡其誤、瀛奎律髓卷十王介甫暮春詩、悵望
 夢中地、王孫底不歸、方回曰、夢中之夢當是
 用平聲、左傳楚雲夢地曰夢中、言夢字不平、
 則下句與上句不協也、又二十賈浪仙早春
 題湖上友人新居詩、開篋收詩卷、掃牀移臥
 衣、方回曰、前句不拗、只掃牀移臥衣、拗二字、
 二字言掃字當平而仄、移字當仄而平也、以
 上諸說其憚之如此、聲調譜拾遺云、凡律詩
 上句拗、下句猶可參用律調、下句拗、則上句
 必以拗調協之、此不易之法、此說拘於一偏、
 以余觀之、不論句之上下、一句既拗、則一句
 亦應拗而救之、其二句法、仄仄平仄仄、平平
 仄仄平、第一字平仄兩可、蘇味道在廣開崔
 馬二御史竝登相臺、喜得廊廟舉、嗟爲臺閣

ち下の句と上の句と協はざるを言ふなり、又(二十)賈浪
 仙の早春湖上友人の新居に題する詩に篋を開いて詩卷
 を收め、牀を掃うて臥衣を移す、方回曰く、前句は拗せず、
 只だ、牀を掃うて臥衣を移すは、二字を拗す、二字とは、
 掃の字當に平なるべくして仄、移の字當に仄なるべくし
 て平なるを言ふなり、以上の諸説、其の之れを憚ること
 此くの如し、聲調譜拾遺に云ふ、凡そ律詩は上の句拗す
 るも、下の句猶律調を參用すべし、下の句拗すれば、則ち
 上の句必ず拗調を以て之れに協ふ、此れ不易の法なり、
 此の説一偏に拘す、余を以て之れを觀れば、句の上下を
 論ぜず、一句既に拗すれば、則ち一句も亦應に拗して之
 れを救ふべし、其の二の句法は、仄仄平仄仄、平平平仄平、
 第一字は、平仄兩ながら可なり、蘇味道の廣に在りて崔
 馬二御史が竝に相臺に登るを聞くに、廊廟の舉を得るを
 喜び、臺閣の分を爲すを嗟く、少陵の初月に、光細して弦
 上らむと欲し、影斜にして輪未だ安からず、殿侍郎の錦
 州に到るを送るに、稍々弊渚に集り、微々風襟を動かす、
 春源に「蕭々として花絮晚れ、非々として紅素輕し」大盛
 三年の春、白帝に船を放ちて瞿塘峽を出るに、鹿角眞に
 險に走る、狼頭跋胡の如し、舟に登りて將に漢陽に適か

分少陵初月、光細弦欲上、影斜輪未安、送嚴
 侍郎到綿州、稍稍煙集、泚微微風動、襟春遠、
 肅肅花絮晚、菲菲紅素輕、大歷三年春、白帝
 城放船出、瞿塘峽、鹿角真走險、狼頭如跋胡、
 登舟將適漢陽、生理飄蕩拙、有心遲暮遠、發
 潭州、賈傅才未有、褚公書絕倫、暮雨題瀼西
 新賃草屋、不息豺虎鬪、空惹鷓鴣驚、行張九齡
 南還湘水言、懷魚意思在、藻鹿心懷食、萃王
 維歸嵩山作、流水如有意、暮禽相與還、岑參
 終南谿中作、洗藥朝與暮、釣魚春復秋、曹松
 夏雲暝鳥飛不到、野風吹得開、長安春日、御
 柳垂著水、野鶯啼破春、裴迪夏日過青龍寺
 謁操禪師、有法知不染、無言誰敢酬、白樂天
 夏夜宿直、人少庭宇曠、夜深風露清、劉禹錫

むとするに、生理飄蕩拙く、有心遲暮遠く、潭州を獲するに、賈傅才未だ有らず、褚公書絶倫、暮雨瀼西の新に賃する草屋に題するに、息まらず、豺虎の鬪空しく、惹づ鷓鴣の行、張九齡の南湘水に還りて懷を言ふに、魚意藻に在らむことを思ひ、鹿角平を食ふを懷ふ、王維の嵩山に歸る作に、流水意有るが如く、暮禽相與に還る岑參の終南谿中の作に、藥を洗ふ朝と暮と、魚を釣る春復秋、曹松の夏雲に、暝鳥飛べども到らず、野風吹き得て開く、長安春日に、御柳水に垂著し、野鶯春を啼破す、裴迪の夏日青龍寺に、過りて操禪師に謁するに、法有り不染を知る、言無し誰か敢て酬ひむ、白樂天の夏夜宿直に、人少くして庭宇曠く、夜深うして風露清し、劉禹錫の裴相公が白侍郎に寄せて雙鶴を求むるに和するに、留滯す清洛の苑、徘徊す明月の天、方干の暮に七里を發し、夜嚴光臺下に泊するに、但だ訝る猿鳥の定るを、知らず、霜月の寒きを、李羣玉の費拾遺の居る所を経て、封員外に呈するに、舊館苔蘚合し、幽齋松菊荒る、王建の原上の新春に、新に讖る隣里の面未だ譜せず、村舎の情東坡の寒食南湖に遊ぶに、郭を繞つて春水満ち、堤に被つて新柳黃なり、舟に乗りて買收の水閣を過るに、得意詩酒の社、終身魚稻の鄉、

和裴相公寄白侍郎求雙鶴留滯清洛苑俳
 徊明月天方干暮發七里灘夜泊戲光臺下
 但訝猿鳥定不知霜月寒李羣玉經費拾遺
 所居呈封員外舊館苔蘚合幽齋松菊荒王
 建原上新春新識隣里面未諳村舍情東坡
 寒食遊南湖繞郭春水滿被堤新柳黃乘舟
 過賈收水閣得意詩酒社終身魚稻鄉放翁
 過百澤木落山盡出鐘鳴僧獨歸江陵道中
 作水落魚可拾霜清裘欲重是也韓文公獨
 酌詩遠岫重疊見寒花散亂明下句不拗亦
 非定格也少陵貧賤人事略經過霖潦妨固
 是此格仇注讀事字爲平聲舉證云蔡中郎
 詞事字叶讀時帝曰休哉命公三事乃耀柔
 嘉式是百司凡以古韻論律韻無字不叶可

放翁の吉澤を過るに木落ちて山盡く出で鐘鳴つて僧
 獨り歸る江陵道中の作に水落ちて魚拾ふ可し霜清う
 して裘重ねんと欲すと是れなり韓文公の獨酌の詩に
 「遠岫重疊として見え寒花散亂として明かなりは下句
 拗せざるも亦定格に非ざるなり少陵の貧賤人事略し
 經過霖潦妨ぐは韻より是れ此の格仇注に事の字を讀
 みて平聲と爲し證を擧げて云ふ蔡中郎の詞に事の字
 時に叶讀す帝の曰く休い哉公に三事を命す乃ち柔嘉
 を耀し是の百司に式すと凡そ古韻を以て律韻を論ず
 れば字として叶はざるは無し見るべし漢人も亦此の格
 を知る者少きとを其三の句法は仄仄仄仄仄平平仄
 平第一字は平仄兩ながら可なり青蓮の席を江上に挂
 け月を待ちて懷ふ有るに月を待てば月未だ出でず江
 を望めば江自ら流る少陵の初月に江漢色を改めず關
 山空く自ら寒し遠を送るに草木歲月晚れ關河霜雪清
 し閬州より妻子を領して郤て蜀山の行に赴くに行色
 遷に隱見人煙時に有無宅に入るに奔峭赤甲に背き斷
 崖白鹽に當る舟に登りて將に漢陽に適かむとするに
 「春宅汝を棄て去る秋帆客の歸るを催す王閬州の筵
 十一男が別れを惜むの作に春酬するに良會復久しか

見漢人亦知此格者少矣、其三句法、仄仄仄
仄仄、平平平仄平、第一字平仄兩可、青蓮挂
席江上、待月有懷、待月月未出、望江江自流、
少陵初月、江漢不改色、關山空自寒、送遠草
木歲月晚、關河霜雪清、自閬州領妻子、卻赴
蜀山行、行色遞隱見、人煙時有無、入宅、奔帽
背赤甲、斷崖當白鹽、登舟將適漢陽、春宅棄
汝去、秋帆催客歸、王闓州筵奉酬十一、鼻惜
別之作、良會不復久、此生何太勞、岑參宿岐
州北郭、嚴給事別業、遙夜惜已半、清言殊未
休、于良史春山月夜、掬水月在手、弄花香滿
衣、白樂天晚歲壯歲忽已去、浮雲何足論、孟
浩然陪張丞相自松滋江東泊渚宮、洗犢豈
獨古、濯纓良在茲、李洞水墨障子、研盡一寸

六
らず此の生何ぞ太だ勞す岑參の岐州の北郭嚴給事が別業に宿するに、遙夜已に半なるを惜み、清言殊に未だ休まず、于良史の春山月夜に、水を掬すれば、月手に在り、花を弄すれば、香衣に滿つ、白樂天の晩歲に、壯歲忽已に去る、浮雲何ぞ論するに足らむ、孟浩然の張丞相に陪して、松滋江より東し渚宮に泊するに、帽を洗ふ豈に獨古のみならむ、纓を濯ふ良に茲に在り、李洞の水墨障子に、研し盡す一寸、纓、掃ひ成す千仞の峯、吳融の柳を詠するに、錦步障を拂ふに好し、銅雀臺を遮る莫れ、李成用の修睦上人の猿を聽くを利するに、疎雨灑いで歇まず、廻風吹いて暫く低る、張籍の海客の舊島に歸るを送るに、國に入つて自ら寶を獻じ、人に逢ふて多く珠を贈る、蘇舜欽の輞川に獨遊するに、數里亂石を踏み、一川碧峰を環る、東坡の倦夜に、衰髮久しく已に白く、旅懷空しく自ら清し、黃山谷の楊明叔に次韻するに、全德萬物を備へ、大方四隅無し、次韻して高子勉に答ふるに、久立我待つこと有り、長吟君來らず、會幾の竹を種うるに、餘子數ふるに足らず、此の君何ぞ無かる可けむ、陸務觀の湖に泛びて東逕に至るに、春水六七里、夕陽三五家、病中に、摩詰病めども法を説き、虞卿負けれども書著はす、偶數に清露

墨掃成千似峯、吳融詠柳好、拂錦步障、莫遮
 銅雀臺、李咸用和修睦上人聽猿疎雨灑不
 歇、廻風吹暫低、張籍送海客歸舊島入國自
 獻、寶逢人多贈珠、蘇舜欽獨遊桐川數里踏
 亂石、一川環碧峰、東坡倦夜、衰髮久已白、旅
 懷空自清、黃山谷次韻楊明叔、全德備萬物、
 大方無四隅、次韻答高子勉、久立我有待、長
 吟君不來、曾幾種竹、餘子不足數、此君何可
 無、陸務觀泛湖至東涇、春水六七里、夕陽三
 五家、病中摩詰病說法、虞卿貧著書、偶歎清
 露夜自滴、孤雲寒不歸、自咏萬事不挂眼、終
 年常避人、夏日獨居、已罷客載酒、亦無僧說
 禪、數日不作詩、偶爾得一語、快如疏九河、張
 耒破幌破幌一點白、臥知千里明、趙孟頫雨

夜自ら滴り、孤雲攀うして歸らず、自咏に「萬事眼に掛けず、終年常に人を避く、夏日獨居に、已に客の酒を載するを罷む、亦僧の禪を説く無し、數日詩を作らざるに、偶爾一語を得、快なること九河を疏するが如し、張耒の破幌に、破幌一點白、臥して知る千里の明なるを、趙孟頫の雨に、撼々として衆葉響き、滋々として生意新なり、張翥の石頭城の清涼寺に遊びて天錫が壁に題する詩の韻を用ふるに、日色到らざる處、樹陰渾て雲に似たり」と、是れなり、東坡の新年に「生物會中役有り、身を謀ること各時に及ぶ、陸務觀の郊行に「山色石黛を掃ひ、江流麴塵を漲らす」と、下旬拗せず、亦定格に非ざるなり、聲調譜に云ふ、五仄及び四仄の句中、須らく入聲字有るべし」と、按ずるに、信ぜず最も清曠、但だ訝る猿鳥の定ることを、良會復久しからず、候鳥飛べども至らず、萬事眼に掛けざるの類の如きは、皆句中に入聲字無し、此の説取るに足らざるなり、此の餘、青蓮の三平三仄の詩、陸務觀の四聲の詩、梅聖俞の五仄の詩の如き、其の體辨じ易し、且つ人多く之れを知れり、故に贅せず。

城城衆葉響滋滋生意新張鸞遊石頭城清
 涼寺用天錫題壁詩韻日色不到處樹陰渾
 似雲是也東坡新年生物會有役謀身各及
 時陸務觀郊行山色掃石黛江流漲麴塵下
 句不拗亦非定格也聲調譜云五仄及四仄
 句中須有入聲字按如不信最清曠但訝猿
 鳥定良會不復久隕鳥飛不到萬事不挂眼
 之類皆句中無入聲字此說不足取也此餘
 如青蓮三平三仄詩陸龜蒙四聲詩梅聖俞
 五仄詩其體易辨且人多知之故不贅焉

七言律換字句法

七言律拗體有平仄一定者有不一定者不
 一定者謂之吳體諸家集中皆有之而題稱
 吳體者少陵愁詩自注強戲爲吳體江草日

七言律換字句法

七言律拗體は平仄一定する者あり、一定せざる者あり、
 一定せざる者は之れを吳體と謂ふ、諸家集中皆之れ有
 り、而して題に吳體と稱する者は少陵の愁詩の自注に、
 強ひて戲れに吳體を爲す、江草日々愁を喚んで生ず、巫

日喚愁生、巫峽泠泠、非世情、盤渦鸞浴底、心性、獨樹花發、自分明、十年戎馬、暗萬國、異城、賓客、老孤城、渭水泰山、得見否、人今罷病、虎縱橫、杜律本題自注皮日休、獨夜有懷、因作吳體、病鶴帶霧、傍獨屋、破巢含雪、傾孤枯、濯足將加、漢光腹、抵掌欲、將梁武鬚、隱几清吟、誰敢敵、枕琴高臥、異堪圖、此時枉欠、高散物、楠瘤作尊石、作爐、同人早秋、吳體、書淫傳、癖窮欲死、讒讒何必、頻相仍、日乾陰、薛厚堪、劍藤把、敵松牢似繩、搗藥香、侵白袷、袖穿雲、潤破烏紗、稜、安得瑤池、飲殘酒、半醉騎、下垂天、鵬陸龜蒙、新秋月夕、客有自遠、相尋者、作吳體、以贈風初、窸窣、月乍滿、杉篁、左右供、餘清、因君一話、故山事、憶鶴、互應、深溪聲、雲門老僧、定未

詩格刊誤卷下

峽冷々世情に非ず、盤渦鸞は浴す底の心性ぞ、獨樹花發いて自ら分明、十年戎馬萬國に暗く、異城の賓客孤城に老ゆ、渭水泰山見ることを得るや否や、人今罷病して虎縱橫杜律本に自注を翻る皮日休の獨夜懷ふ有り、因りて吳體を作るに、病鶴霧を帯びて獨屋に傍ひ、破巢雪を含むで孤枯傾く、足を濯うて將に漢光の腹に加へむとす、掌を抵つて梁武の鬚を持んと欲す、几に隱つて清吟誰か敢て敵せむ琴を枕として高臥す眞に圖するに堪へたり、此の時枉げて欠く高散の物、楠瘤を尊と作し石を爐と作す、同人の早秋吳體に、書淫傳癖窮して死せむと欲す、讒々何ぞ必ずしも頻に相仍る、日は陰薛を乾かして厚うして劍ぐに堪へたり、藤は欵松を把つて牢うして繩に似たり、藥を搗けは香は侵す白袷、袖を穿てば潤破す烏紗、稜安ぞ瑤池の飲み残する酒を得て、半醉騎り下らむ垂天の鵬陸龜蒙の新秋月夕、客の遠きより相尋ぬる者有り、吳體を作りて以て贈るに、風初て窸々月乍も滿つ、杉篁左右餘清に供す、君に因つて一話す、故山の事、鶴を憶ふて互に應ふ、深溪の聲、雲門の老僧、定めて未だ起きず、白閣の道士遙に相迎ふ、日に聞く、羽檄日夜急と、臂を掉ひ崑下に歸つて行かむと欲す、同人の早春雪中吳體を作

起、白閣道士遙相迎、日開羽檄、日夜急、掉臂
 欲歸、崑下行、同人早春雪中作、吳體、迎春避
 臘不肯下、欺花凍草遠飄然、光填馬窟、蓋塞
 外、勢壓鶴巢、偏殿巔、山爐瘦節萬狀、火墨突
 乾、衰孤穗、煙君披鶴氅、獨立、何人解道真
 神仙、陸務觀吳體寄張季長、九月十月天雨
 雪、江南劍南途路長、平生故人阻攜手、萬里
 一書空斷腸、人生彊健已難恃、世事變遷那
 可常、兩家子孫各長、大他年窮達、毋相忘、是
 也、凡吳體篇中一二句、雖偶有律調、太抵無
 與古詩異、但中間四句必用對偶、無韻句第
 七字必用仄聲、此獨不失律詩本色、又有一
 篇半用此體者、少陵望岳、西岳峻嶒、竦處尊
 調律 諸峯羅立、如兒孫、安得仙人九節杖、拄到

るに春を迎へ臘を避けて肯て下らず、花を欺き草を凍し
 て還て飄然、光は馬窟を填めて塞外を蓋ひ勢は鶴巢を
 壓して殿巔に偏なり、山爐瘦節萬狀の火墨突乾衰す孤
 穗の煙、君は鶴氅を披て獨自ら立つ、何人か道ふを解せ
 む眞の神仙、陸務觀の吳體、張季長に寄するに、九月十月
 天雪を雨らず、江南劍南途路長し、平生故人手を構ふる
 ことを阻す、萬里一書空しく斷腸す、人生彊健己に恃み
 難く、世事變遷那ぞ常なる可けむ、兩家の子孫各長大な
 らば、他年窮達相忘ること母れと、是れなり、凡そ吳體
 篇中の一二句、偶律調ありと雖へども、大抵古詩と異な
 ること無し、但だ中間の四句は必ず對偶を用ひ、韻無き
 の句の第七字は、必ず仄聲を用ふ、此れ獨り律詩の本色
 を失はず、又一篇半ば此の體を用ふる者あり、少陵の望
 岳に、西岳峻嶒竦ゆる處尊し、律調諸峯羅立兒孫の如し、
 安ぞ仙人の九節杖を得て、拄して到らむ玉女の洗頭盆、
 三句、車箱谷に入りて歸路無く、箭括天に通じて一門有り、
 吳體、車箱谷に入りて歸路無く、箭括天に通じて一門有り、
 稍、四風涼冷の後を待つて、高く白帝を尋ねて眞源を問
 はむ、二句此の體を用ゆる者あり、灑灑に灑灑既に没し
 て孤、深し、西來水多くして太陰を愁ふ、江天漢々鳥雙
 び去り、風雨時々龍一吟す、揚舟人漁子歌ふて首を回ら

玉女洗頭盆、三句車箱入、谷無歸路、箭括通
 天有一門、稍待西風、涼冷後、高尋白帝、問其
 源、有二句用此體者、灑灑灑灑、既沒孤根深、
 西來水多愁、太陰、吳體江天漠漠、鳥雙去、風雨
 時時龍一吟、律舟人漁子、歌回首、估客胡商
 淚滿襟、寄語舟航、惡年少、休翻鹽井、擲黃金、
 有一句用此體者、題鄭縣亭子、鄭縣亭子澗
 之濱、吳體戶牖憑高發、興新雲斷岳、遠臨大路、
 天晴宮柳暗、長春巢邊野雀、群欺燕、花底山
 蜂、遠趁人、更欲題詩、滿青竹、晚來幽獨、恐傷
 神、卽事、天畔群山、孤草亭、律江中風浪、雨冥
 冥、律一雙白魚、不受釣、吳體三寸黃柑、猶自青、
律多病馬、卿無日起、窮途阮、律幾時醒、律未
 聞細柳、散金甲、腸斷秦川流、濁溼、律聲調譜

詩格刊誤卷下

し、估客胡商淚襟に滿つ、語を寄す舟航、惡年少、鹽井を翻
 へして黄金を擲つとを休めよ、一句此の體を用ふる者あり、
 鄭縣の亭子に題するに、鄭縣の亭子澗の濱、吳體、戶牖
 高きに憑つて興を發すると新なり、雲斷えて岳、遠大路に
 臨み天晴れて宮柳長春に暗し、巢邊の野雀、羣つて燕を欺
 き、花底の山蜂、遠く人を趁ふ、更に詩を題して、青竹に滿
 たむと欲す、晚來幽獨、恐くは神を傷ましめむ、卽事に、天
 畔の羣山、孤草亭たり、律江中の風浪、雨冥々、律一雙の
 白魚、釣を受けず、吳體三寸の黃柑、猶自ら青し、律多病
 の馬、卿起つに日無く、窮途の阮、律幾時か醒む、律未だ聞
 かず細柳の金甲を散ずるを、腸は斷ゆ、秦川濁溼を流すを、
 (擲律)聲調譜拾遺に云ふ、王敬美謂ふ、詩一句、拗する者
 無しと、約按するに、此れ未だ必ずしも然らざるなり、而
 して一句、拗する者、後人恐くは效ひ難からむ、又趙翼の
 甌北詩話に云ふ、拗體の七律、鄭縣亭子澗の濱、獨立標、
 細柳の飛樓の類の如き、杜少陵の集に最も多し、乃ち専ら古
 體を用ひて、平仄を諧へず、中唐以後は、則ち李高隱、趙嘏
 の輩、創めて一種と爲す、第三第五字を以て、平仄互に易
 ふ、溪雲初て起て、日閣に沈み、山雨來らむと欲して、風樓
 に滿つ、殘星幾點、石雁塞に横はり、長笛一聲、人樓に倚る、

拾遺云、王敬美謂、詩無一句拗者、約按此未必然也、而一句拗者、後人恐難效焉、又趙翼甌北詩話云、拗體七律、如鄭縣亭子淵之濱、獨立縹緲之飛樓之類、杜少陵集最多、乃專用古體、不諧平仄、中唐以後、則李商隱、趙嘏、齊、創爲一種、以第三第五字平仄互易、如溪雲初起日沈閣、山雨欲來風滿樓、殘星幾點雁橫塞、長笛一聲人倚樓之類、別有擊撞波折之致、至元遺山、又創一種拗在第五六字、如來時瑀、筆騎仙詔去、日攀車餘淚痕、太行秀發眉宇見、老阮亡來檣俎間、雞豚鄉社相勞苦、花木禪房時往還、肺腸未潰猶可活、灰土已寒事復燃、市聲浩浩如欲沸、世路悠悠殊未涯、冷猿挂夢山月暝、老雁叫盡江渚深、

の類の如き、別に擊撞波折の致あり、元遺山に至りて、又一種の拗を創む、第五六の字に在り、來る時筆を珥して健詔に誇り、去る日車を鑾ちて淚痕を餘す、太行秀發して眉宇見え、老阮亡來す檣俎の間、雞豚郷社相勞苦す、花木禪房時に往還す、肺腸未だ潰せず猶活す可し、灰土已に寒し寧ぞ復燃えむや、市聲清々沸かんと欲するが如く、世路悠悠殊に未だ涯あらず、冷猿夢を掛けて山月暝く、老雁群を叫むで江渚深し、春波淡々沙島没し、野色荒々、煙樹平かなり、青山兩岸古木多く、平地數峰畫屏の如し、長虹夜飲むで海も竭むと欲し、老雁羣を叫むで秋更に哀し、約曰く、此の一聯自ら別なり、東門の太傅祖道多く、北闕の詩人上書するを休めよの類の如き、集中、枚舉すべからず、然れども、後人習ひ用ふる者少し、該餘叢考にも亦た載す、此の説非なり、魏廢之の詩人王履卷二に、禁鬻を引きて云ふ、善直の換字對句法、只今滿坐且つ尊酒、後夜此の堂空しく月明清談筆を落とす一萬字、白眼龍を擧ぐ三百盃、田中誰か問ふ履に納れざるを座上適に來る何の處の蠅ぞ、鞦韆門巷火新に改まり、桑柘田園春分に向ふ、忽ち舟に乗り去つて花雨に値ひ、雪を寄得し來る應に麥秋なるべし、其の法、當に平字を下すべき處に於

春波淡淡沙鳥沒野色荒荒煙樹平青山兩岸多古木平地數峯如畫屏長虹夜飲海欲竭老雁叫羣秋更哀約曰此一東門太傅多聯自別祖道北闕詩人休上書之類集中不可枚舉然後人習用者少該餘叢考亦載焉此說非也魏慶之詩人玉屑卷二引蔡衡云魯直換字對句法如只今滿坐且尊酒後夜此堂空月明清談落筆一萬字白眼舉觴三百盃田中誰問不納履坐上適來何處蠅鞦韆門巷火新改桑柘田園春向分忽乘舟去值花雨寄得書來應麥秋其法於當下平字處以仄字易之欲其氣挺然不羣前此未有入作此體獨魯直變之又引蒼溪漁隱云此體本出於老杜如龍光蕙葉與多碧點注桃花舒小紅

て仄字を以て之れに易ふ其の氣の挺然不羣なるを欲す此れより前未だ人の此の體を作るもの有らず獨り魯直之れを變ず又蒼溪漁隱を引きて云ふ此の體本と老杜より出づ蕙葉を龍光して多碧を與へ桃花に點注して小紅を舒ふ一雙の白魚釣を受けず三寸の黃柑猶自ら青し外江三峽且つ相接し斗酒新詩終日疎なり」鹽を負ふて井を出づ此の溪の女鼓を打つて船を發す何れの郡の郎ぞ沙上の草閣柳新に暗く城邊の野池蓮紅ならむと欲すの如き此くの似き體甚だ多し聊か此の數聯を擧ぐ獨り魯直のみ之れを變ずるに非ざるなり今俗に之れを拗句と謂ふ者是れなり是れに由りて之れを觀れば溪雲初て起て日關に沈み及び長虹夜飲むて海場きむと欲すの類の如き豈に李趙元遺山の創むる所ならむや而して玉屑も亦甚だ分解無し一雙の白魚釣を受けず及び沙上の草閣柳新に暗し」の類の如きは則ち謂はゆる吳體にして他の拗句と混すべからず平仄一定する者は當に分ちて三と爲すべし其の一の句法は平平仄仄平仄仄仄平平平仄平第一字三字は

一雙白魚不受釣、三寸黃柑猶自青、外江三
 峽且相接、斗酒新詩終日疎、負鹽出井此溪
 女、打鼓發船何郡郎、沙上草閣柳新暗、城邊
 河池還欲紅、似此體甚多、聊舉此數聯、非獨
 魯直變之也、今俗謂之拗句者、是也、由是觀
 之、如溪雲初起日沈閣、及長虹夜飲海欲竭
 之類、豈李趙元遺山之所創哉、而玉屑亦甚
 無分解、如一雙白魚不受釣、及沙上草閣柳
 新暗之類、則所謂吳體、不可與他拗句混、平
 仄一定者、分爲三、其一句法、平平仄仄仄
 平仄、仄仄平平平仄平、第一字三字平仄兩
 可與五言一徑野花落、孤村春水生同格、乃
 籠光蕙葉與多碧、點注桃花舒小紅之類、是
 也、聲調譜謂之拗律、蓋以拗而不失律調也、

平仄兩ながら可なり、五言の、一徑野花落、孤村春水生
 才と同格、乃ち、蕙葉を籠光して多碧を興へ、桃花を點注
 して小紅を舒ぶの類、是れなり、聲調譜に、之れを拗律と
 謂ふ蓋し拗して而して律調を失はざるを以てなり、古
 人の詩中に、此の體甚だ多し、煩しく其の例を挙げず、又、
 少陵の「舊來好事今能くするや否や、老い去つて新詩誰
 か興に傳へむ一聲何れの内ぞ書を送る雁、百丈誰が家ぞ
 湖に上る船」の類の如き、拗を以て拗に對せず、定格に非
 ざるなり、其の二の句法は、平平仄仄平仄仄、仄仄平平平
 仄平、第一字三字は、平仄兩ながら可なり、五言の、廊廟の
 擧を得るを喜び、臺閣の分を爲すを嗟くと同格、少陵の
 章梓州の「橋亭に、成都の賈少尹を餞するに、主人客を送
 つて何の作す所ぞ、酒を行行詩を賦して殊に未だ央なら
 ず、白樂天の正月三日閑行に、黃鸝巷口鶯語らむと欲し、
 烏鶻河頭冰漸く消す、周暗大夫の光福宅に宴するに、軒
 車路を擁して光地を照し、絲管門に入れば聲天に沸く、
 韓屋の夜船に、月明にして船上靡帳捲き、露重うして岸
 頭花木香し、許渾の「後敵臺に韋秀才を送るに、野蠶肉を

古人詩中、此體甚多、不煩舉其例、又如少陵
 舊來好事、今能否、老去新詩、誰與傳、一聲何
 處、送書雁、白丈誰家上、潮船之類、不以拗對
 拗、非定格也、其二句法、平平仄仄、仄仄、仄
 仄、平平、仄仄、第一字三字平仄兩可、與五
 言喜得廊廟舉、嗟爲臺閣分、同格、少陵章梓
 州橋亭餞成都賚少尹、主人送客何所作、行
 酒賦詩殊未央、白樂天正月三日閑行、黃鸝
 巷口鶯欲語、烏鵲河頭冰漸消、宴周皓大夫
 光福宅、軒車擁路光照地、絲管入門聲沸天、
 韓偓夜船、月明船上簾幙捲、露重岸頭花木香、
 許渾凌歊臺送韋秀才、野蠶成繭桑柘盡、鶻
 鳥引雛蒲稗深、東坡送喬施州、恨無負郭田
 二頃、空有載行書、五車、陳州與文郎逸民飲

詩格刊誤卷下

成して桑柘盡き、鶻鳥雛を引いて蒲稗深し東坡の喬施
 州を送るに、恨むらくは負郭の田二頃無きを、空しく載
 行の書五車有り、陳州に文郎逸民と飲別するに、春風料
 峭として羊角轉じ、河水渺渺として瓜苾流る、韋老の天
 慶觀を拜くに、扁舟去つて後花絮亂れ、五馬來る時賓從
 非なり、黃山谷の輓、章、の河東に赴くを送るに、月斜に
 して汾沁驪馬を備じ、雪暗うして崑崙酒盃を傳ふ、楊萬
 里の賦を平げ師を班し、明に湖州を發するに、官軍已に
 掃ふ狐兔の窟、路孤くこと莫れ、山水の鄉、浮石清曉
 船を放ちて雨に遇ふに、秋江雨を得て茶鼎の如く沸き、
 怒點箏を打つて荷葉の如く鳴る、箏を走らして吉守趙判
 院が三山の荔枝を分餉するを謝するに、西川の紅錦此の
 色無く、南海の綠羅猶酸を帶ぶ、務觀の北渚に、新秋漸
 近くして蟬更に急なり、殘日已に沈むで鴉未だ歸らず、
 早秋南堂夜興に、風前の落葉紛として拂ふ可く、天際の
 疎星森として芒有り、南鄭を懐ふ有りに、秋風虎を
 逐ふ花叱撥、夜雪熊を射る金僕姑、自咏に、平生意に薄ん
 ず刀筆の吏、老に投じて身は山、の真と爲る、元の劉因

別春風斜。隋羊角轉。河水渺。縣瓜蔓流。羊老
 蒼天慶。觀扁舟去。後花絮亂。五馬來時。賓從
 非黃山谷。送顧子敦。赴河東。月斜汾沁。催驛
 馬。雪暗。肯風傳酒盃。楊萬里平賊。班師明發
 潮州。官軍已掃狐兔窟。歸路莫孤山水鄉。浮
 石澗。曉放船。遇雨。秋江得雨。茶鼎沸。怒點打
 篷。荷葉鳴。走籟。謝吉守。趙判院。分餉三山荔
 枝。西川紅錦無此色。南海綠羅猶帶酸。陸務
 觀北渚。新秋漸近。蟬更急。殘日已沈。鴉未歸
 早秋。南堂夜興。風前落葉紛可拂。天際疎星
 森有芒。獨酌有懷。南鄒秋風。逐虎花叱撥。夜
 雪射熊金僕姑。自咏平生。意薄刀筆吏。投老
 身爲山澤癯。元劉因夏日飲山亭。空鉤坐鉤
 魚亦樂。高枕臥遊山自前。是也。此體亦非元

の夏日山亭に飲むに、空鉤座して釣れば魚も亦樂しみ、
 高枕臥遊すれば山自ら前む」と是れなり、此の體も亦元
 遺山の創むる所に非ざるなり、金の宇文虛中の詩に經
 中人我の相を認むるに因つて、教外都て忘る大小乗」と
 下の句拗せず、定格に非ざるなり、其の三の句法は、平平
 仄仄仄仄、仄仄平平仄仄、第一字三字は、平仄兩なが
 ら可なり、五言の「月を待てば月未だ出でず、江を望めば
 江を望めば江自ら流る」と同格、少陵の七月一日終明府
 の水樓に題するに、家に承くる節操尙混びず、政を爲し
 て風流今茲に在り、殷文圭の八月十五夜に、滿衣の冰彩
 拂へども落ちず、遍地の水光凝つて流れむと欲す、李郢
 の孔雀に、一身の金翠畫けども得ず、萬里の山川來る者
 稀なり、竊奉山行、田家に馬を轍ふに、青蛇竹に上る一種
 の色、黃蝶溪を隔つ眼無き的情、翟魯の春日長安御事に
 「行人自ら笑ふ意を得ざるを、匹馬獨吟、予眞に哀む可し」
 蘇舜欽の春睡に、身は蟬蛻の如く一榻に上り、夢は楊花
 に似て千里に飛ぶ、楊舜韶の孫堅の墓を過ぐるに、久し
 く行客の爲に馬を下る無し、但だ牧童の來つて牛を放つ

遺山之所創也。金子文虛中詩。經中因認人
 我相。教外都忘大小乘。下句不拗。非定格也。
 其三句法。平平仄仄仄。仄仄平平平。平仄
 平。第一字三字平仄兩可。與五言待月月未
 出。望江江自流。同格。少陵七月一日題終明
 府水樓。承家節操尚不泯。爲政風流今在茲。
 般文圭八月十五夜。衣冰彩拂不落。遍地
 水光凝欲流。李鄴孔雀一身金翠畫不得。萬
 里山川來者稀。暮春山行田家歇。馬青蛇上
 竹。一種色黃蝶。隔溪無限情。崔魯春日長安
 卽事。行人自笑不得意。匹馬獨吟真可哀。蘇
 舜欽春睡身如蟬蛻。一榻上夢似楊花千里
 飛。楊舜韶過孫堅墓。久無行客爲下馬。但有
 牧童來放牛。東坡與歐育等六人飲酒。年來

詩格刊誤卷下

有り東坡の歐育等六人と酒を飲むに、年來齒髮老ゆれ
 ども未だ老いず、此を去つて江淮東復東山谷の黃鶴復
 に寄するに、家を持して但だ四立の壁有り、病を治して
 三折肱を斷めず、梅堯臣の橙を咏するに、洞庭の朱橋未
 だ色を弄せず、襄水の錦襪多く己に黄なり、孫俸の雁蕩
 に和するに、山頭水闊うして影を見ず、巖下沙平にして
 時に蹀有り」と、陸務觀の詩、此の體尤も多し、其の避俗臺
 に、但だ知る禮豈に我が爲に設けむや、管すること莫れ
 客は何れの處従り來ると、桐廬縣より舟を泛べて東歸す
 るに、宦遊何ぞ霄路九折のみならむ、歸隊恨むらくは山
 萬重無きを遣興に、身を愛して毎に戒む玉鶻に、抵つを、
 氣を養ふて刀の牛を解くが如きを要す、幽居春夜に、雲
 は住月に逸ふて毎に命を避け、酒は閑愁を厭して降を受
 くるが如し、酒に對するに、此の身幸に己に虎口を脱す、
 手有り但だ蟹螯を持するに堪へたり、寓歎に、心の地萬
 里を縮むるを求むる有り、羽の天九重に朝す可き無し、
 書劍に、老いて皆死有り豈に獨り我のみならん、士固より
 多く窮す、寧ぞ天を怨みむ野寺に、林蟬斷えむと欲して

齒髮老未老。此去江淮東復東。黃山谷寄黃
 幾復持家但有四立壁。治病不斬三折肱。梅
 堯臣詠橙。洞庭朱橘未弄色。囊水錦橙多已
 黃。和孫伴雁蕩。山頭水澗不見影。巖下沙平
 時有蹤。陸務觀詩。此體尤多。其避俗臺。但知
 禮豈爲我設。莫管客從何處來。桐廬縣泛舟
 東歸。宦遊何管路九折。歸臥恨無山萬重。遣
 興愛身每戒玉。抵鵲養氣要如刀。解牛幽居
 春夜雲逢佳月。每避合酒壓閑愁。如受降對
 酒。此身幸已脫虎口。有手但堪持蟹螯。萬歎
 有心求縮地。萬里無羽可朝天。九重書劔老
 皆有死。豈獨我士固多窮。寧怨天。野寺林蟬
 欲斷暮復急。竹露如傾秋更多。初歸雜咏。胸
 中那可有一事。天下故應無兩人。梅花相逢

暮に復急なり、竹露傾くが如く秋更に多し、初歸雜詠に
 「胸中那ぞ一事有る可けむ、天下故に應に兩人無かるべ
 し、梅花に相逢ふて只だ怪む影も亦好きを、歸去始めて
 驚く身香に染むを垂釣に、目前に小得失有り」と雖も、天
 下豈に公是非無からむや、新醖熟して樂笑亭に小醉する
 に、文章進まず、技此に止る、仕官歸るを忘る人何とか謂
 はむ、冬夜に、殘燈烟無く穴竄出で、槁葉聲有り村大行く
 と、是れなり、又葉道人に寄するに、山を尋ねて猶費す幾
 兩の屐、酒を貯へて眞に百斛の船を須ふ、村居に、詩を著
 して幸に後世を俟つ可し、客に對して嘖るに從せて大眈
 に臥すと、下の句拗せず、定格に非ざるなり、容齋隨筆十
 二に云ふ、山谷の寺齋睡起の句に云ふ、人は言ふ九事八
 は律の爲めなり、儻し江船有らば吾東せむと欲す、按ず
 るに、主父僊上書して九事を言ふ、其の八事は律令の爲
 めなり、一事は匈奴を伐つを諫む、八事律令の爲めにし
 て而して言ふと謂へば、則ち爲の字當に去聲と作して讀
 むべし、今魯直以て平聲と爲すに似たり、恐くは誤なら
 む、此れ洪邁未だ此の格を知らずして、卻つて魯直を以

只怪影亦好、歸去始驚身、染香垂釣、目前雖
 有、小得失、天下豈無公、是非新釀熟、小醉索
 笑亭、文章不進技、止此仕宦、忘歸人、謂何、冬
 夜殘燈無、燭穴鼠出、稿葉有聲、村犬行、是也
 又寄葉道人、尋山猶費幾、兩屐貯酒、真須百
 斛船、村居著書、幸可俟後世、對客從嘆、臥大
 牀、下句不拗、非定格也、容齋隨筆二十云、山谷
 寺齋睡起句云、人言九事八爲律、儻有江船
 吾欲東、按、主父偃上書言九事、其八事爲律
 令、一事諫、伐匈奴、謂八事爲律令、而言、則爲
 字當、作去聲讀、今魯直似以爲平聲、恐誤也、
 此洪邁未知此格、卻以魯直爲誤、可笑哉、以
 上所舉之五七言拗句、非獨對句用之、散句
 亦有焉、今略之、吳憲拜經樓詩話、卷一引蔣山

て誤りと爲す、笑ふべき哉、以上擧ぐる所の五七言拗句
 獨り對句のみ之れを用ふるに非ず、散句にも亦有り、今
 之れを略す、吳憲の拜經樓詩話卷二に、蔣山儻の詩律蒙
 告を引きて云ふ、拗は須らく拗にして到底すべしと、聲
 調譜拾遺に云ふ、唐人五七言近體詩起調多く拗句を作
 す、詩律は起調に於て較寬なるを知るなりと、此の二説、
 未だ必ずしも然らざるなり、凡そ拗句は、或は一聯之れ
 を用ひ、或は二聯三聯之れを用ひ、或は全首之れを用ふ、
 或は起調に在り、或は中間に在り、或は落句に在り、便に
 從ひて之れを用ふ、必とする所無きなり、宜しく多く古
 人の詩を讀み而して之れを自得すべきなり、

備詩律蒙告云、拗須拗到底、聲調諧拾遺云、唐人五七言近體詩、起調多作拗句、知詩律於起調較寬也、此二說未必然也、凡拗句、或一聯用之、或二聯三聯用之、或全首用之、或在起調、或在中間、或在落句、從便用之、無所必也、宜多讀古人拗、而自得之。

絶句換字句法

五言絶句多古體、其拗句平仄一定者、無與律異、七言絶句平仄不一定者、與吳體同、青蓮登廬山、五老峯、廬山東南五老峯、青天削出金芙蓉、九江秀色可攬結、吾將此地巢雲松、是也、有二句用之者、山中對酌兩人對酌、山花開、一杯一杯復一杯、我醉欲眠卿且去、明朝有意抱琴來、有一句用之者、少年行、五

絶句換字句法

五言絶句は古體多し、其の拗句の平仄一定する者、律と異なること無し、七言絶句の平仄一定せざる者は、吳體と同じ、青蓮の廬山の五老峰に登るに、廬山東南五老峰、青天削出金芙蓉、九江の秀色攬結す可し、吾此の地を將て雲松に巢はむと、是なり、二句之れを用ふる者有り、山中對酌に、兩人對し酌めば山花開く、一杯一杯復一杯、我は醉ふて眠らむと欲す卿且つ去れ、明朝意有らば琴を抱いて來れと、一句之れを用ふる者あり、少年行に、五陵の年少金市の東、銀鞍白馬春風に度る、落花隨盡して何れの處にか遊ぶ、笑ふて胡姬酒肆の中に入る、平仄一定

陵年少金市東、銀鞍白馬度春風、落花踏盡
 遊何處、笑入胡姬酒肆中、平仄一定者、亦無
 與律異、送孟浩然孤帆遠映碧山盡、惟見長
 江天際流、此體甚多、此詩他書映作影、山作
 空、今據陸務觀入蜀記、又顧況贈僧上人一
 向心入定、春鳥年年空自啼、陸龜蒙高道士
 峨眉道士風骨峻、手把玉皇書一通、崔道融
 雞深山月黑、風雨夜欲近、曉天啼一聲、又少
 陵春水生、鷓鴣灘、鶉莫謾喜吾與汝曹俱眼
 明、鄧谷越鳥背、霜南雁不到、處倚棹、北人初
 聽時、朱慶餘嶺南路、終冬來往不踏雪、盡在
 刺桐花下行、殷堯藩吹笙歌、玉桃花片落不
 住、三十六簧能喚風、崔塗放鷓鴣、滿身金翠
 畫不得、無限煙波何處歸、陸龜蒙秋荷、盈盈

する者ば、亦律と異なること無し、孟浩然を送るに、孤帆
 遠く碧山に映じて盡く、惟だ見る長江の天際に流るを、
 と、此の體甚だ多し、此の詩他書に、映を影に作り、山を空
 に作る、今陸務觀の入蜀記に據る、又顧況の僧に贈るに
 「上人一向心定に入る、春鳥年々空しく自ら啼く、陸龜蒙
 の高道士に、峨眉の道士風骨峻なり、手に玉皇の書一通
 を把る、崔道融の鷄に、深山月黒うして風雨の夜、曉天に
 近からむと欲して啼くこと一聲、又少陵が春水生する
 に、鷓鴣灘鶉謾に喜ぶこと莫れ吾汝が曹と俱に眼明な
 るなり、鄧谷の越鳥に、霜に背く南雁到らざる處、棹に倚
 る北人初て聽く時、朱慶餘の嶺南路に、終冬來往して雪
 を踏まず、盡く刺桐花下に在つて行く、殷堯藩の吹笙の
 歌に、玉桃花片落ちて住らず、三十六簧能く風を喚ぶ、崔
 塗の鷓鴣を放つに、滿身の金翠畫けども得ず、限り無き
 煙波何れの處にか歸る、陸龜蒙の秋荷に、盈盈一水渡る
 ことを得ず、冷翠遺香愁ひて人に向ふと、此れ等少から
 ず。

一水不得渡、冷翠遺香愁向人、此等亦不少。

諸拗句

枕山樓詩話云、詩中第一字三字五字、或當用平而用仄、或當用仄而用平、俱可不論也、然此亦不得已而行變通之法、非謂不刊之式也、此說未可也、第一字三字五字、有可行變通之法、處有不可行處、太宰德夫斥非云、唐詩法五言第二字第四字異、平仄、七言第二字第四字異、平仄、第二字第六字同、平仄、此不易之法也、後之作詩者莫不遵守此法、唯五言平起有韻句第一字、與七言仄起有韻句第三字、必須平聲、五言如金尊對綺筵、晴光轉綠蘋、七言如萬古千秋對洛城、不似湘江水北流、金晴千湘字皆平聲、此亦唐律

諸拗句

枕山樓詩話に云ふ、詩中の第一字三字五字は、或は當に平を用ふべきに、而かも仄を用ひ、或は當に仄を用ふべきに、而かも平を用ふるは、俱に論ぜざるべし、然れども、此れ亦已むを得ず而して變通の法を行ふ、不刊の式と謂ふに非ざるなりと、此の説、未可なり、第一字三字五字は變通の法を行ふ可き處有り、行ふ可からざる處有り、太宰德夫の斥非に云ふ、唐詩法、五言は、第二字第四字平仄を異にし、七言は、第二字第四字平仄を異にし、第二字第六字平仄を同じくす、此れ不易の法なり、後の詩を作る者、此の法を遵守せざること莫し、唯だ五言の平起有韻の句の第一字と、七言仄起の有韻の句の第三字と、必ず平聲を須ふ、五言の金尊綺筵に對す、晴光綠蘋に轉す、七言の萬古千秋洛城に對す、湘江水の北流するに似ず、の如き、金晴千湘の字皆平聲、此れ亦唐律一定の法、詩人の慎み守る所なり、倭人知らずして、往々仄聲の字を用ひて是の位に在り、五言の晚霞赤城に落つ、鳥は啼く竹樹の間の如き、七言の萬戸衣を擣て暮秋ならむと欲す、

一定之法、詩人所慎守也、倭人不知、往往用仄聲字、在是位、五言如「晚霞落赤城、鳥啼竹樹間、七言如「萬戶擣衣欲暮秋、傾倒百壺夜未央、句非不、晚鳥擣百字皆仄、是聲病、余嘗檢唐以後詩家詩、五言句犯所云者未之見也、若其第一字仄聲、則第三字必平聲者、時有之矣、如「到來生隱心、主人孤島中、是也、然亦數十百首中僅有一二句耳、明人王元美哭李于鱗排律、一百二十韻、凡二百四十句內、平起有韻句六十、而無一句犯所云法者、亦可以證余說也、七言句犯所云法者在唐人、則自崔惠童一月主人笑幾回之外、未之有、觀也在明人、則如李滄溟「黃鳥一聲酒一杯、是也、此亦數百千首中、僅一二句耳、他

「百壺を傾倒して夜未だ央ならずの如き、句は佳ならざるに非ず、晚鳥擣百の字皆仄、是れ聲病なり、余嘗て唐以後の詩家の詩を檢するに、五言の句、云ふ所を犯す者未だ之れを見ざるなり、若し其の第一字仄聲なれば、則ち第三字必ず平聲なる者、時に之れ有り、到來生隱心を生ず、主人孤島の中、の如き、是れなり、然れども、亦數十百首中に、僅に一二句あるのみ、明人王元美の李于鱗を哭する排律、一百二十韻、凡そ二百四十句内に、平起有韻の句六十、而して一句も云ふ所の法を犯す者無し、亦以て余が説を證すべし、七言の句にして、云ふ所の法を犯す者は、唐人に在りては、則ち崔惠童の「一月主人笑、幾回ぞの外、未だ之れを觀ること有らざるなり、明人に在りては、則ち李滄溟の「黃鳥一聲酒一杯、の如き、是なり、此れ亦數十百首中に、僅に一二句のみ、他若し第三字仄聲なれば、則ち第五字必ず平聲なる者、亦時に之れ有り、笑、て問ふ容は何れの處従り來ると、明日忽千里の人と爲る、昨日は少年今は白頭の如き、亦百中一二のみ、張九齡の「欣ぶ君が遠我を發するを、の如き、當に喜の字を下すべし、而るに欣の字を下す、韓翃の「玉轡將迎して漢宮に入る、の句は、當に送迎と云ふべきに、而るに將迎と云ふ、喜送

若第三字仄聲、則第五字必平聲者亦時有之矣、如笑問客從何處來、明日忽爲千里人、昨日少年今白頭、亦百中一二耳、如張九齡欣君震遠戎、當下喜字而下欣字、韓翃玉輦將迎入漢宮、句當云送迎而云將迎、爲喜送二字仄聲、故皆以平聲字換之也、此亦可以見詩人慎聲病也、云云、忌此聲病、近人皆知之、而德夫所云未詳、故余更觀縷之、按、五言犯此法者、青蓮南陽送客詩、斗酒勿爲薄、寸心貴、不忘秋浦歌、兩鬢入秋浦、一朝颯已衰、戴叔倫送友人東歸詩、萬里楊柳色、出關送故人、聲調譜拾遺舉青蓮南陽送客詩云、趙譜云、下句第二字平、第一字及第三字用仄、爲落調、觀此似不可信、然上句不拗、下句亦

二字仄聲なるが爲の故に、皆平聲の字を以て之れに換ふなり、此れ亦以て詩人の聲病を慎むを見るべきなり云、此の聲病を忌むこと、近人皆之れを知る、而して德夫の云ふ所未だ詳ならず、故に余更に之れを觀縷す、按ずるに、五言にして此の法を犯す者は、青蓮の南陽にて客を送る詩に「斗酒薄しと爲す勿れ、寸心忘れざるを貴ぶ」秋浦の歌に「兩鬢秋浦に入り、一朝颯として已に衰ふ」戴叔倫の友人の東歸を送る詩に「萬里楊柳の色、關を出でて故人を送る聲調譜拾遺に、青蓮の南陽にて客を送る詩を擧げて云ふ、趙譜に云ふ、下の句第二字平なるに、第一字及び第三字仄を用ふるを落調と爲すと、此れを觀れば、信すべからざるに似たり、然れども、上句拗せざれば、下句も亦此を著くべからず、今人失調の處、上下の句を論じて細に之れを參せざるに在りと、此の説亦未だ必ずしも然らざるなり、青蓮の秋浦の歌に「秋浦千重の嶺、水車嶺最も奇なり」少陵の月を翫びて、漢中王に呈する詩に「夜深くして露氣清し、江月江城に滿つ」此れ上下の句拗せず、七言にして此の法を犯す者は、唐の周繇の、人蔘を以て段柯古に遺るに「更に請ふ伯言無細に看よ」、宋の孫觀の梅の詩に「細々たる落花石缸に點す、葉適の橘

不可著此、今人失調處、在不論上下句細參之、此說亦未必然也、青蓮秋浦歌、秋浦千重嶺、水車嶺最奇、少陵既月呈漢中王詩、夜深露氣清、江月滿、江城此上下句不拗、七言犯此法者、唐周絲以人蔘遺段柯古、更請伯言審細看、宋孫觀梅詩、細細落花點石碣、葉適橘枝詞、不唱柳枝唱橘枝、東坡慈湖夾阻風、弱纜欲爭萬里風、放翁六十二吟、三百里湖水接天、朝鮮徐剛中東人詩、話所載李永瑞詩、金榜玉堂早策勳、猶未可止於此、雖然容齋隨筆一卷、白樂天詩、在郡六百日、入山十二回、十字作平聲讀、放翁老學庵筆記三卷、晁以道詩、煩君一日殷勸意、示我十年感遇詩、以十爲誰矣、野客叢書八卷、云、如請召之請

詩格刊誤卷下

枝の詞に「柳枝を唱へず橘枝を唱ふ、東坡の慈湖夾に風に阻てらるゝに、弱纜争はむと欲す、萬里の風放翁の六十二の吟に、三百里の湖水天に接す、朝鮮の徐剛中の東人詩話に載する所の李永瑞の詩に、金榜玉堂早く勳を策す」と猶未だ此に止るべからず、然りと雖ども、容齋隨筆(卷一)に云ふ、白樂天の詩に、郡に在ること六百日、山に入ること十二回、十の字、平聲と作して讀む、放翁の老學庵筆記(卷三)に云ふ、晁以道の詩に、君を煩はす一日殷勸の意、我に示す十年感遇の詩十を以て誰と爲す、野客叢書(卷八)に云ふ、請召の請の如き、平聲に協ふ、姚合の詩に「毎月錢を請ふて客と共に分つ、此の諸説を觀れば、古人の此の病を避くる者至れり、後人用ふべからざるなり。

協平聲、姚合詩、每月請錢共、客分、觀此諸說、古人避此聲病者至矣、後人不可用也。

聲調譜拾遺論、少陵奉答岑參補闕見贈詩、故人得佳句之句、云、趙譜云、第三字仄、第四字平、則第一字必平、觀此似不必拘、此說是也、詩數內編云、陰鏗約曰、六朝時人、有夾池竹四韻、云、夾池一叢竹、垂翠不驚寒、葉醒宜城酒、皮裁薛縣冠、湘川染別淚、衡嶺拂仙壇、欲見麗粧色、當來兔苑看、於沈法亦皆諧合、惟起句及五句拗二字、而非唐律所忌、又拾遺論、少陵崔氏東山草堂詩、愛汝玉山草堂靜、云、趙譜云、第三字必平、而此偏仄、可與五言中故人得佳句之句參看、按、張籍宿江上館、月明見潮上、江靜覺鷗飛、唐彥謙鴻鵠詩、華屋然

聲調譜拾遺に、少陵の岑參補闕が贈らるゝ詩の、故人佳句を得たりの句を論じて云ふ、第三字仄、第四字平なれば、則ち第一字必ず平と、此れを觀れば、必ずしも拘らざるに似たり、此の説是なり、詩藪内編卷四に云ふ、陰鏗(約曰く六朝の時の人)に、夾池の竹の四韻有り、云く、池に夾む一叢の竹、翠を垂れて寒に驚かず、葉は宜城の酒を醒し、皮は薛縣の冠を裁す、湘川別淚を染め、衡嶺仙壇を拂ふ、麗粧の色を見むと欲せば、當に兔苑に來つて看るべしと、沈法に於て亦皆諧合す、惟だ起句及び五句二字を拗す、而して唐律の忌む所に非ずと、又、拾遺に、少陵の崔氏東山草堂の詩の、愛す汝が玉山草堂靜なるを論じて云ふ、趙譜に云ふ、第三字必ず平と、而して此れ偏に仄、五言中、故人佳句を得たりの句と、參看すべしと、按ずるに、張籍の江上の館に宿するに、月明にして潮の上るを見、江靜にして鷗の飛ぶを覺ゆ、唐彥謙の鴻鵠の詩に、華屋絃を然して歌舞を舞し、綺密筆を食むで、毛衣淡しと、是れなり、此の句法、問之れを用ふるも、亦甚だ妨げ

絃・舞・綺・窓・含・筆・淡・毛・衣・是・也・此・句・法・間・
用・之・亦・不・甚・妨・也・

少陵江雨懷鄭典設詩谷口子眞正憶爾岸
高壤滑限西東聲調譜拾遺云第四字平變
而仍律白居易詩出郭已行十五里惟銷一
曲慢霓裳句與此同約按樂天此詩十字用
作平聲亦未可知太抵此體少於七言而多
於五言少陵病馬物微意不淺感動一沈吟
觀兵北庭送壯士魏虎數尤多空囊世人共
齒葬吾道屬艱難裴說道林寺寺分一派水
僧鎖半房山是也

唐詩柳色全經細雨濕花枝欲動春風寒范
成大詩邂逅浮生此日好纏綿俗累何時輕
此類所希有凡詩中用仄三連者不少而用

ざるなり。

少陵の江雨、鄭典設を懷ふ詩に、谷口の子眞正に爾を憶ふ、岸高く壤滑にして西東を限る聲調譜拾遺に云ふ、第四字平なり、變なれども而かも仍ほ律なり、白居易の詩に、郭を出で已に行く十五里、惟だ銷ふ一曲の慢霓裳の句は、此と同じと、約按するに、樂天の此の詩、十の字用ひて平聲と作すも亦未だ知るべからず、大抵、此の體、七言に少く、而して五言に多し、少陵の病馬に、物微なれども意淺からず、感動して一に沈吟す、兵を觀るに、北庭に壯士を送る、魏虎數尤も多し、空囊に、世人共に齒葬、吾が道艱難に屬す、裴説の道林寺に、寺は分つ一派の水、僧は鎖す半房の山と、是れなり。

唐詩に、柳色全く細雨を経て濕ひ、花枝動かむと欲して春風寒し、范成大の詩に、邂逅する浮生此の日好し、纏綿する俗累何の時か輕からむ此の類希に有る所、凡そ詩中に、仄三連を用ふる者少からず、而して平三連を用ふ

平三連者、自非吳體、則絕寡。

夾聲以夾平字者爲常、夾仄字者如孟浩然詩、八月湖水平、少陵詩、巫山秋夜螢火飛之類、於散句間有之、高青邱詩、林下自成麋鹿友、世間相去風馬牛、於律詩對句中用之、甚奇、然難效響。

律韻

十駕齋養新錄六云、五七言近體第一句借、用旁韻、謂之借韻、唐詩、犬吠水聲中、桃花帶雨濃、錦幃初卷衛夫人、繡被猶堆越鄂君、始啓其端、王皮陸松陵集、則舉之不勝舉矣、宋人借韻尤多、近代名家、以此爲戒、此後生之勝于前賢者、約按、後生韻學不明、故不能用、旁韻也、錢氏願謂此後生之勝于前賢者、不

る者は、吳體に非ざるよりは絶えて寡し。

夾聲、平字を夾む者を以て常と爲す、仄字を夾む者は、孟浩然の詩の「八月湖水平」かなり、少陵の詩の「巫山の秋夜螢火飛ぶ」の類の如き、散句に於て間之れ有り、高青邱の詩に「林下自ら成す麋鹿の友、世間相去る風馬牛」律詩對句中に於て、之れを用ふるは甚だ奇なり、然れども、響に効ひ難し。

律韻

十駕齋養新錄十に云ふ、五七言近體の第一句、旁韻を借用す、之れを借韻と謂ふ、唐詩に「犬は吠ゆ水聲の中、桃花雨を帯びて濃なり」、錦幃初めて卷く、衛夫人、繡被猶堆し、越鄂君」と、始めて其の端を啓く、王皮陸の松陵集には、則ち之れを擧げて擧ぐるに勝へず、宋人借韻尤も多し、近代の名家、此を以て戒と爲す、此れ後生の前賢に勝る者なりと、約案するに、後生韻學明かならず、故に旁韻を用ふること能はざるなり、錢氏願て謂ふ、此れ後生の前賢に勝れる者なりと、亦戻らずや、詩藝外編卷三に云ふ、

亦辰訣、詩數外編卷三云、唐以詩賦聲律取士、于韻學宜無弗精、然今流傳之作、出韻者亦間有之、蓋檢點少疎、雖老杜或未能免、今稍識數條、以自警省、非曰指摘前人也、一東、楊巨源聖壽無疆詞、王遜上武元衡七言律、王建宮詞、俱出宗字、劉得仁秋日、杜甫雨晴五言律、俱出農字、二冬、薛逢五峰隱者七言律、出中、三江、李商隱柳枝五言絕、鸞字、四支、杜甫北風、首尾俱四支韻、而中兩用五微、蓋古體通用、非出韻也、今諸選多作五言律、誤矣、又七言近體、劉長卿臥病官舍第二句用遠字、當作遺字、或謂出韻、亦非也、十一真、杜甫玉山七言律、出芹字、贈王侍郎排律、出勸字、十二文、張祐讀曲歌五言絕、出入字、又十灰、

唐詩賦聲律を以て士を取る、韻學に于て、宜しく精ならざる無かるべし、然れども、今流傳の作、出韻の者、亦間之れ有り、蓋し檢點少しく疎なれば、老杜と雖ども、或は未だ免るゝこと能はず、今稍數條を識して、以て自ら警省す、前人を指摘すと曰ふに非ざるなり、一東に、楊巨源の聖壽無疆の詞、王遜の武元衡に上る七言律、王建の宮詞、俱に宗の字を出す、劉得仁の秋日、杜甫の雨晴五言律、俱に農の字を出す、二冬に、薛逢の五峰隱者の五言律、中の字を出す、三江に、李商隱の柳枝五言絶に、鸞の字を出す、四支に、杜甫の北風に、首尾俱に四支の韻にして、而して中に兩び五微を用ふ、蓋し古體通用、出韻に非ざるなり、今諸選多く五言律と作すは、誤れり、又、七言近體に、劉長卿の官舍に臥病する第二句に遠の字を用ふ、當に遺の字に作るべし、或は出韻と謂ふ、亦非なり、十一真に、杜甫の玉山の七言律に、芹の字を出す、王侍郎に贈る排律に、勸の字を出す、十二文に、張祐の讀曲の歌の五言絶に、人の字を出す、又、十灰に、賀知章の絶句に、衰の字を出す、十五

賀知章絕句出「衰」字、十五刪、李商隱贈張書記排律出「蘭」字、八庚、李白秋浦歌五絕出「屏」字、九青、僧虛中寄司空圖五言律出「清」字、凡唐人詩引韻旁出、如洛陽城裡見秋風、鶯離塞谷、正逢春之類、必東冬真文次序鱗比則可、無遠借者、然盛唐絕少、初學當戒、毋得因循、又唐彥謙七夕真韻出「勤」字、見英華、約案韻有「次」而「不通者」有「不次」而「通者」豈無遠借者哉、且夫平韻僅三十部、吾輩猶瞭然識之、而胡氏謂「點檢少疎」、雖「老杜」或「未得免」、實是兒輩之見、尤可笑也、隨園詩話^(十)云、余祝彭尙書壽詩、七虞內誤用餘字、意欲改之、後看唐人律詩、通韻極多、因而中止、劉長卿登思禪寺五律東韻也、而用「松」字、杜少陵崔氏東

刪、李商隱の張書記に贈る排律に「蘭」字を出す、八庚に、李白の秋浦の歌の五絶に、屏の字を出す、九青に、僧の虚中の司空圖に寄する五言律に、清の字を出す、凡そ唐人の詩の引韻旁出、洛陽城裡秋風を見る、鶯は塞谷を離れて正に春に逢ふの類の如き、必ず東冬真文、次序鱗比すれば則ち可なり、遠借の者無し、然れども、盛唐絶えて少し、初學當に戒むべし、因循するを得る母れ、又唐彥謙の七夕に、眞の韻にして勤の字を出す、英華に見えたり、約案するに、韻は次で、而して通ぜざる者あり、次でずして而して通ずる者あり、豈に遠借の者無からむや、且つ夫れ平韻僅に三十部、吾輩すら猶瞭然之れを識る、而るに胡氏謂ふ、點檢少しく疎なれば、老杜と雖ども、或は未だ免るを得ずと、實に是れ兒輩の見、尤も笑ふ可きなり、隨園詩話に^(十)云ふ、余、彭尙書の壽を祝するに、七虞の内、誤りて餘の字を用ふ、意之れを改めむと欲す、後に唐人の律詩を見るに、通韻極めて多し、内りて中止せり、劉長卿の思禪寺に登る五律は、東の韻なり、而して松

山草堂七律真韻也、而用芹字、蘇通出塞五律微韻也、而用磨字、明皇餞王峻巡邊長律魚韻也、而用符字、李義山屬對最工、而押韻頗竟、如東冬蕭肴之類、律詩中竟時通用、唐人不以爲嫌也、約案、此說頗得之、然亦非有定見也、毛奇齡古今通韻卷四云、宋韻真與諱臻同用、文與殷同用、其又稱與欣同用者、以殷爲宋廟諱、故禮韻改殷爲欣、其實一也、但按唐詩則殷部中韻、往往用入真部中、而文部不及、嘗考唐五七律、如杜甫贈王侍御詩、稍稍息勞筋、李白對雪奉餞任城六父、惜別空殷勸、韋應物送劉評事、一醉且歡欣、顏真卿送耿湊拾遺聯句、臨水最殷勸、薛能寄吉給諫、謬著千篇斲斧斤、齊彥謙七夕世間烏

有字を用ふ、杜少陵の崔氏が東山草堂の七律は眞の韻なり、而して芹の字を用ふ、蘇通の出塞五律は微韻なり、而して磨の字を用ふ、明皇の王峻が邊を巡るを餞する長律は魚の韻なり、而して符の字を用ふ、李義山、屬對最も工なり、而して押韻頗る竟、東冬蕭肴の類のき如、律詩中、竟時に通用す、唐人以て嫌と爲さざるなりと、約案するに、此の説頗る之れを得たり、然れども、亦定見有るに非ざるなり、毛奇齡の古今通韻卷四に云ふ、宋韻は眞と諱臻と同用、文と殷と同用、其の又欣と同用と稱する者は、殷は宋の廟諱たるを以ての故に、禮韻に殷を改めて欣と爲す、其の實は一なり、但だ按ずるに、唐詩は則ち殷の部中の韻にして、往々用ひて眞の部中に入る、而して文の部は及ばず、嘗て唐の五七律を考ふるに、杜甫の王侍御に贈る詩に、稍稍息勞筋を息す李白の雪に對して任城の六父を奉餞するに、別を惜むで空しく殷勸、韋應物の劉評事を送るに、一醉且つ歡欣、顏真卿の耿湊拾遺を送る聯句に、水に臨んで最も殷勸、薛能の吉給諫に寄するに、謬

鵠漫殷殷陸龜蒙奉和寄懷南陽潤卿推種、南塘一畝芹、以至劉長卿從軍、戴叔倫江干、杜牧寄崔鈞、王建贈崔渾二曹長、張籍寄李湖州、白居易郡齋旬假命宴、李山甫秋、馬異醉中贈李于諸詩、凡真殷相通、隨舉而有、而文之通殷者、百中一見、則宋韻誤併、又何待言、特其誤又不始自平水、即舊禮韻已然、且其併用之例、必就近相併、子母分合、皆順次第、今殷列文後、則真殷之通、必隔文一部、而後可與真部協、想唐韻次第、亦必不如此者、然則宋韻之荒唐、即可見、而猶曰廣韻即唐韻、何也、又真部銀紐與殷部根紐、其字皆十九相同、此亦併用之可驗者、若廣韻注文、獨用殷亦獨用、則既非唐韻、然與禮韻又不合、

つて千篇を著して斧斤に斲らる、齊彥謙の七夕に、世間の烏鵲漫に殷殷陸龜蒙の奉和して南陽の潤卿を寄懷するに、惟だ南塘一畝の芹を種うる、如き、以て劉長卿の從軍、戴叔倫の江干、杜牧の崔鈞に寄す、王建の崔渾二曹長に贈る、張籍の李湖州に寄す、白居易の郡齋旬假命宴、李山甫の秋、馬異の醉中李于に贈る諸詩に至るまで、凡そ真殷相通する、擧ぐるに隨ひて而して有り、而して文の殷に通ずる者、百中にして一見なれば、則ち宋韻の誤りて併せしこと、又何ぞ言ふを待たむ、特に其の誤、又平水より始らず、即ち舊禮韻已に然り、且つ其の併用の例、必ず近きに就きて相併す、子母分合し、皆次第に順ふ、今殷は文の後に列すれば、即ち真殷の通ずる、必ず文一部を隔て、而して後真の部と協ふべし、想ふに、唐韻の次第も、亦必ず是の如き者ならず、然らば則ち宋韻の荒唐、此に即きて見るべし、而して猶ほ廣韻は即ち唐韻と曰ふは、何ぞや、又、真の部の銀紐と、殷の部の根紐と、其の字皆十の九は相同じ、此れ亦併用の驗すべき者なり、廣韻の

尤不可解、又例云、十四鹽韻、禮部注云、與添殿同用、而吳門顧氏、據廣韻次第、謂鹽祇與添同用、而嚴在咸銜之後、與凡同用、當併入十五咸後、不宜提上、與鹽通併、其說甚辨、不知廣韻次第、本自矛盾、平聲、鹽與添通、嚴與凡通、而上聲去聲、則又照禮部韻目、琰與添儼同用、鹽與添儼同用、是首鼠兩端、全無依憑者、且據如廣韻通併、亦當分作三韻、鹽添是一韻、咸銜是一韻、嚴凡又是一韻、今仍併嚴凡于咸、而不自立部、是既非劉韻、又非廣韻、雖欲妄稱爲唐韻、切韻、而仍不得也、況考唐詩、則鹽正與嚴同用、咸不與嚴同用、約案通韻卷六、舉唐詩證之、今略之、今世所通行諸韻書、嚴儼杕快等字、鹽咸兩韻收之、非也、

文獨用、嚴も亦た獨用と注するが若きは、則ち既に唐韻に非ず、然して禮韻と又合はず、尤も解すべからず、又論例云ふ、十四鹽の韻、禮部の注に云ふ、添嚴と同用、而して吳門の顧氏、廣韻の次第に據りて謂ふ、鹽は祇に添と同用、而して儼は咸銜の後に在りて、凡と同用、當に併せて十五咸の後に入るべし、宜しく提げて上、鹽と通併すべからずと、其說甚だ辨なり、知らず廣韻の次第、本と自ら矛盾す、平聲は、鹽と添と通じ、嚴と凡と通じ、而して上聲去聲は、則ち又禮部の韻目に照すに、琰と添儼と同用し、鹽と添儼と同用す、是れ首鼠兩端、全く依憑無き者、且つ廣韻の通併の如きに據らば、亦當に分ちて三韻と作すべし、鹽添はれ一韻、咸銜はれ一韻、嚴凡は是れ一韻、今仍嚴凡を咸に併せ、而して自ら部を立てず、是れ既に劉韻に非ず、又唐韻に非ず、妄に稱して唐韻、切韻と爲さむと欲すと雖ども、而かも仍得ざるなり、況や唐詩を考ふれば、則ち鹽は正に嚴と同用、咸は嚴と同用せず、約案するに、通韻卷六に、唐詩を擧げて之れを證す、今之を畧す、今世

又^三卷云、按、唐律浮無二字、虞尤互收、唐禮部試賦得沈珠于淵、獨孤良器試卷、押珠字韻者、皎潔澄泉水、熒煌照乘珠、中有浮字、風折璿成浪、空涵影似浮、深看星竝入、靜向月同無、白居易重修香山寺排律、尤韻中有無字、關塞龍門口、祇園鷲嶺頭、曾隨劫灰久、今得勝緣無、可驗、又^五卷云、宋韻麻部、俱無佳字、唐詩有之、按、公乘億賦得秋菊有佳色、陶令籬邊菊、秋來色自佳、翠擢千片葉、金剪一枝花、是六韻律、係唐時所稱官韻者、若劉禹錫送蕪州李郎中、楚關蕪水路非賒、東望雲山日夕佳、是七律、分明皆律韻中字、又^六卷云、八庚之清與九青、原可相通、故清部中偏傍、多從青從令、而令屏聲聲諸字、則清青二部均有

通行する所の諸韻書、題嚴叢林伏等の字は、鹽咸の兩韻に之を收む、非なり、又(卷三)云ふ、按するに、唐律に、浮無の二字、虞尤互に收む、唐の禮部試に、珠を淵に沈むを賦し得たるに、獨孤良器が試卷に、珠の字の韻を押す者に、皎潔たり澄泉水、熒煌たり照乘の珠、中に浮の字あり、風に折れて璿浪を成し、空に涵して影浮ぶに似たり、深く看る星と竝びに入るを、靜に月に向つて同じく無し、白居易の香山寺を重修する排律に、尤の韻の中に無の字あり、關塞龍門の口、祇園鷲嶺の頭、曾て劫灰に陪ふこと久し、今勝緣を得るや無きやと、驗すべし、又(卷五)云ふ、宋韻麻の部に、俱に佳の字無し、唐詩に之れ有り、按するに、公乘億の秋菊佳色有りを賦し得たるに、陶令籬邊の菊、秋來色自ら佳なり、翠は擢る千片の葉、金は剪す一枝の花と、是れ六韻の律、唐時の官韻と稱する所の者に係る、劉禹錫の蕪州の李郎中を送るに、楚關蕪水路賒なるに非ず、東望すれば雲山日夕佳なりとの若き、是れ七律、分明に皆律韻中の字、又(卷六)云ふ、八庚の清と九青と、原と

之、今但知以清併庚、而收聲字於庚部、殊不知青部亦有聲字、卽唐詩亦時有用及者、如李白短律、胡人吹玉笛、一半是秦聲、五月南風起、梅花落、敬亭、杜甫客舊館五律、重來梨葉赤、依舊竹林青、風幔何時卷、塞砧昨夜聲、李建勳留題愛敬寺、空爲百官首、但愛千峰青、斜陽惜歸去、萬壑鳥啼聲、喻烏酬王擅見寄五律、夜月照巫峽、秋風吹洞庭、竟晚蒼山詠、喬枝有鶴聲、裴硯題石室七律、文翁石室有儀刑、庠序千秋播、德聲古柏尙留今日翠、高山猶靄舊時青、可驗今禮部韻廣韻集韻、竝無此字、約案、以上毛氏所論、皆是唐韻之舊、非兼用傍韻也、此餘盧弼和李秀才邊庭四時怨七絕、落句塞韻中、有山字、一時齊保

相通不可、故以清の部中の偏旁多く青に從ひ令に從ふ、而して令併聲の諸字は、則ち清青二部均しく之れ有り、今但だ清を以て庚に併すことを知りて、而して聲の字を庚の部に收む、殊に知らず青の部亦聲の字有るを、卽ち唐詩も亦時に用ひ及ぶ者あり、李白の短律に、胡人玉笛を吹く、一半は是れ秦聲、五月南風起る、梅花敬亭に落つ、杜甫の舊館に客たる五律に、重來梨葉赤く、舊に依つて竹林青し、風幔何れの時か卷かむ、塞砧昨夜の聲、李建勳の愛敬寺に留題するに、空しく百官の首と爲る、但だ愛す千峰の青きを、斜陽歸去を惜む、萬壑鳥の啼く聲、喻烏の王擅が寄せらるゝに酬ゆる五律に、夜月巫峽を照し、秋風洞庭を吹く、竟に晚る蒼山の詠、喬枝鶴聲有り、裴硯の石室に題する七律に、文翁が石室儀刑有り、庠序千秋德聲を播す、古柏尙留る今日の翠、高山猶靄たり舊時の青の如き、驗すべし、今、禮部韻廣韻集韻に、竝に此字無し、約案するに、以上は毛氏の論する所、皆是れ唐韻の舊傍韻を兼用するに非ざるなり、此餘盧弼が李秀

賀蘭山、李義山、楚宮七律、落句蕭韻中有蛟字、綵絲誰復懼長蛟、茂陵七律第二句、亦蕭韻中有郊字、首蒼榴花逼近郊、劉兼春燕七律、第六句鹽韻中有銜字、江畔春泥帶雨銜、白樂天三月三日七律第四句、亦鹽韻中有衫字、柘枝一曲試春衫、蕭嵩奉和聖製、贈張說集賢學士五律、蒸韻中有明字、叨此預文明、此等蓋唐韻有其字也、今人效之、何不可之有。

章孝標作駱谷行七律、青韻中有尋字、擱雲鼻、棧入青冥、驥馬鈴驟傍日星、仰踏劍稜梯萬仞、下緣水岫拔千尋、劉長卿罷攝官後將還舊居、留辭李侍御五律、微韻中有疎字、樗散材因棄、親交跡已疎、獨愁看五柳、無事掩

才が邊庭四時態を和する七絶の落句寒韻の中に、山の字あり、一時齊しく保つ賀蘭山、李義山の楚宮七律の、落句蕭の韻中に、蛟の字あり、綵絲誰か復長蛟を懼れん、茂陵七律第二句にも、亦蕭韻中に郊の字あり、首蒼榴花近郊に逼し、劉兼の春燕七律の、第六句鹽の韻中に銜の字あり、江畔の春泥雨を帯びて銜む、白樂天の三月三日の七律第四句も、亦鹽の韻中にの衫字あり、柘枝一曲春衫を試む、蕭嵩の聖製を奉和し、張說集賢學士に贈る五律の、蒸の韻中に、明の字あり、叨に此に文明に預る、此れ等蓋し唐韻に其字あるなり、今人之れに效ふ、何の不可か之れ有らむ。

章孝標の駱谷の行を作す七律の、青の韻中に、尋の字あり、雲を擱し棧に鼻して青冥に入る、馬に轡し驟に鈴して日星に傍ふ、仰いで踏む劍稜梯萬仞、下つて緣る水岫拔づること千尋、劉長卿の攝官を罷めて後將に舊居に還らむとす、李侍御に留辭する五律の、微の韻中に、疎の字あり、樗散材棄つるに因つて親交跡已に疎なり、獨愁五柳を看る、無事雙扉を掩ふ、姚合の盧拱秘書が魏に遊ぶ

雙屣、桃合送、廬拱秘書遊、魏五律、眞韻中有、
 明字、官閑身自在、詩險語分明、車馬應回曉、
 煙花滿去塵、接、天野信景鹽尻所載、明人陳
 元贊、寬文二年壬寅冬、謁拜敬公尾張、寢陵、
 詩、寄跡東溟、數十春、感公升斗活窮鱗、幾年
 闕闕瞻無自、今日玄宮拜有因、驥困鹽車憐、
 伯樂、龍埋神劔、辨豐城、白顏一滴酬知淚、銘
 德千秋永不磷、自注云、城音申、古韻通用、唐
 李適詩、化工粧點洛陽春、柳絮飛花散滿城、
 可見唐人有其例者、後人效之而不妨矣、又
 接、東坡題南康寺重湖軒、八月渡重湖、蕭條
 萬象疎秋風、片颿急暮靄、一山孤許、國心猶
 在、康時術已虛、岷峨千萬里、投老得歸無、此
 魚虞二韻相間而押、謂之進退韻、別是一格。

を送る五律の眞の韻中に、明の字あり、官閑にして身自
 在、詩險にして語分明、車馬應に回ること晚かるべし、煙
 花去塵に滿つ、接するに、天野信景の鹽尻に載する所、明
 人陳元贊の寬文二年壬寅冬、敬公尾張公の寢陵に謁拜
 する詩に、跡東溟に寄す數十春、感公の升斗窮鱗を活
 するを、幾年か闕闕瞻るに自無し、今日玄宮拜するに因
 有り、驥は鹽車に困むで伯樂を憐み、龍は神劔を埋めて
 豊城を辨せず、白顏一滴に酬ゆるの涙、徳を銘して千秋
 永く磷せず、自注に云ふ、城音申、古韻通用すと、唐の李適
 の詩に、化工粧點す洛陽の春、柳絮飛花滿城に散す見る
 べし、唐人に其例ある者は、後人之れに效ひて妨げざるを
 又、接するに、東坡の南康寺の重湖軒に題するに、八月重
 湖を渡る、蕭條萬象疎なり、秋風片颿急たり、暮靄一山孤
 なり、國に許す心猶在り、時を康する術已に虚し、岷峨千
 萬里、老を投じて歸るを得るや無や、此れ魚虞の二韻相
 間りて押せり、之れを進退韻と謂ふ、別には一格。

通音^三云、衰有等殺之義、讀所皆切、是正音
 其又收支部、則以支灰相通、故也、凡五方之
 音、無他區別、但遠近一同者、便是元音、今人
 讀衰皆同、而宋韻偏以衰入支、竟刪去灰
 部、此不通之極、而過遵宋韻者、反謂衰無、
 音、是偶、見畫宮、而反以爲是人無家、又烏可
 也、約案、唐詩如、白樂天櫻桃花下、歎白髮、五
 律、逐處花皆好、隨年貌自衰、紅櫻滿眼日、白
 髮半頭時、鄭谷十日菊絕句、節去蜂愁蝶不
 知、曉庭還繞折殘枝、自緣今日人心別、未必
 秋香一夜衰、皆以衰字入支韻、其入灰韻者、
 賀知章還鄉偶書、下見一詩而已、而此是嫌韻
 不足爲證、今人以盛衰之衰爲、下見者、蓋是訛
 音、毛氏以此爲正音、誤矣。

通音卷三に云ふ、衰は等殺の義あり、讀みて所皆の切、是
 れ正音、其の又支の部に收むるは、則ち支灰相通するを
 以ての故なり、凡そ五方の音、他の區別無し、但だ遠近一
 同の者は、便ち是れ元音、今人衰を讀みて皆、同じ、而
 して宋韻偏に衰を以て支に入れ、竟に灰の部を刪り去
 る、此れ不通の極にして、而して過ちて宋韻に遵ふ者、反
 つて謂ふ衰に、下見の音無しと、是れ、下見を畫くるを見て
 而して反つて以爲へらく、是の人家無しと、又烏ぞ可な
 らむや、約案するに、唐詩に、白樂天の櫻桃花下、白髮を歎
 する五律に、下見を逐うて花皆好し、年に隨つて貌自ら衰
 ふ、紅櫻眼に滿つるの日、白髮頭に半なるの時、鄭谷の十
 日の菊の絶句に、下見節去りて蜂は愁ひ蝶は知らず、曉庭
 還繞る折殘の枝、下見自今日人心の別なるに緣る、未だ必ず
 しも秋香は一夜に衰へずの如き、皆衰の字を以て支の
 韻に入る、其の灰の韻に入る者は、賀知章の郷に還りて
 偶書するに、下見一詩のみ、而して此は是れ嫌韻證
 と爲すに足らず、今人盛衰の衰を以て、下見と爲すは、蓋し
 是れ訛音、毛氏此れを以て正音と爲すは、誤れり、

清陳蔚草堂雜詠、處士應門惟使鶴、高人去
 榻更無賓、小橋時有雲遮斷、不使遊人過水
 西、西字入真韻、約按古韻西字或入真先等
 韻、而唐人近體詩未嘗見兼用之者、此用韻
 不辨古今者耳。

通韻論云、律有嫌韻、謂通韻之疑似者、律詩
 首一句、以唐律四韻、首句原不在韻例之內、
 既非奸犯、亦非兼用、祇以韻音疑似故及之、
 謂之嫌韻、約案、凡詩首句不在韻例之內、故
 用韻作詩、第一句韻、取捨隨意、東坡姪安節
 遠來夜坐詩、南來不覺歲峰嶮、坐撥寒灰聽
 雨聲、遮眼文書元不讀、伴人燈火亦多情、嗟
 予潦倒無歸日、今汝蹉跎已半生、免使韓公
 悲世事、白頭還對短燈檠、用其韻詩、落第汝

清の陳蔚の草堂雜詠に、處士門に應ず惟だ鶴を使ひ、高
 人榻を去つて更に賓無し、小橋時に雲の遮斷する有り、
 遊人をして水西を過ぎ使めず、西の字眞の韻に入る、約
 案するに、古韻、西の字、或は眞先等の韻に入る、而して唐
 人の近體詩に、未だ嘗て之れを兼用する者を見ず、此れ
 用韻、古今を辨せざる者のみ。

通韻論例に云ふ、律に嫌韻有り、通韻の疑似の者を、律詩の首の一句、唐律四韻を以て、首句原と韻例の内に在らず、既に奸犯に非ず、亦兼用にも非ず、祇に韻音疑似を以ての故に之れに及ぶ、之れを嫌韻と謂ふ、約案するに、凡そ詩の首句は、韻例の内に在らず、故に用韻詩を作るに、第一句の韻、取捨意に隨ふ、東坡の姪安節、遠來夜坐の詩に、南來覺えず歳の峰嶮坐して寒灰を撥して雨聲を聽く、眼を遮る文書元と讀まず、人に伴ふ燈火亦多情、嗟予が潦倒歸日無きを、今汝蹉跎已に半生、韓公をして世事を悲しましむるを免る、白頭還對す短燈檠、其の韻を用ふる詩に、落第汝は中酒の味を爲す、詩を吟じて我は飢を忍ぶの聲を作す、便ち絶粒を思へども眞に策無し、苦に歸田を説くは情あらざるに似たり、腰下牛閑に

爲中酒味吟詩我作忍飢聲、便思絕粒真無策、苦說歸田似不情、腰下牛閑方解佩、洲中奴長足爲生、大弔一弛何緣設、已覺翻翻不受繫、同人獄中遺子由、赦後復用其韻、亦第一句不用前詩韻、王勃滕王閣詩以渚舞雨、悠秋流六字爲韻、序云一言均賦、四韻俱成、渚悠二字不以爲數、故曰四韻、其餘諸家集中題曰幾韻者皆然、但今人用嫌韻、當取北宋以上人所用之字以據之、而如東冬二韻、支微齊三韻、魚虞二韻、佳灰二韻、真文二韻、元寒刪先四韻、蕭肴豪三韻、庚青蒸三韻、互相借用、其例甚多、不可勝舉、白樂天代夢得吟、人間閑在不如吾、局勢雖殊未必遲、支韻借用吾字、王建贈王處士、松樹當軒雪滿池、

して方めて佩を解き、洲中奴長じて生を爲すに足る、大弔一弛何に縁つて設せむ、已に覺ゆ翻々繫を受けざる、を同人獄中より子由に遺る、赦後復其の韻を用ふるも、亦第一句前詩の韻を用ひず、王勃の滕王閣の詩に渚舞雨悠秋流の六字を以て韻と爲し、序に云ふ、一言均しく賦して、四韻俱に成ると、渚悠の二字、以て數と爲さず、故に四韻と曰ふ、其の餘、諸家の集中に題して幾韻と曰ふ者皆然り、但だ今人は嫌韻を用ふる、當に北宋以上の人を用ふる所の字を取り以て之れに據るべし、而して東冬の二韻、支微齊の三韻、魚虞の二韻、佳灰の二韻、真文の二韻、元寒刪先の四韻、蕭肴豪の三韻、庚青蒸の三韻の如き、互に相借用し、其例甚だ多く、勝て舉ぐべからず、白樂天の夢得に代る吟に、人間閑在吾に如かず、局勢殊なりと雖ども未だ必ずしも遅からず、支韻に吾の字を借用す、王建の王處士に贈るに、松樹軒に當り雪池に滿つ、青山掩草す碧紗、麴處韻に池の字を借用す、嘯堯の夜雨空塔に滴るに、髪々復凄々、松に飄り又槐に灑ぐ、佳の韻に、發の字を借用す、賀知章の鄉に還る偶書に、鄉音改ること無く、鬚毛衰ふ、笑つて問ふ客は何れの處従り來ると、灰の韻に衰の字を借用す、元稹の僧如展及び韋韋と碧觀寺

青山掩障碧紗幮、虞韻借用池字、喻鳧夜雨
 滴空階、雲雲復淒淒、飄松又灑槐、佳韻借用
 淒字、賀知章還鄉偶書、鄉音無改鬢毛衰、笑
 問客從何處來、灰韻借用衰字、元稹僧如展
 及章載同遊碧澗寺、黃字新詩和未成、不聞
 兼記舊交親、真韻借用成字、許渾哭揚樊處
 士、溪上花開舊宅春、至今鐘磬滿南陵、蒸韻
 借用春字、余見狹隘、僅舉此等、博廣君子請
 更補之。

陽庚二韻中字、古韻互相出入、而近體詩未
 嘗見借用之者、歌麻二韻亦然、杜牧懷鍾陵
 舊游、控壓平江十萬家、秋來江靜鏡新磨、獨
 見此一詩、又楊萬里除醺、以酒爲名卻誇他
 冰爲肌骨月爲家、東人詩話所載、鄭司諫西

に同遊するに、黃字の新詩和未だ成らず、聞かず兼て舊
 交親を記すことを、真韻に成の字を借用す、許渾の楊樊
 處士を哭するに、溪上花開く舊宅の春、今に至りて鐘磬
 南陵に滿つ、蒸の韻に春の字を借用す、余が見狹隘、僅に
 此れ等を擧ぐ、博廣の君子請ふ更に之れを補へ。

陽庚二韻中の字、古韻互に相出入す、而して近體の詩未
 だ嘗て之れを借用する者を見ず、歌麻の二韻も亦然り、
 杜牧の鍾陵の舊游を懷ふに、控壓す平江の十萬家、秋來
 江靜にして鏡新に磨す、獨り此の一詩を見る、又、楊萬里
 の除醺に、酒を以て名と爲す、卻つて他を誇る水を肌骨
 と爲し、月を家と爲す、東人詩話に載する所の、鄭司諫の
 西都に、紫陌の春風細雨過ぐ、輕塵動かす柳絲斜なり、清

都、繁陌春風細、雨過輕塵不動、柳絲斜、清張
 璨戲題、書畫琴棋詩酒花、當年件件不離他、
 而南宋以下詩不足爲證。

邵子湘韻略以江陽爲必不可通、而唐詩有
 之、皮日休南陽廣文飲于襄陽卜居地肺從
 來是福鄉、廣文高致更無雙、李賀嘲謝秀才
 妾縞練、刀環倚桂牕、端坐據胡牀、杜牧寄唐
 州李玘尙書、累代功勳昭世光、奚胡文道死
 心降、是也、韻略本是淺近之書、不足爲據、而
 近世咸信之者何也。

兩音

凡文字雖字書無兩音、古人有其例、則可用、
 雖字書有兩音、古人無其例、則不可用、隨園
 詩話一云、陸放翁燒灰除菜螿、蝗字作仄聲、

の張璨の戲題に「書畫琴棋詩酒花、當年件々他を離れず
 而して南宋以下の詩證と爲すに足らず。

四二

邵子湘の韻略に、江陽を以て必ず通すべからずと爲す
 而して唐詩に之れ有り、皮日休の南陽廣文と襄陽の卜居
 に飲むに、地肺從來是れ福郷、廣文の高致更に無雙、李賀
 の謝秀才の妾縞練を嘲るに、刀環桂牕に倚り、端坐して
 胡牀に據る、杜牧の唐州の李玘尙書に寄するに、累代の
 功勳世光昭かなり、奚胡ぞ文道死して降るや」と是なり、
 韻畧本と是れ淺近の書據と爲すに足らず、而して近世咸
 く之れを信するは何ぞや。

兩音

凡そ文字、字書に兩音無しと雖ども、古人に其の例あれ
 ば、則ち用ふべし、字書に兩音有りと雖ども、古人に其の
 例無ければ、則ち用ふべからず、隨園詩話卷一に云ふ、陸
 放翁の「灰を燒いて菜螿を除く」蝗の字仄聲と作す、徐騎

徐騎省莫折紅芳樹、但知盡意看、但字作平聲、李山甫赴舉別所知詩、黃祖不憐鸚鵡客、志公偏賞麒麟兒、麒字作仄聲、王建贈李僕射詩、每日城南空挑戰、挑字作仄聲、贈田侍中、綠窓紅燈酒、燈字作仄聲、皆本自香山之以司爲四、琵琶爲別、凝脂爲佞、紅欄三百九十橋、十字讀謔也、韓愈岳陽樓詩、宇宙隘而妨、妨作訪音、東都詩、新鞏只嘲評、評作病音、元稹東南行百韻詩、徵俸封魚租、封音俸、臥詩、一生長苦節、三省詎行怪、怪音乖、嶺南詩、聯遊虧片玉、洞照失明鑿、鑿音間、夜池詩、高屋無人風張幙、張音丈、苦思正且酬、白雪、閑觀風色動、青旂、正且讀作真丹、又曰、居易和令狐相公詩、仁風扇道路、陰雨霽、閭闔扇平聲、齊

省の折ること莫れ紅芳の樹、但だ知る盡意に看るを、但の字平聲と作す、李山甫の舉に赴くとき、知る所に別るゝ詩に、黃祖憐まず鸚鵡の客、志公偏に賞す麒麟兒、麒の字仄聲と作す、王建の李僕射に贈る詩に、每日城南空しく、戰を挑む、挑の字仄聲と作す、田侍中に贈るに、綠窓紅燈の酒、燈の字仄聲と作す、皆本と香山の司を以て四と爲し、琵琶を別と爲し、凝脂を佞と爲し、紅欄三百九十橋の十の字を謔と讀む自りす、韓愈の岳陽樓の詩、宇宙隘にして妨ぐ、妨を訪の音と作す、東都の詩に、新鞏只だ嘲評す、評を病の音と作す、元稹の東南行百韻の詩に、徵俸魚租を封す、封音俸、臥の詩に、一生長く苦節、三省詎ぞ怪を行はむ、怪音乖、嶺南の詩に、聯遊片玉を虧ぎ、洞照明鑿を失す、鑿音間、夜池の詩に、高屋人無く、風幙を張る、張音丈、苦思正且白雪に酬ゆ、閑に觀る風色の青旂を動かすを、正且讀みて真丹と作す、又曰く、居易の令狐相公に和する詩に、仁風道路を扇し、陰雨閭闔を霽す、扇は平聲にして、霽は去聲、李商隱の石城の詩に、簾冰りて

去聲、李商隱石城詩、簾冰將飄枕、簾烘不隱鈎、自注、冰去聲、陸龜蒙包山詩、海客施明珠、湘豨料淨食、自注、料平聲、朱竹垞山塘紀事詩、殷勤短主簿、端笏立、阼階、阼音粗、杜少陵用、中興中酒王氣貞觀等字、忽平忽仄、隨其所便、大抵相如之相、燈檠之檠、親迎之迎、親家之親、寧馨之馨、蒲桃之桃、鄼侯之鄼、馬援之援、別離之離、急難之難、上應之應、判捨之判、量移之量、處分之分、范蠡之蠡、彌衡之彌、伍員之員、皆平仄兩用、約案韓文公以妨爲訪、以評爲病、此係古韻、袁氏混之律韻、誤矣、養新錄四卷云、吳太宰黏、黏匹鄙切、張詠詩、由來邪正是安危、不信忠良信伯翳、讀黏平聲、薄荷之荷、吾鄉讀如夥去聲、陸放翁題畫薄

將に枕に飄へらむとす、簾烘して鈎を隠さず、自注に、料は平聲、朱竹垞の山塘紀事の詩に「殷勤に寸短主簿笏を端して阼階に立つ、阼音粗、杜少陵の中興中酒王氣貞觀等の字を用ひ、忽ち平忽ち仄、其の便なる所に隨ふ、大抵相如の相、燈檠の檠、親迎の迎、親家の親、寧馨の馨、蒲桃の桃、鄼侯の鄼、馬援の援、別離の離、急難の難、上應の應、判捨の判、量移の量、處分の分、范蠡の蠡、彌衡の彌、伍員の員は、皆平仄兩用す、約案するに、韓文公、妨を以て訪と爲し、評を以て病と爲す、此れ古韻に係る、袁氏之れを律韻に混す、養新錄(卷四)に云ふ、吳の太宰黏、黏は匹鄙の切、張詠の詩に、由來邪正是安危、忠良を信ぜず、伯翳を信ず、黏を讀みて平聲とす、薄荷の荷は、吾が郷、讀みて夥の去聲の如し、陸放翁の畫薄荷扇に題する詩に、薄荷花間蝶翅翻り、風枝露葉秋妍を弄す又、黏に贈る詩に、時々薄荷に酔ひ、夜々鼈龜を占む、劉後村の黏を失ふ詩に、籬間の薄荷醉を謀るに堪へたり、何ぞ必ずしも區々細鱗を慕はむ、葦菁の蔓は平聲、陸放翁の詩に「空しく憶ふ廬山風雨の

荷扇詩、薄荷花間蝶翅翻、風枝露葉弄秋妍、
 又贈貓詩、時時醉薄荷、夜夜占氈毯、劉後村
 失貓詩、籬間薄荷堪謀醉、何必區區慕細鱗、
 蔓菁之蔓平聲、陸放翁詩、空憶廬山風雨夜、
 自炊小竈煮蔓菁、又山園高蔓晨灌溉、地鐘
 芋栗夜燔煨、約亦錄數字、占字訓、擅據、去聲、
 羅隱蜂詩、不論平地與山尖、無限春光盡被
 占、占讀平聲、樂散之散與珊同、平聲、散亂之
 散去聲、李端民和元微之春游詩、東閣經年
 別、窮愁客路難、望塵驚岳峙、懷舊各雲散、散
 讀平聲、生長之長上聲、韓偓聞怨、初折鞦韆
 人寂寞、後園青草任他長、長讀平聲、先字韻
 會注云、凡在前者謂之先、則平聲、先而導前
 與、當後而先之、則去聲、陸務觀舟行偶賦、桐

夜自从小竈を炊いで蔓菁を煮る又、山園の高蔓晨に灌
 溉し、地鐘の芋栗夜燔煨すと、約も亦數字を録す、占の字、
 擅據と訓ず、去聲なり、羅隱の蜂の詩に、平地と山尖とを
 論ぜず、限り無き春光盡く占め被る、占讀みて平聲とす、
 樂散の散は、珊と同じ、平聲なり、散亂の散は去聲なり、李
 端民の元微之の春游の詩に和するに、東閣經年の別、窮
 愁客路難し、塵を望むで岳の如く峙つに驚き、舊を懐へ
 ば、各雲散す、散讀みて平聲とす、生長の長は上聲、韓偓の
 聞怨に、初めて鞦韆を折つて人寂寞、後園の青草、任他れ
 長するを、長讀みて平聲とす、先の字韻會の注に云ふ、凡
 そ前に在る者之れを先と謂へば、則ち平聲、先だつて而し
 て前に導くと、當に後るべきに之れに先だつとは、則ち去
 聲なり、陸務觀の舟行偶賦に、桐葉常に桐葉に先つて殘
 す、先讀みて平聲とす、論談の論は多くは平なり、陸務觀
 の東堂睡起に、若し胸中を論ぜば、淡にして無事、論讀み
 て去聲とす、又明の焦周の説栢卷五にも、亦數字を載
 す、今、人の皆知れる者を刪りて之れを摘して云ふ、唐詩

葉常先、檉葉、殘、先讀平聲、論談之論多平、陸務觀東堂睡起、若論胸中淡無事、論讀去聲、又明焦周說栝、卷五亦載數字、今刪、人皆知者、摘之、云、唐詩中蒲讀如鋪、燕姬酌蒲桃、燭淚連錢累蒲桃、請讀如青、紅樓許、住請、請錢不、早朝、空讀如控、十八名人空、可人、匹讀如費、匹如元是九江人、檉讀如磬、燈檉昏魚目、怨讀如冤、銜怨至死時、散讀如山、轉恐意闌散、懷、舊各、雲散、帆讀如汎、夏雲隨風帆、天讀如歪、人道最天斜、旋作去聲、飄然轉旋向雲程、蒼茫鬼峨作上聲、野道何蒼茫、鬼峨連雲睡、膠讀作較、樂天詩、歲盡能推盤尾酒、辛盤先勸膠牙餠、又云、三盃藍尾酒、一椀膠牙餠、東坡詩、崢嶸依絕壁、蒼茫瞰奔流、注、次公曰、

中に蒲讀みて鋪の如し、燕姬蒲桃を酌む、濁淚連錢蒲桃を累す、請讀みて青の如し、紅樓住請を許す、錢を請ふて早朝せず、空讀みて控の如し、十八名人可人空し、匹讀みて磬の如し、匹如す元是れ九江の人、檉讀みて磬の如し、燈檉魚目昏し、怨讀みて冤の如し、怨を銜みて死する時に至る、散讀みて山の如し、轉た恐る意闌散、舊を懷へば各雲散、帆讀みて汎の如し、夏雲風帆に隨ふ、天讀みて歪の如し、人道最天斜、旋を去聲と作す、飄然轉旋して雲程に向ふ、蒼茫鬼峨を上聲と作す、野道何ぞ蒼茫、鬼峨連雲睡る、膠讀みて較と作す、樂天の詩に「歲盡能く推す盤尾の酒、辛盤先づ勸む膠牙の餠、又云ふ、三盃藍尾の酒、一椀膠牙の餠、」

東坡の詩に、「崢嶸絶壁に依り、蒼茫奔流を瞰す」注に、次

蒼茫兩字、古人用之皆是平聲、而先生所用乃是仄聲、蒼字廣韻音粗朗切、茫字上聲之莽去聲之湊不收、不知先生用之所出、以竅博聞、又同人詩、獨穿暗月朦朧裡、愁渡奔河蒼茫間、詩醇云、蒼茫二字、俱讀從上聲、前人所未有、此自賦詩創用、約按、羽獵賦、鴻濛沈茫、注、茫音莽、野客叢書三卷云、白樂天雪詩、寒鎖春蒼茫、又曰、野道何蒼茫、注、竝音上聲、近時蘇子美詩、亦曰、淮天蒼茫背殘臘、江路委蛇逢舊春、此豈創於東坡哉、再按字典已引叢書、而詩醇有此說、何也、又莊子逍遙遊莽蒼蒼七蕩切、梅聖俞游蜀岡大明寺、寒日稍清迴、群山分莽蒼、陸務觀秋望、千里郊原俯莽蒼、三江煙水接微茫、作平聲、陸務觀江村莽

公曰く、蒼茫の兩字、古人之れを用ふる皆是れ平聲、而して先生の用ふる所は乃ち是れ仄聲、蒼の字は廣韻に音粗朗の切、茫の字は上聲の莽、去聲の湊、皆收めず、先生の之れを用ふる出づる所を知らず、以て博聞を竅つ、又、同人の詩に、獨り穿つ暗月朦朧の裡、愁へて渡る奔河蒼茫の間、詩醇に云ふ、蒼茫の二字は、俱に讀みて上聲に從ふ、前人未だ有らざる所、此れ賦の詩より創用すと、約案するに、羽獵の賦に、鴻濛沈茫、注に茫音莽、野客叢書卷三に云ふ、白樂天の雪の詩に、寒銷して春蒼茫、又曰く、野道何ぞ蒼茫、注に、竝に音上聲、近時蘇子美の詩にも亦曰く、「淮天蒼茫殘臘に背き、江路委蛇舊春に逢ふ」と、此れ豈に東坡に創らむや、再び按するに、字典に已に叢書を引く、而して詩醇に此の説あるは何ぞや、又、莊子逍遙遊の莽蒼の蒼は七蕩の切、梅聖俞の蜀岡の大明寺に遊ぶに、寒日稍清迴、群山莽蒼を分つ、陸務觀の秋望に、千里の郊原莽蒼に俯し、三江の煙水微茫に接す、平聲と作す、陸務觀の江村に、莽蒼たる郊原暮色來り、颯々たる林壑秋聲を起す、は、字の如し。

蒼郊原來暮色、颯颯林壑起秋聲、如字。

近世所通行諸韻本、七陽中有慶字、通韻

五卷

云、唐人律詩無慶字、惟仄韻多有、然押敬韻、慶果作平聲、亦宜列入庚部、不宜入陽部、禮記祭統、作率慶士、以卿爲慶、則卿字非庚部中字、平約案、唐人以慶爲平聲者、亦未嘗見之、要陽庚二韻、具不可有此字。

家嚴嘗有醉歌行作、曰、癡醉陶門五柳春、典衣除酒不辭貧、貧士卻誇嘉肴夥、富家詎知錦字新、仰天大笑高樓上、樓上佳景不遑賓、浩歌蒼海波千里、長嘯碧天月一輪、長嘯浩歌纔遣悶、慷慨悲壯淚沾巾、縱橫揮筆龍蛇走、洞徹論文天地震、君不見乾坤造化自無極、駘蕩春光花滿隣、花落花開幾開落、轉蓬

近世通行する所の諸韻本、七陽中に慶の字あり、通韻卷五に云ふ、唐人の律詩に慶の字無し、惟だ仄韻多く有り、然れども、敬の韻に押す慶果して平聲と作さば、亦宜しく列して庚の部に入るべし、宜しく陽の部に入るべからず、禮記の祭統に、慶士を率ゐるに作り、卿を以て慶と爲す、則ち卿の字は庚部中の字に非ずや、約案するに、唐人慶を以て平聲と爲す者、亦未だ嘗て之れを見ず要するに、陽庚二韻、俱に此の字有るべからず。

家嚴嘗て醉歌行の作あり、曰く、癡醉す陶門五柳の春衣を典し酒を除て貧を辭せず、貧士卻つて誇る嘉肴の夥きに、富家詎ぞ知らむ錦字の新なるを、天を仰いで大笑す高樓の上、樓上の佳景賓を邀へず、浩歌す蒼海波千里長嘯す碧天の月一輪、長嘯浩歌纔に悶を遣り、慷慨悲壯涙巾を沾す、縱橫筆を揮へば龍蛇走り、洞徹文を論すれば天地震ふ、君見ずや乾坤の造化自ら極り無きを、駘蕩たる春光花鄰に滿つ、花落ち花開いて幾開落、轉蓬の狂生所親無し、迹を晦し光を韜む巖穴の土、樺冠履履窮巷の人、今來古往夢中の夢、萬古千秋塵上塵、悲歡都て是れ此

狂生無所親、晦迹韜光巖穴土、樺冠屣履窮
 巷人、今來古往夢中夢、萬古千秋塵上塵、悲
 歎都是委此杯、千鍾傾盡覺天真、不論青眼
 與白眼、日對南山酌酒頻、或見之曰、可則可
 矣、惟惜眞韻中無震字、恐不免失韻、不如易
 振字之爲愈也、家嚴笑曰、未矣、東都賦、邱陵
 爲之搖震、吳都賦、飲烽起、醞鼓震、藉田賦、望
 皇軒而肅震、景福殿賦、嘖其如震、左太仲咏
 史、荆軻飲燕市、酒酣氣益震、哀歌和漸離、謂
 若榜無人、皆押入眞韻、余作此詩用古韻、豈
 是失韻、難者口箝色拒、約侍在側、雖知其頌、
 不復敢校焉、後閱古今通韻卷四、更得明徵、云
 宋韻俱無震字、增韻補入引漢書及衛恆字
 勢爲證、此是三聲字、原不必補、及讀唐宗答

の杯に委す、千鍾傾け盡して天真を覺ふ、論ぜず青眼と
 白眼と、日に南山に對して酒を酌むこと頻りなり」と、或
 人之れを見て曰く、可は則ち可なり、惟だ惜む眞の韻中
 に震の字無し、恐くは失韻を免れず、振の字に易ふるの
 愈れりと爲すに如かざるなりと、家嚴笑ひて曰く、未し、
 東都の賦に、邱陵之れが爲に搖震す、吳都の賦に、飲めば
 烽起り、醞すれば鼓震ふ、藉田の賦に、皇軒を望むて而し
 て肅震す、景福殿の賦に、嘖として其れ震ふが如し、左太
 仲の詠史に、荆軻燕市に飲む、酒酣にして氣益震ふ、哀歌
 漸離に和す、傍に人無きが若く謂へり」と、皆眞韻に押入
 す、余此の詩を作るに、古韻を用ふ、豈に是失韻ならむや、
 難する者口箝し色拒む約侍して側に在り、其の頌を知
 ると雖ども、復敢て校せず、後、古今通韻を閱するに(卷四)
 更に明徵を得たり、云く、宋韻に、俱に震の字無し、增韻補
 入して漢書及び衛恆の字勢を引きて證と爲す、此れは是
 れ三聲の字、原と必ずしも補はされ、唐宗の張説が雀鼠
 谷に扈從するに答ふる詩を讀むに及びて、此の字有り、
 「陝に背きて關山險に、汾に横つて鼓吹震ふ、草は陽谷に
 依つて變じ、花は北巖の春を待つ、則ち直に是れ唐人律
 韻中の字、而して諸韻本に震を刪り振を存す、誤れり、是

張說扈從雀鼠谷詩、有此字、背陝關山險、橫汾鼓吹震、草依陽谷變、花待北巖春、則直是唐人律韻中字、而諸韻本刪震存、振誤矣、由是觀之、雖近體、亦押震字入真韻、況古韻乎、恐後進見家嚴詩者、或有此惑、故審之、又通韻同卷云、吟字爲真之上聲、亦三聲字、而增韻補入、今亦從之、以唐律韻、原有此字、如孫逖奉和李右相賞會昌林亭詩、地勝林亭好、時清宴賞頻、百泉榮草木、萬井布郊畛、此亦不可不知。

對偶

玉屑卷一引白石詩說云、花必用柳對、是兒曹語、若其不切、亦病也、拜經樓詩話卷一引詩律蒙告云、律詩中有活對者、有不對者、必其用

れに山つて之れを觀れば、近體と雖ども、亦震の字を押して眞の韻に入る、況や古韻をや、後進にして家嚴の韻を見る者、或は此の惑あるを恐る、故に之れを審にす、又通韻同卷に云ふ、吟の字は、眞の上聲と爲す、亦三聲の字、而して增韻に補入す、今亦之れに従ふ、唐の律詩を以てするに、原と此の字有り、邇邇の李右相が昌林亭に賞會するを奉和する詩の如き、地勝にして林亭好し、時清くして宴賞頻なり、百泉草木を榮り、萬井郊畛に布く、此れも亦知らざるべからず。

對偶

玉屑卷一に、白石詩說を引きて云ふ、花に必ず柳を以て對するは、是れ兒曹の語、若し其の切ならざるも亦病なり、拜經樓詩話卷二に、詩律蒙告を引きて云ふ、律詩中に活對といふ者あり、對せざる者あり、必ず其の用意の處

意處也、意活則詩亦從之、小有參差、不害、然其上下文必有整齊之句、無通篇活對者、律詩中二聯、往往一聯寫情、一聯卽景、情聯多活、活則神氣生動、景聯多板、板則格法端詳、此一定之法、亦自然之文也、約按、蒙告所論、雖不可必泥、大略若此、不可不知。

對句有以義對者、少陵投贈哥舒開府翰、智謀垂睿想、出入冠諸公、贈陳二補闕、獻納開東觀、君王問長卿、銅瓶銅瓶未失水、百丈有哀音、觀安西兵過、赴關中待命、談笑無河北、心肝奉至尊、有感慎勿吞青海、無勞問越裳、城上八駿隨天子、群臣從武皇、蜀相三顧頻煩、天下計、兩朝開濟老臣心、諸將朝廷衰職、誰爭補、天下軍儲不自供、卽事黃鸞過、水翻

なり、意活すれば、則ち詩も亦之れに従ふ、少しく參差あるも害あらず、然れども、其の上下の文必ず整齊の句あり、通篇活對の者無し、律詩中の二聯、往々一聯は情を寫し、一聯は景に卽く、情聯多く活す、活すれば、則ち神氣生動す、景聯多く板す、板すれば、則ち格法端詳、此れ一定の法、亦自然の文なり、約案するに、蒙告の論する所、必しも泥むべからずと雖も、大略此の若し、知らざるべからず。

對句には、義を以て對する者あり、少陵の哥舒開府翰に投贈するに、智謀睿想を垂れ、出入諸公に冠たり、陳二補闕に贈るに、獻納東觀を開き、君王長卿を問ふ、銅瓶に銅瓶未だ水を失せず、百丈哀音有り、安西の兵過ぎて、關中に赴きて命を待つを觀るに、談笑河北無し、心肝至尊に奉ず、感有るに、慎みて青海を吞むこと勿れ、越裳を問ふことを勞する無し、城上に、八駿天子に隨ひ、群臣武皇に従ふ、蜀相に、三顧頻に煩す、天下の計、兩朝開濟す、老臣の心、諸將に、朝廷の衰職誰か争でか補はむ、天下の軍儲自ら供せず、卽事に、黃鸞水を過ぎて翻つて廻り去り、燕子泥を銜んで、漏へども妨げずと、是れなり、字を以て對す

廻去。燕子銜泥濕不妨。是也。有以字對者。贈翰林張四學士。無復隨高鳳。空餘泣聚螢。秦州雜詩。牽牛去幾許。宛馬至今來。黃草萬里秋。風吹錦水。誰家別淚濕。羅衣送楊六判官使西蕃。子雲清自守。今日起爲官。詩醇仇兆鰲曰。羅大經云。假雲對日。兩句一意。按元白劉賓客輩。汝洛唱和集。九日送人。清秋方落帽。子夏正離群。假對之工。本於杜句。是也。有數字不對數字者。少陵早起。一邱藏。曲折緩步有躋攀。秦州雜詩。一望幽燕隔。何時郡國開。又老樹空庭得。清渠一邑傳。寓目一縣蒲。菊熟秋山首。藉多。天末憶李白。鴻雁幾時到。江湖秋水多。寄李十二白。聲名從此大。汨沒。朝伸能畫。每蒙天一笑。復似物皆春。黃

る者あり。翰林張四學士に贈るに、復高鳳に隨ふ無し、空しく餘す聚螢に泣くを秦州雜詩に、牽牛去ること幾許ぞ、宛馬今に至つて來る黃草に、萬里の秋風錦水を吹き、誰が家の別淚ぞ羅衣を濕す、楊六判官の西蕃に使するを送るに、子雲清自ら守り、今日起つて官と爲る、詩醇に仇兆鰲曰く、羅大經云ふ、雲を假りて日に對す、兩句一意、按ずるに、元白劉賓客の輩、汝洛唱和集、九日人を送るに、清秋方に帽を落す、子夏正に群を離る、假對の工、杜句に本くと、是れなり。

數字、數字に對せざる者あり、少陵の早起に、一邱曲折を藏し、緩步躋攀有り、秦州雜詩に、一望幽燕隔たり、何れの時か郡國開かむ、又、老樹空庭に得、清渠一邑に傳ふ、寓目に、一縣蒲菊熟し、秋山首藉多し、天末に李白を憶ふに、鴻雁幾字か到らむ、江湖秋水多し、李十二白に寄するに、聲名此れ従り大に、汨沒一朝に伸ぶ、能畫に、天の一笑を蒙る毎に、復物皆春なるに似たり、黃草に、萬里を誰家に對す、上に見ゆ、陸務觀の野饋に、此の生復三釜を營まず、一飽何ぞ曾て八珍を羨まむ、郊居に、行藏他年の看に付

草萬里對誰家、上見陸務觀野饋、此生不復營、
 三釜、一飽何曾羨、八珍郊居、行藏要付他年、
 看富貴真堪一笑、無遊山西村、山重水複疑、
 無路、柳暗花明又一村、是也。

一一或對數字、或不對數字、玄宗春臺望、初
 鶯一一鳴、紅樹歸雁雙雙去、綠洲青蓮永王
 東巡歌、戰艦森森、羅虎士、征帆一一引、龍駒、
 徐黃螢、一點通黃卷字、輕輕化出綠蕪叢、
 東坡送賈訥倅肩、試看一一龍蛇舞、更聽蕭
 蕭風雨哀、陸務觀遊法雲寺、陰陰山徑人稀、
 到、一名花手自栽、曉坐空窠時、時間鼠齧、
 小窓一一送鴉翻。

容齋續筆三卷云、唐人詩文、或於一句中、自成
 對偶、謂之當句對、蓋起於楚辭、蕙蒸蘭積、桂

するを要す、富貴真に一笑に無するに堪へたり、山西の
 村に遊ぶに、山重り水複りて、路無きかと疑ひ、柳暗く花
 明にして又一村と、是れなり。

一一或は數字に對し、或は數字に對せず、玄宗の春臺望
 に、初鶯一一紅樹に鳴き、歸雁雙雙綠洲に去る、青蓮の永
 王東巡の歌に、戰艦森々虎士を羅ね、征帆一一龍駒を引
 く、徐黃の螢に、一點通す黃卷の字、輕輕化し出づ、綠蕪
 叢、東坡の賈訥が肩に倅たるを送るに、試に看よ一一龍
 蛇の舞ふを、更に聽く蕭々風雨の哀むを、陸務觀の法雲
 寺に遊ぶに、陰々たる曲徑人稀に到り、一名花手自ら
 栽り、曉坐に、空窠時々鼠の齧むを聞き、小窓一一鴉の翻
 るを送る。

容齋續筆(卷三)に云ふ、唐人の詩文、或は一句の中に於て、
 自ら對偶を成す、之れを當句對と謂ふ、蓋し楚辭の蕙蒸
 蘭積、桂酒椒漿、桂權蘭積、剡冰積雪より起る、杜詩に、小院

酒椒漿、桂櫂蘭楫、劉冰積雪、杜詩、小院回廊
 春寂寂、浴鳥飛鷺、晚悠悠、書箴藥裏封、蛛網、
 野店山橋送馬蹄、戎馬不如歸馬逸、千家今
 有百家存、犬羊會爛熳、宮闕尙蕭條、百萬傳
 深入、寰區望匪他、象牀玉手、萬草千花落絮
 遊絲、隨風照日、竹寒沙碧、菱刺藤梢、長年三
 老、振柈開頭、門巷荆棘底、君臣豺虎邊、高江
 急峽、翠木蒼藤、古廟杉松、歲時伏臘、三分割
 據、萬古雲霄、伯仲之間、指揮若定、桃蹊李徑、
 梔子紅椒、庾信羅含、春來秋去、楓林橘樹、複
 道重樓之類、不可勝舉、李義山一詩、其題曰、
 當句有對、云、密邇平陽、接上蘭、秦樓鴛瓦漢
 宮盤、池光不定、花光亂、日氣初涵、露氣乾、但
 覺遊蜂饒舞蝶、豈知孤鳳憶離鸞、三星自轉

回廊春寂々、浴鳥飛鷺、晚に悠々、書箴藥裏、蛛網に封ぜら
 れ、野店山橋馬蹄を送る、戎馬は歸馬の逸するに如かず、
 千家今百家の存する有り、犬羊會て爛熳、宮闕尙蕭條、百
 萬傳深く入り、寰區望み他に匪ず、象牀玉手、萬草千花、落
 絮遊絲、風に隨ひ日に照さる、竹寒く沙碧り、菱刺藤梢、長
 年三老、柈を振し頭を開く、門巷荆棘の底、君臣豺虎の邊、
 高江急峽、翠木蒼藤、古廟杉松、歲時伏臘、三分割據、萬古
 雲霄、伯仲の間、指揮若し定らば、桃蹊李徑、梔子紅椒、庾信
 羅含、春來秋去、楓林橘樹、複道重樓の類、勝けて舉ぐ可か
 らず、李義山の一詩に、其の題に當句對有りといふに云
 ふ、平陽に密邇し上蘭に接す、秦樓の鴛瓦漢宮の盤、池光
 定らず花光亂れ、日氣初めて涵して露氣乾く、但だ覺ゆ
 遊蜂舞蝶饒きを、豈に知らむや孤鳳の離鸞を憶ふを、三
 星自ら轉じて三山遠く、紫府程遙にして碧落寬なり、其
 の他の詩句中に、青女素娥を月中霜裡に對し、骨肉書題
 を惡蘭蹊徑に對し、花鬢柳眼を紫蝶黃蜂に對し、重吟細
 把を已落猶開に對し、念鼓疎鐘を休燈滅燭に對し、萬戶

三山遠、紫府程遙、碧落寬、其他詩句中、如青
 女素娥對月中霜裡、骨肉書題對蕙蘭蹊徑、
 花鬢柳眼對紫蝶黃蜂、重吟細把對已落猶
 開、急鼓疎鐘對休燈滅燭、萬戶千門對風朝
 露夜、如是者甚多、約案、玉屑謂之就句對、西
 溪叢語亦載之、而俱不如隨筆之詳、余更贅
 數聯、少陵下峽、不知雲雨散、虛費短長吟、夔
 府詠懷、甘子陰涼葉、茅齋八九椽、李建勳蝶
 潛被燕驚還散亂、偶因人逐入簾幃、歐陽伯
 威詩、有客過門湖海上、隔籬呼酒咄嗟間、明
 杜穆南濠詩話所載、沈啓南落花、送雨送春
 長壽寺、飛來飛去洛陽城、此格往往見之、而
 如雲雨與短長對、散亂與簾幃對、則初學或
 不知、故示之。

千門を風朝露夜に對するが如き、是の如き者甚だ多し、
 約案するに、玉屑に、之れを就句對と謂ふ、西溪叢語にも
 亦之れを載す、而して俱に隨筆の詳なるに如かず、余更
 に數聯を贅す、少陵の峽を下るに、知らず雲雨の散ずる
 を、虚しく費す、短長の吟、夔府詠懷に、甘子陰涼の葉、茅齋
 八九椽、李建勳の蝶に、潛に燕に驚かされて還た散亂
 す、偶人の逐ふに因つて簾幃に入る、歐陽伯威の詩に、客
 有り門を過る湖海上、籬を隔て、酒を呼ぶ咄嗟の間、
 明の杜穆の南濠詩話に載する所の沈啓南の落花に、雨を
 送り春を送る長壽寺、飛來り飛去る洛陽城、此の格、往々
 之れを見る、而して雲雨と短長と對し、散亂と簾幃と對
 するが如きは、則ち初學或は知らず、故に之れを示す。

野客叢書十卷云、杜牧之詩曰、一千年際會、三萬里農桑、又曰、四百年炎漢、三十代宗周、二里遺堦、八九所高邱、孟郊詩曰、藏千尋布水、出十八高僧、元微之詩曰、庾公樓悵望、巴子國生涯、賈島詩曰、一千尋樹直、三十六峯寒、又三卷云、魯直詩曰、管城子無食、肉相、孔方兄有絕、交費、人謂此體魯直、窺見、不知唐詩此體甚多、張佑曰、賀知章口徒勞、說孟浩然身更不疑、李益曰、柳吳興近無消息、張長公貧苦寂寥、貫休曰、郭尙父休誇塞北、裴中令莫說淮西、杜荀鶴曰、養一箔蠶、供釣線、種千竿竹、作漁竿、皆此句法也、讀之似覺齟齬、其實協律、玉屑三卷引漁隱叢話云、靜愛竹時來、野寺獨尋春、偶過溪橋、俗謂之折句、盧贊元

野客叢書卷十に云ふ、杜牧之の詩に曰く、一千年の際會、三萬里の農桑、又曰く、四百年の炎漢、三十代の宗周、二三里の遺堦、八九所の高邱、孟郊の詩に曰く、千尋の布水を藏し、十八の高僧を出す、元微之の詩に曰く、庾公樓の悵望、巴子國の生涯、賈島の詩に曰く、一千尋の樹直く、三十六峯寒し、又卷三云ふ、魯直の詩に曰く、管城子肉を食ふの相無く、孔方兄交を絶つ、の書有り、人は謂ふ、此の體魯直翹めて見はずと、知らず唐詩に此の體甚だ多きを、張佑曰く、賀知章口徒に説を勞す、孟浩然身更に疑はず、李益曰く、柳吳興近消息無く、張長公貧にして、苦だ寂寥、貫休曰く、郭尙父塞北に誇るを休めよ、裴中令淮西を説くこと莫れ、杜荀鶴曰く、一箔の蠶を養ふて釣線に供し、千竿の竹を種えて漁竿と作すと、皆此の句法なり、之れを讀むに、齟齬を覺ゆるに似たり、其の實は律に協ふ、玉屑卷三に、漁隱叢話を引きて云ふ、靜に竹を愛して時に野寺に來り、獨春を尋ねて、偶溪橋を過ぐ、俗に之れを折句と謂ふ、盧贊元の雪の詩に云ふ、想ふ行客の梅橋の滑なるを過ぎむを、老農麥隴の乾くを憂ふるを免るは、此の格に效ふなり、余も亦嘗て云ふ、鸚鵡の杯は清濁を酌むに宜し、麒麟閣は丹青を畫くに懶しと、約も亦數聯を

雪詩云、想行客過梅橋滑、免老農憂麥隴乾、效此格也、余亦嘗云、鸚鵡杯宜酌清濁、麒麟閣懶畫丹青、約亦舉數聯、雍陶河陰新城、五里似雲根不動、一重如月暈長圓、陸務觀遣興、愁袞袞來疑、有約、春堂堂去恨、無情、足少師詩、奴愛才如蕭穎士、婢知詩似鄭康成、元徐、舫月色、照來雲母屏無迹、穿入水精簾、有光、朝鮮李吉祥詩、嗜酒過三杯、止渴題詩無一句全工、案此奇僻句格、蓋偶然所得、而非強爲之也、又陸龜蒙祕色越器詩、好向中宵盛、沉澹共粘中散、鬪遺杯、韓偓新上頭詩、爲愛好多、心轉惑、遍將宜稱問、傍人散句中用之者不多。

或問曰、從來本來等字、何字對之、答曰、此是

舉げむ、雍陶の河陰の新城に、五里雲根の動かさるに似たり、一重月暈の長へに圓なるが如し、陸務觀の遣興に「愁袞々として來る約有るか」と疑ひ、春堂々として去る情無きを恨む、少師の詩を足すに、奴も才を愛して蕭穎士の如く、婢も詩を知つて鄭康成に似たり、元の徐舫の月色に、雲母屏を照し來つて迹無く、水精簾に穿ち入つて光有り、朝鮮の李吉祥の詩に、酒を嗜んで三杯に過ぎ、渴を止め、詩を題して一句も全く工なる無し、案するに、此の奇僻の句格、蓋し偶然得る所、而して強ひて之れを爲すに非ざるなり、又、陸龜蒙の祕色越器の詩に、中宵に向つて沉澹を盛り、粘中散と共に遺杯を鬪はす可し、韓偓の新上頭の詩に、愛好の多きが爲に心轉惑ふ、遍く宜稱を將て傍人に問ふ、散句中に之れを用ふる者多からず。

或人問ふて曰く、從來本來等の字、何の字か之れに對せ

虛字、無字不對、乃就陸務觀詩、拈出數聯、示
 之、今贅於此、其梅花、從來過酒千鍾少、此外
 評詩四海空、社前一夕、未昏輒寢、中夜乃得
 寐、三更自吟、元無睡、萬事從來、忌有心、離嘉
 川宿平羌、本來信手忘工拙、卻爲無心、少怨
 恩、奉乞奉祠、從來幸有不材木、此去直爲無
 事僧、遣興絕世、本來希獨立、刺天不復計、群
 飛、秋晚閑步隣曲、歸來早覺人情好、對此彌
 將世事輕、作夢驃騎向來求、作佛淮南末路
 望、登仙龜堂晚興、今日掩關眞佚老、向來涉
 世亦遺名、溪上避暑、世上漫言天愛酒、古來
 寧有地埋憂、

用重疊字

玉屑卷六引三山老人語錄云、白樂天寄劉夢

八 答へて曰く、此れは是れ虛字、字として對せざるこ
 と無し、乃ち陸務觀の詩に就きて、數聯を拈出して之
 れに示す、今此に贅す其の梅花に、從來酒を過して千鍾
 も少し、此の外詩を評して四海空し、社前一夕、未だ昏た
 らざるに輒ち寢ぬ、中夜乃ち寐ぬることを得たるに、三
 更自ら吟ふ元と睡無きを、萬事從來心有るを忌む、嘉州
 を離れて平羌に宿するに、本來手に信せて工拙を忘る、
 卻つて無心なるが爲に怨思少しを奉じて奉祠するに
 「從來幸に不材の木有り、此を去つて直に無事の僧と爲
 る」遣興に、世を絶つて本來獨立を希ふ、天を刺して復群
 飛を計らず、秋晚隣曲に閑歩するに、歸來早く覺ゆ人情
 の好きを、此に對して彌、世事を將つて輕んず、作夢に、驃
 騎向來佛と作りむと求め、淮南末路仙に登るを望む、龜
 堂晚興に、今日關を掩ふ眞に佚老、向來世を涉るも亦名
 を遺る、溪上避暑に、世上漫に言ふ天の酒を愛すと、古來
 寧ぞ地の憂を埋む有らむや、

重疊字を用ふ

玉屑卷六に三山老人の語錄を引きて云ふ、白樂天の劉

得詩有歎。蚤白無兒之句。劉贈詩曰。莫嗟華髮與無兒。卻是人間久遠期。雪裡高山頭白蚤。海中仙菓子生遲。于公必有高門慶。謝守何煩曉鏡悲。幸免如斯分非淺。祝君長詠夢熊詩。注云。高山本高。于門使之高。二字義殊。古之詩流曉。此唐人忌重疊用字者甚多。清虞兆活。天香樓偶得。駁劉詩曰。以高門對曉鏡。又似門自高矣。若云使門高。則豈可曰使鏡曉耶。要之作詩。偶有複字。初無傷于大雅。僕欲謹守繩墨。則雖晉同異義之字。亦仍須避之。爲妙耳。約案。虞氏爲得。古人詩一聯中。且猶有重字者。曹松南海。無地不同方覺遠。共天無別始知寬。范成大答子文雨。百年子莫占元緒。萬法吾今付子虛。楊萬里立春新

夢得に寄する詩に「蚤白無きを歎ずる」の句あり、劉詩を贈りて曰く「嗟する莫れ華髮と兒無きと、卻つて是れ人間久遠の期、雪裡の高山頭の白きこと蚤、海中の仙菓子を生すること遅し、于公必ず高門の慶有り、謝守何ぞ曉鏡の悲を煩さむ、幸に斯くの如きを免る分淺きに非ず、君を祝す長へに熊を夢みる詩を詠せむことを注に云ふ、高山本と高し、于門は、之れをして高からしむ、二字義殊なり、古の詩流此れを曉る、唐人重疊字を用ふるを忌む者甚だ多し、清の虞兆活の天香樓偶得に劉の詩を駁して曰く、高門を以て曉鏡に對す、又門自ら高きに似たり、若し門をして高からしむと云はゞ、則ち豈に鏡をして曉けしむと曰ふべけむや、之れを要するに、詩を作るに、偶複字有るも、初めより大雅に傷れ無し、僕し繩墨を謹守せむと欲せば、則ち晉同じく異義の字と雖ども、亦仍須らく之れを避くるを妙と爲すべきのみ、約案するに、虞氏得たりと爲す、古人の詩一聯の中、且猶重字する者あり、曹松の南海に、地として同じからざることを無く方めて遠きを覺ゆ、天と共に別無く始めて寬きを知る、范成大の子文雨に答ふるに、百年子元緒を占ふこと莫れ、萬法吾今子虛に付す、楊萬里の立春新晴に、春到つ

晴春到更晴誰不喜時遷不道老相催明喬
 世寧馬湖登覽千秋賓一國一統見今王是
 也蓋妄用之固不可不得已而後用之無妨
 焉又枕山樓詩話云唐詩往往有重字者亦
 以此字萬萬不可移易故寧重之弗使用字
 不穩今詩中字多有重者人病之則以唐爲
 藉口初學切宜避之。

詩語錯綜

釋大典詩語解論詩語多錯綜而其所舉大
 抵人之所知也余別得其尤者一二今錄以
 示初學少陵詩絕代有佳人有字當在絕代
 上唐詩洛陽訪才子此用賈生事訪字當在
 洛陽上樂天詩其中綽約多仙子多字當在
 綽約上此皆欲造語無齟齬也或譯白詩以

て更に晴る誰か喜ばざらむ時遷つて道はず老の相催す
 を明の喬世寧の馬湖登覽に千秋一國に賓し一統今王
 を見る是れなり蓋し妄に之れを用ふれば尙より不可
 なり已むを得ずして而して後に之れを用ふれば妨げ
 無し又枕山樓詩話に云ふ唐詩往々重字する者あり亦
 此の字萬々移易すべからざるを以てなり故に寧ろ之れ
 を重ぬるも字を用ふること穩かならしめず今詩中字
 多く重なる者あり人之れを病ましむれば則ち唐を以
 て藉口と爲す初學切に宜しく之れを避くべし。

詩語錯綜

釋大典の詩語解に詩語に錯綜多きを論ず而して其の
 舉ぐる所は大抵人の知れる所なり余別に其尤なる者
 一二を得たり今錄して以て初學に示す少陵の詩に絶
 代の佳人有り有の字當に絶代の上に在るべし唐詩に
 洛陽の才子を訪ふ此れ賈生的事を用ふ訪の字當に洛
 陽の上に在るべし樂天の詩に其中綽約たる仙子多
 し多の字當に綽約の上に在るべし此れ皆造語齟齬無
 きを欲するなり或は白詩を譯して綽約の二字を以て

1
緯約二字係上句樓閣實可發一大胡盧。

上の句の樓閣に係く實に一大胡盧を發すべし。

詩格刊誤卷下終

以詩代跋

余著此篇，同志相謀，而鐫刻之。今姑錄其詩一二首，以存姓名。近藤好古、三州大濱人，其戲贈愛菊人詩云：陶氏黃花周氏蓮，後人學癖不尊賢。吾園自是花叢足，不用區區別樣憐。瘦菊詩折殘籬下，兩三枝霜冷疎疎弄。瘦委骨格清高何所似，淵明乞米句成時。士剛字仲毅，好古之子，其乞梅詩：梅花開已動，芳塵詩卷知。君句句新，莫惜折來分馥郁。一枝能作兩家春，豆腐詩性清，不擇都兼鄙。味淡何論富，與貧恰似芙蓉山上雪。清寒一片四時新，躍字于淵好古之姪。驚塚人，其新年作黃鸝幾轉報春來，笑對瓶中一朵梅。最喜家翁猶健在，八句有二醉椒杯。又每值新正，嘆逝川強顏，又對壽觴前。差吾志業空寥落，一事無成四十年。季武字君城，士剛之弟，出冒字都野氏。其古意詩：非愛去歲花，非惡今歲花。歲歲花相似，良人不在家。春江小

景詩碧蘆洲外兩三家，欸乃聲中帆影斜。無限煙波春欲晚，一雙燕子掠楊花。閑中書事詩：蕭然一榻坐茅亭，手折寒梅插石瓶。爐火煙殘僧未到，松風窓裡讀茶經。釋周觀號乙洲住藤川驛，傳誓寺其題。十六羅漢圖詩：渡河猛虎就閑眠，出鉢蒼龍上九天。奇戲徒能驚俗目，元來大道別相傳。客中作江上春先游子去，江頭水似客愁多。武陽城裡啼鵲急，奈此茫茫遠夢何。對月懷舊詩：長天如水月華開，往事茫茫挽不回。大堰河邊攀柳去，小天台下別花來。釋閑山姓森田江戶人，其山居夏夜詩：到處人間皆火宅，緇衣幾歲臥松巒。月明夏夜無三伏，一片禪心鐵石寒。咏弱柳詩：今年春色較相差，二月林間未著花。明月似憐吟榻冷，故將柳影上窓紗。讀書偶題詩：黃葉青苔欲沒堦，唔咿不斷一茅齋。人家不必問貧富，纔著此聲元自佳。釋桃江住駒籠天眼寺，其閏四月詩：一夏今年十二旬，閏餘好在麥秋辰。

風涼日永閑無事，渾屬禪房默坐人。山中夜涼詩，松風吹月透樓心。
 度嶺疎鐘響半沉，檢曆三庚猶未伏。先欣涼味屬雲林，夏川韡字鄂
 叔彥根人。其春晚詩紛紜春事等閑過，宿醉醒來一碗茶。漠漠餘香
 猶引蝶，疎疎嫩葉未藏鴉。夏夜極涼詩，未秋蟲韻響籬邊。明鏡新磨
 雨後天，句不求奇詩易穩。吟毫帶露掃雲箋。

大正九年一月二十日印刷
大正九年一月廿三日發行

日本特許叢書 第一卷

非賣品

編輯者

池田四郎次



發行者

立田義元

印刷者

高木鳥三

印刷所

株式會社 秀英會 第一工場



發行所

東京市神田區
小川町一番地

文會堂書店

電話神田三二一六番
接發東京三五一三番